

其の軍みな逼惱して安からず、水を掬して誦すること七徧して、四方に散して幢却て引き來れ、即ち安隱なることを得ん。

又た箭を除かんと欲はば、油を取て加持すること二十一徧して上に塗れ箭即ち出でん。又た發吒の字を除いて難産の婦人に、水或は油を加持して與へ飲ましめ及び塗れ、即ち産し易からん。

又た土塊を加持すること一徧して、彼の人の形を書いて口の上に安せよ、即ち其の讒説を禁じ及び論議に勝つことを得ん、解せんと欲はば發吒の字を并へて礮石を加持して上に安せよ、即ち解せん。

又た白芥子を加持すること一百八徧せよ、即ち鈎召を成せん、以て水を掬して加持すること七徧して之を散せよ、即ち發遣を成せん、此の一字佛頂輪王は障礙なし、一切の教に依て相應して作法せよ。

又の法。先事の法を作せ、河岸或は一樹、或は山間、或は池の側に於て、或は助伴あるにも、或は助伴なきにも乞食して寂黙として慈心と相應して三時に罪を説き、意常に勇健にして怯弱なることなく、心常に捨施を樂ひ、自ら灌頂を作して加護を作し

(一)説き 懺するの意。

甲を被方隅壇界を結し、眞言水を以て衣に灑ぎ、塗香・華鬘・燒香・飲食・燈明までに眞言せよ、迎請・奉送等一切の時に作して、十萬徧を誦して則ち終竟れよ、先事を作して後に若し忿怒して他を視ば、彼れみな癩痢に持せられて則ち狂亂することを得て、身自在ならじ、若し復た念誦して瞻視せば則ち身の上を瘡疱に焼かれて則ち死に至らん、此は是れ無礙なり。或は右の脚を以て頭指を以て地を捺して而も誦せば、則ち刹那の頃に空より火を雨らして、一切處大いに焼けん、然も慈心を起して念誦せば則ち解せん、是の如く忿怒して誦すれば他の軍を推き、能く一切の病を生じ驅擯し殺害し枯竭し迷亂し狂惑し、癩痢と魅と瘡とくまはに持され、肢分斷じ及び逼惱せしめん、若し此の如くして誦せば、一切空しからずしてみな成就を得ん、若し淨意慈心を起して誦すれば、即ちみな止息することを得ん。

又の法。若し成就せんと欲はば、神通月の分に於て(一)河の交會の處に於て、(二)綠生胎藏の窟塔波を作りて、塔の前に於て像を安し、或は水を飲み變を食し、遏迦木を以て酥に搯して焼いて、護摩十萬徧せよ、即ち地動せん、其の地を盡して内に(三)王たらん、或は流星あり或は隠れ自在に雲雨し、大伏藏を得、光明を見、意樂のまゝに轉依し壽命

(一)河の交會 河の落合ふ處。  
(二)綠生胎藏 起法身の偈を書き塔に入る、是れなり、宜しく梵偈を書く可し。  
(三)王 和・高二本主に作る。

一劫ならん、一切有情沮壞すること能はず、大明王と爲て一切の方に熾盛ならん、若し能く普く一切に徧入することを見ん、此の成就の像法は勇志少なき者は作すべからず、慧少く悲なき者は作すべからず、雜穢にして資糧を積集せざる者は作すべからず、尊師を輕毀し麤惡語し欺誑し散動の心あり、及び曼荼羅を見ざる者、多く作務を營む者、事を作さんと希望する者は作すべからず、若し是の如くの惡を離ることあらん者は、是の如くの功德久しからずして當さに成就すべし、若し如前に異して作す者は則ち癡狂して成就せず。

(二) 摩羅殺なり。

又の法。若し菩薩藏及び菩提心を發す加行を誘毀し、佛教を誘する者を(三) 摩囉せんと欲はば、像の前に於て或は人の髑髏の前にして、人の髑髏を以て末して彼の人の形を作り、面を北に向へて除摩除那に於て、或は河に於て或は池に於て乞食して寂黙し、其の形忿怒して、左の脚を以て踏み、小指を以て刺して誦すること七日、日に三時せよ、即ち大瘡に持せられて徧身に瘡疱あり、死に至て疼痛を受け、即ち吃哩爹を見ん、大指の節の如く熾盛の火焰あり、金光明の聚の如くならん、指を以て(三) 期剋して吞まんと欲する勢を作し、諸方に徧して聲を以て告げよ、某甲我をして來て汝を害せ

(三) 期剋  
れく。さしま

しむることを爲さしむと。是の如くの語を作す時、彼見已んば即ち血を吐いて死せん。若し佛法に於て淨信を生せば則ち忿怒を息めよ、若し忿怒を息めて慈心を生ずれば、即ち持明者急速に香水を以て佛像を灌沐し、念誦して慈心を起せ、須臾の頃に水を以て其の疼痛に灑ぐがごとく、燒然し、みな止息することを得て復た故の如きことを得ん、善男子、菩薩方便を以て三寶を損する者に於て作すべし。

又の法。先事の法を作せ、一切有情を利益せんと思惟し著を離れ怖畏なく怯弱ならず勇健にして下劣ならざる心をもて、八戒を持し灌頂を得る者、三昧耶を知り常に如來並に菩薩聲聞を修念し、罪を説き隨喜する者、像を安して除摩除那に於て身に赤衣を著し、除摩除那の華を以て身及び頭を莊嚴し、及び除摩除那の食を食し、念に住して限りなく念誦せよ、方隅を護し甲冑・牆等の儀軌を失念せざれ、是の如く念誦するに初七日せば恐怖の惡形あて、牙齦くはが熾然として豎てる髪あり、或は一足・兩足・三足或は兩臂・三臂・四臂或は八臂或は兩頭・三頭・四頭を見れば、則ち持明者忿怒して誦せよ、其の時大風の大雲を吹くが如くに、即ち四方に馳散せん、即ち慈心を起せ、第二七日には即ち女人ありて現せん、悅意端正にして瓔珞をもて身を嚴り、可愛の色を示現せん、見已

て念誦せんに慈心を起して不淨觀を作せ、即ち滅して現せじ、第三七日には即ち毗那夜迦惡形の羅刹を見ん、寂靜を作して來り、來り已て是の言を作さん、我れ何爲か作さんと。修行者は是の言を作すべし奉教せよと、則ち使者と爲て使介する所みな教に依て成辨せん、其の魔若し忿怒心を作して修行者を觀ば則ち滅壞せん、夫れ先事を作す者は、河或は蓮華ある池、或は一樹或は大華園に於て而も作すべし。

音釋

蓋昨舎郎果の切、鍵巨假招苦洽の切、奴協の切、齒郎古の切、地に物を置居良私列、緋補耕の切、繩  
すな、類、虚對の切、孽、魚列、居約の切、企、去、經、普末、詔、莫、百、直、又、の、切、給、半、舍、豎、遠、協、の、切、燃、乃、珍、の、切、指  
積、古、猛、の、切、尺、沼、の、切、窠、堵、波、梵、語、なり、此、に、方、墳、の、切、戟、訖、逆、の、切、王、月、の、切、杭、古、行、の、切、稻、の、結、さ、籤  
七、寒、女、王、の、切、樺、胡、化、の、切、癩、痢、癩、は、多、年、の、切、癩、は、音、徒、冬、の、切、爹、端、那、昨、何、の、切、(朱)齒、齊  
の、切、齒、嚙、なり、樺、木、なり、癩、痢、癩、は、狂、病、なり、疹、痛、む、なり、爹、端、那、昨、何、の、切、(朱)齒、齊

### 國譯一字奇特佛頂經卷上終

### 國譯一字奇特佛頂經卷中

唐特進試鴻臚卿三藏沙門大廣智不空 詔を奉じて譯す

#### 成就毗那夜迦品第五

屏處に於て佛像を安し、一切有情に於て悲愍の心を起し、神通月を取て三時に澡浴し、三時に衣を換へて特別に一千八徧を誦して、乃し月の圓滿するに至れ、其の終日晝夜食せずして云一の僧伽梨衣を作れ、新帛を以て淨く洗ひ、妙たに染して善く縫ひ量に應せよ、一切の香を以て塗り、香泥を以て一の壇に塗りて袈裟を壇中に安し、酥燈一千八盞を然し、一切の佛菩薩に於て全身を以て禮をなして是の言を作せ、我れ菩薩の行を行すと。是の如くの心を發して結跏趺坐して、右の手を以て袈裟を按して念誦し了れ、虚空に飛騰し身初日の暉の如くなることを得るに至らん、一切の佛菩薩を禮し一字頂輪王の名を稱せよ、纔かに名を稱せば超勝することなき力を得て、金剛手菩薩のみもとに往詣せん、一切の天・龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等みな

云一の僧伽梨云  
是は大衣なり  
縫量に大衣七條  
五條等各分量あり  
但し長身と云ふて  
身の長短に隨て量  
を取ること五分に  
出でたり。

禮を作して是の言を作さん、我等何爲か作さんと。若し僧伽梨衣を披けば、彼等地に倒れん、復た心を以て起しめよ。

又の法。先事の法を作せ、山及び池の側に於き、或は餘處にしても、或は菜麥を食し或は乳を飲み、或は乞食して佛を禮し罪を説き、功德を隨喜することを作して二十浴叉を誦せよ、所爲所作みな成就することを得。

又の法。殺害を禁止せしめ、彼をして昏睡せしめ器仗を禁せんと欲はば、四印曼荼羅を畫け、或は蓮華廣大曼荼羅を畫き、力に隨ひて飲食を供養し、一髻羅刹尊の處に於て門に對して青旛を作れ、其の旛は三楸の金剛杵の形に作れ、旛の上に於て自の嚙地囉を以て三股金剛杵を畫け、中に於て一字頂輪の眞言を書き、並に輪王の形狀を畫いて竹竿に繫げよ、竿の下に於て髑髏の末を取て壇を作ること、金剛杵の形の如くして中に於て護摩の爐を作れ、爐の四邊に獨股金剛杵をもて相連ねて圍遶し、遏迦木を以て火を然き、摩奴沙の骨と及び嚙地囉と並に毒藥とを用て相和して、加持すること一徧一燒して乃し一百八徧に至れ、軍陣の前に對せんに、即ち彼の軍衆旨の如く迷亂して、一切の器仗手より落ち、並にみな禁止せん。

(二) 嚙地囉。此には血さいふ。

(三) 金剛杵。獨股形なり、界道も獨股を以て之を界す

(二) 五肢。五體なり。

又の法。他の軍をして墮落せしめんと欲はば、醫人をして五肢より血を取らしめて、爐に於て護摩を作せ、目を瞬がす頃に彼の軍みな墮落することを得て則ち意に隨ひて縛せられん、若し息災せしめんと欲はば、酥蜜を取て龍華に和して護摩せよ、即ち安樂なることを得ん。

又の法。他の敵を摧かんと欲はば念誦し、他をして近づき來らしめよ、既に近づかば、或は前の曼荼羅及び彼の旛を作りて、彼の軍の前に於て裸體にして髮を散し、被甲及び旛の印を結んで三時に各の一百八徧を誦し、摩奴沙の肉を燒き、及び嚙地囉を毒に和して護摩せよ、行者は夜牛皮に眠れ、或は意に隨ひて眠れ、是の如く作し已んば、だご設令彼れ俱摩羅天・梵天・摩醯首羅及び帝釋に事へて彼の營を加護せしめん者も、七日の中に於て彼れ決定して更互ひに相ひ鬪諍を成じて馳走し、心に苦惱を生じて彼れ互に相ひ見じ、乃し十五日の中間に至て彼等禁止せられて餘殘の能く動する者あることなけん、儀軌に依らず忿怒して、軍陣の前に對して意に隨ひて作法せよ、或は餘の教に依て護摩を作せ、みな成就することを得ん。

又の法。生牛の酥を取て摩尼形に作り、像前に對して妙香華を以て壇上に散じ、三の

(三) 俱摩羅天。此に童子天といふ、營中にして是れ城のこさなり。

摩尼。摩尼珠なり。

一、三、二、四 亂脱

菩提葉を以て酥珠を安して念誦し、乃し暖ならんに至て珠を取て齒を著けずして之を呑み、纒かに食し已らば、心に思惟する所みな一切發生し力千の丈夫に敵しく、欲の隨に身を現し壽命一劫ならん、纒かに吽字を稱せば山峰・城邑・天廟みな損壞するを得ん、所有物に隨ひて護摩せよ、自由句の内、彼の人名を稱へ及び囉惹悉底利皆鈎召するを得ん。

(一) 過迦皮 樞梓 (マルノロ) の皮なり。

又の法。伏藏を驗知せんとならば、牛黄・酥・蛇脂・牛脂・雄黄・過迦皮を取て燭を作り、伏藏に近き處一肘量の地に於て其の燭を然し、加持すること二十一徧し、其の燭を旋らすに、其の燄大小に隨ひて其の藏も亦た是の如し、若し障難あらば亦た此の眞言を以て遮制せよ。

(三) 日 和本に白に作る、是は一日に約していふ故に乃至月圓に合はず

(三) 雲聲し云云 雷なり。

又の法。清閑の處、阿蘭若に於て窠塔波の前に於て佛像を安し、三時に深浴し三時に衣を換へ、三時特別に一千八徧を誦し、(三)日の初分より起首め乃し月の圓なるに至れ、其の口晝夜食はず、蘇末那華を以て像の上に於て帳を作り、種種の塗香・華鬘・燒香を以て供養し、酥燈一百八盞を然し、及び種種の飲食を佛に獻じ結跏趺坐す、助伴あるも及び伴なきも大慈心を起し大精進を具し、念誦して乃し相現するに至れ、雲聲し道

場の中の旛鬘等動し、燈焰増盛にして、佛像より光を出し像動せん、若し是の如くの相を見ば、一切の成せんと欲する所皆な成就することを得。

(二) 三波多 成就物なり。

次に最勝成就を説かん。大阿蘭若に入り大河岸に於て無畏を作し、彼に於て佛像を安し常に意を定めて根果等を食し、二十一洛叉徧を誦し、念誦し已周らば力に隨ひて供養を作し、荷葉の上に於て牛黄を以て(二)三波多の護摩を作し已て結跏趺坐し、二手掌中に安し、念誦して乃し三相現するに至れ、若し暖ならば轉輪聖王すら尙ほ敬愛を作す、何かに況んや餘の有情をや、壽千歳ならん、若し烟あらば安達駄那成就の中に王と爲り、最勝にして日行くこと千里にして復り來らん、一切成就の中に於て安達駄那し、心に念するに、一切の飲食を生じ一切の神變を作し、帝釋の邊に於てすら安達駄那す、何に況んや餘の有情においてをや、身に光耀有りて壽命千俱胝歳、若し燄あらば纒かに身に塗るに自然に紺青瑠璃の環髪あて、身初日の色の如く、二八の相瞻睹しがたく、難調の者を調伏し、意の欲するに隨ひて現するに、身意迅疾にして一切の天・梵天等沮壞すること能はざること疑ひなし、周圍一由旬身光照耀して神、三通境智を得、壽命一大劫、無量百千の持明以て眷屬と爲す、大威徳あり、天と阿修羅との鬪戰

一、三、二、四 亂脱

に於て能く勝つことなきを得、帝釋のもとに往いては帝釋半座を與へん、菩薩と位、齊等にして、<sup>三</sup>無量の諸佛に承事し、心欲に於て傾倒せず、<sup>二</sup>無量佛世界において乃至次第に隨ひて菩薩地を得。

(一) 虚空室 空房  
さ同じく人なき家  
なり。

又の法。復た餘の最勝成就法を説かん。先事の法を作せ、已に曼荼羅を見、師より灌頂を得、八戒を持し三歸菩提心を成就せんもの成就を作すべし、(一) 虚空室或は山曠野或は牛欄に於て、其の處に種種の土水あり、臭穢爛泥を離る、佗の前成就處に於て深く掘りて膝に齊うし、瓦礫炭石等を去り、一字頂輪心眞言を以て水を加持し、彼等の處に於て灑ぎ、則ち餘の香土を取て其の處に填滿し緣起藏窠堵波を作り像を安し、彼の前に於て夜澡浴し新淨衣を著け、塗香・華・燒香を以て啓請を作し、一切辟除等に一字頂輪心を用ゐ、三十洛叉を誦し滿し已て三鐵を用て金剛杵を作り、其の匠に八戒を受けしめ、千の三波多護摩を作し已り、黒月八日・十四日に於て白芥子を取て瓦椀に盛り滿て彼を上に安し、茅草に坐して供養儀軌を作し、一切意樂の飲食みな奉獻し、手を以て金剛杵を按して念誦し乃し光燄あるに至れ、纔かに光あらば已れ、眷屬と並に虚を凌ぐに色相金剛手の如く能く難調の有情を調伏し、一切成就の中最勝と爲す、一切

の天龍・藥叉等禮を作して道を避け(一)す、身に映徹するを得、十佛の刹土を超過して無量の世界に遊び、千の眷屬と與もに壽命大劫にして、命終して金剛手の宮に生せん。又の法。病者の爲には水を加持すること七徧して彼に送與し、飲めば即ち除差するを得、若し魅を患へば白芥子を以て護摩せよ、其の魅等皆な馳散せん。

又の法。海岸の邊に於て本尊の像を安し、儀軌に依て一洛叉を誦し、娑伽羅龍王をして自宮に入らしめ、中に於て如意寶を求めば欲に隨ふことを得、身を變現し自恣にして行かん。

(二) 命・和高二本  
は令に作る。

又の法。本尊の像を阿修羅窟に安し一洛叉を誦するに、阿修羅女出現して行者を引い入ることを(二)命じ、入り已て阿修羅長年藥を求めばみな得、或は彼に住せん。又の法。一窠堵波に於て乞食して先事の法を作し十萬徧を誦し終量り、黒月八日に於て晝夜食はず力に隨ひて飲食を供養し、念誦して乃し自の影の隠るるに至らば超勝するなき力を得、壽命一萬歳ならん、若し初めのにして成就せずんば復た先事の法を作し後に當さに成就せんを求むべし、第八徧に至らば設ひ無間の罪を作る者も亦た成就することを得ん。

(二) 佉吒云云 獨  
腦の首に觸體を貫  
くなり。

一、三、二、四 亂脫

又の法。赤鬘を以て赤衣を著し手に(一)佉吒網迦を持し、除摩除那に於て七蟻封を取り、  
如來の肘量に竅塔波を作り縁起偈を安し前に對して乳を飲み麥を食ひ、或は乞食し、  
塔の前に於て寢息し一洛叉を誦せば、彼に於て種種の惡狀恐怖を見んも怖畏すべから  
ず、黒月十四日に於て晝夜食はず、竅塔波に於て廣大供養し一切の鬼神にみな之の食  
を施し、(三)佉吒網迦を(二)香華燒香を以て(一)供養し、甲冑を被、牆等界を結び結跏趺坐し念  
誦して、乃し佉吒網迦より光明を出すに至れば、即ち佉吒網迦成就せん、即ち之を持す  
れば賢衆に於て敬愛を得、彼等みな遵奉す、其の佉吒網迦を餘處夜人なき處に於て地に  
卓著せば、自然に百柱の宮殿と成て一切の寶莊嚴し、天女承事し丈夫旨を承け、一千  
の眷屬隨ひ、一切愛樂し壽命五千歲ならん、抜却けば即ち現せず。

(一) 坼 或は坼に  
作る。

又の法。補沙鐵を輪に作り量小く(一)及を(二)坼て利ならしめ、十二幅にして先事の法を作  
せ、河岸山頂舍利塔ある處に於て本尊の像を安し、次第に隨て前の如く供養し、青香  
等を以て輪を供養し諸の鬼神の食を施與し、結跏趺坐して二手に輪を持し、黄昏より  
起首めて念誦し乃し相現するに至れ、香風有て空中に起り呵呵吉哩吉哩の聲を聞くに、  
一切の山みな震動し一切の海激動せんも、怖畏すべからず、復た更に念誦せば一の光聚

一、三、二、四、七、五、八、六  
亂脫

と爲りて持誦者を圍遶せん、彼の持輪瞬目に即ち阿迦尼吒天に到り、菩薩と齊等に  
して住すること一大劫にして、中劫に於て佛の出世を見、即ち此れより後次第に菩薩地  
を超え身壞して持金剛宮殿に生せん、若し舍利塔なき處、(一)一字頂輪眞言を誦すれば、  
(二)及び不清淨處に於て(三)雨を降らさず、(七)何を以ての故に(八)王難起り(九)非處にして念誦する  
が故に(六)身患へ大災難あらん。

一、三、二、四 亂脫  
一、三、二 亂脫

又の法。劍成就を説かん、補沙鐵をもて劍を作れ、諸根闕せざる匠をして一肘量に作  
らしめよ、伴なくとも、(一)堅固勇志(二)或は伴ありとも(三)已に先事の法を作せ、山頂に上り  
て縁起藏竅塔波を作り廣大供を作し、(四)一切有情を利益せんといふ(五)菩提心を發し、  
塔前に對して發露等を作し、一切功徳を隨喜して團茅薦に坐し、右の手を以て劍を持  
し、黄昏より起首めて乃し明相出づる時に至れ、則ち相現せば手戰動し光流星の如く  
乃し一千道に至る、彼の光持明者を照耀するに彼の時大明王みな來て灌頂し、彼の  
行者並に眷屬並に虚を凌ぎ刹那の頃に世界に遊んで礙なく行き、五由旬の内に於て照  
耀せん。

又の法。賢辨成就を説かん、菩薩此を成就するに由て能く一切有情の飢渴の苦惱を息

(一) 迦羅除 瓶なり。  
 (二) 一切種子 五穀。  
 (三) 等 五香。  
 (四) 羯拏羯拏 聲を作すの梵語なり。

む。舍利ある塔に於て乞食し極めて嚴毅にし、本尊の像を安し、寂黙にして茅を敷いて寝ね、持明經の説の禁忌善巧に依て一年念誦し、白黒月分に於て三日三夜食はず、像に於て廣大供養を作し、底黒からざる(一)迦羅除に(二)一切種子諸の寶藥(三)等を盛り、像の前に對して結跏趺坐し、右の手を以て緋口を按して念誦し、乃し中に於て一切の物隠るゝに至り復た念誦し乃し一切の物復た現するに至れ、彼の緋(四)羯拏羯拏の聲を作さば、當さに知るべし即ち成就す、即ち此の緋に於て思惟する所の象・馬・車乘・眞多摩尼寶、及び諸物悉底利等、則ち緋中より出生し、意に隨ひて藥を施して一切有情に與へよ。

又の法。其の處に藥又女臉を現する處あらば先事の法を作し已て、彼の處に於て念誦して小曼荼羅に塗り、佉陀羅木を以て火を然し、三夜白芥子を以て護摩すること一千八徧するに、藥又女即ち來て意に隨はん、彼に告げよ我に長年藥を與へよと。藥を得て服し已らば壽命一切ならん、若し來らずんば白芥子を取て、自の噓地囉に和し焼いて一千徧せば呵呵の聲を作して即ち來らん、先には作すべからず、若し作さば彼即ち損壞せん。

(一) 千和 高二木 単に作る。

(二) 六味 常の五味に淡味を加ふるなり。

又の法。乳を飲み麥を食ひ、舍利ある塔に於て本尊の像を安し(一)千念誦し、一黒月分の八日に於て則ち佛世尊に於て飲食を供養すること、儀軌に依て奉獻し、像の前に對ひて火を然し尼瞿陀樹木を燒き三甜を以て燒くこと一千八徧せよ、俱尾羅藥又みな來らんも、怖畏すべからず、先づ置く所の香水を以て遏迦を獻せよ、彼の藥又等言はん、尊者何事ありて我等を喚ぶと。即ち彼に告げよ、我と與に奉教せんことを作爲と、是を作し已らば隠れて現せず、即ち藥又衆成就を得、樂求する所をみな與へ、天妙長年藥を求むるにみな得、百千の眷屬に給するに(二)六味の飲食を具し、思ふ所、求むる所みな得ん。

又の法。梵王毗紐摩醯首羅をして敬愛せしめんと欲はば、黒月分に於て本尊の像前に對ひて煙なき炭を用ひ、安息香丸を以て三時に酥に和し、護摩すること一千徧せば、中夜にみな來て欲請に隨ひ、及び長年藥を求むるに求むる所みな得ん。

又の法。囉惹をして敬愛せしめんとらば、本尊の像前に於て乳ある木を以て火を然し、白芥子を三甜に和し護摩すること一千八徧して七日に三時せば、(三)四洲の主も尙ほ能く來て敬愛せん。

(三) 四洲の主 金輪王。



又の法。囉惹の類に愛敬せられんと欲はば、遏迦木に火を然し七日三時に赤芥子を用て護摩せよ。

又の法。一切鬼神をして敬愛せしめんとならば、鹽に噓地囉を和し護摩すれば即ち得又の法。其の處に梵羅刹及び餘類の鬼神の住する處あらば、彼に至て禁戒に住し、十萬徧を誦すれば、即ち大伏藏を得、或は能く他をして驅擯せしめん。

又の法。日宿を簡ばず亦た齋戒せずして、先づ先事の法を作し、壞せざる(二)沒嚙多摩奴沙を取て淨く洗浴し莊嚴し、除摩除那の中に於て摩奴沙を安し、頭を東に向へ行人は面を之に向へて坐し、佉陀羅概を以て之を繫縛し一切の鬼神に食を施し、四方に護持の劔を著き、行者摩奴沙の心上に坐して鐵末を取り加持して其の口中に投じ、乃し舌を出すに至れ、速に利刀を持って截取するに青蓮華色の劔と成る、此の劔を持つるに由て、眷屬を並せて虚を凌ぎ、一切の持明能く沮壞するなく、一切の持明中に於て王と爲り、壽命大劫にして身壞するに天に生せん。

計羅峯意を悦ばせ 鬘峰端嚴を具ふ 金峰頂處に於て 成就人居する所  
彌盧の大峰 青赤蓮の妙處 頻陀山適悅し 金剛帝寶巖

(一)沒嚙云々 死  
人の壞せざるを淨  
く死陀林の中に於  
て作法するなり

(一)亂脫  
支は帝釋舍支 舍  
り。

(二)流轉 自在に  
一切處に流轉する  
なり、三界流轉に  
あらず。

(三)若し眞言云  
若し眞言明を修  
して成就せざる時  
は、眞言の終りに  
物喲字を加誦す  
るなり、但し初發  
より加誦するにあ  
せざる時は成就す  
故に若し成就せず  
んば等しいふ、此  
の如しに通じて是

圓會山意を悦ばせ 麼賴仙山の處 大帝山及び 雪山香栴と與なり  
是の如きの悦意の處 閑靜にして豊に守樂なり 持明女と與俱に 天女歌詠を  
樂ふに

天女と同うして遊戯し 最勝にして娛樂を受く 遊行持明者 帝釋舍支の  
如く

人の能く敵對するなし 彼無礙にして 一切處に趣いて 流轉するを得 是の  
如く功德を具し 持明常に遊行す。

若し眞言明を修して若し成就せずんば、此の一字頂輪を共に相和して誦し、佛像の  
前に對ひて佛を供養し念誦せば、則ち像の前に於て寢息せよ、夢中に於て眞言の増減  
を見れば眞言を充盛せしめ、像の前に對ひて乳木柴を然し、酥を用て護摩すること一千  
八徧せば、其の本尊即ち此の法を成就す、第七番に用ふべし然らずんば即ち壞せん。  
又の法。阿毗遮嚙を作らんと欲はば、除摩除那に往いて除摩除那の柴木を以て火を然  
し、屍を焼ける灰を以て護摩すること一千八徧せば、帝釋すら尙ほ自處より移轉せん。

(一) 囉惹云云。日本にては攝家の如きものなり。  
(二) 乾枯死なり。

(三) 大磨梨。摩羅と轉聲の異にして死なり。又は殺なり。

又の法。(一) 囉惹の類をして磨囉せしめんと欲はば、濕衣を著し脚を以て上を踏踐し、一字頂輪を哦誦し、乃し衣乾くに至れ、是の如くすれば彼の冤家の身即ち乾枯せん。  
又の法。礮石を取て一一加持し、城及び村邑の前に對ひて住して擲ぐることを七夜せよ、七夜を過ぎて(三) 大磨梨を爲れ、復た息災せしめんとならば像前に對して乳護摩すること一千八徧し、香水を以て加持すること一百八徧し、彼の城及び村邑・聚落に於て四方に灑げば、即ち止息することを得ん。

又の法。若し三寶を損壞する者ありて、彼を調伏せしめんとならば、善巧方便に住して彼がために除摩除那に往き、屍灰を以て彼の人形を作り、行人裸體にして髪を散し阿毗遮嚩迦の儀に於て一字頂輪を誦すること一千八徧すれば、彼れ則ち梵羅刹の所持を被らん、自身を除いて餘の持誦者は解すること能はず、此れは是れ菩薩の巧方便なり、菩薩種性の者は作すべし。

(四) 苦瓠子赤き實の熱するもの。

又の法。旃陀羅家の火を取て除摩除那に往き、其の中の木を取て火を然し、(四) 苦瓠子を取て彼の人名を稱へ或は思憶し、護摩すること一千八徧すれば則ち彼大瘡に持せられん、解かしめんと欲はば像前に對ひ佛像を浴し、眞言を誦し浴像の人取て彼の身

上に灑げ。

又の法。摧滅せしめんと欲はば、摩奴沙の骨を取り八指にして概を作り、加持すること一千八徧して冤家の門闔下に釘たば、一切の財物みな盡きん、概を除かば即ち解けん。

又の法。除摩除那に於て紫礦を焼いて嚩地囉を和し、護摩すること一千八徧すれば、彼れ即ち止息せん。

又の法。若し自佗灌頂せんと欲はば、四の底黒からざる餅を取り河の流水を取て、一切の寶及び香並に種子(二) 等を滿盛して其の中に安し加持すること一千八徧し、弟子或は營事者をして自の頂に灌がしめば、一切の災障・鬪諍・言訟・一切の障難みな解脱することを得ん。

(二) 等 五藥を等す。

又の法。舍利ある窣堵波の前に於て本尊の像を安し、乳を飲み麥を食ひ力に隨ひて供養し、眞言を誦すること三洛叉すれば、即ち能く彼をして迷亂せしめ癡する等の事あり。  
又の法。三時に罪を説き隨喜し勸請し發願し樂作し、或は水を飲み麩を食ひ、大河水に於て胸に至り、三洛叉を誦すれば、敬愛せしめて身を隠し、雄黃・雌黃等を成就せん事を欲するに皆な能く成就せん。

又の法。三夜食はず、除摩除那の南邊に於て住し、獨己にして侶なく、一洛叉を誦すれば、則ち一切の事に於てみな堪任なることを得ん。

又の法。若し難調の惡龍ありて佛法を壞し、有情を損害せんを調伏せしめんと欲はば、三夜食はず龍處に於て白氎子を取て毒及び嚙地囉に和し護摩すれば、其の龍池中より出で、七日の中間所作みな成じ、所求みな得ん、若し出でずんば念誦して二洛叉或は三洛叉に至れ、彼の龍即ち死して龍池の中に臭爛の氣を聞かん。

又の法。左脚を加持すること七徧し、忿怒を以て地を踏み一字頂輪を誦し、并に吽字を加へて誦すれば則ち象・馬車・歩兵等を禁止せん。

又の法。怨家をして麼囉せしめんとならば、除摩除那に往いて除摩除那の灰を取り、忿怒して彼の人形を作り、利刀を加持して脚より段段に截り、除摩除那の火に於て護摩すれば、第七日に於て其の命存せず。

又の法。若し軍陣に於て王宮に於て、或は言訟の處にて誦する時は、勝つことを得ん。

又の法。油麻を以て護摩せば男女敬愛せん。

又の法。右手の頭指を加持すること七徧し、或は囉惹の類或は餘人に擬せばみな敬愛

(一) 葬娶 肉なり。

(二) 底利 女なり。

を得、即ち此を以て象・水牛を指さば、彼等みな能く禁止せん。

又の法。自己を成就せんと欲はば、除摩除那の中に入り(三) 葬娶を賣り一字頂輪を用て身を護して七徧加持せよ、龍(二) 底利及び持明底利を召ばんにも亦た此の眞言を用て鈎召せよ。

又の法。霹靂木を取て十二指、金剛杵を作り、除摩除那の中に於て念誦すること三洛叉すれば、阿修羅の門の關鍵内外に開き摧けん。

又の法。一字頂輪眞言に吽字を加へ能く佗軍を禁止せんに、未だ成就せずとも、忿怒して誦せば亦た能く他軍を禁止せん、若し成就せば樹をして倒れしめ、能く一切の明を損す、眞言に吽字を并せて誦せば、除摩除那の中に於て加護を得ん。

又の法。(一) 補沙鐵を以て(二) 匠の八戒を受けし者をして(三) 金剛杵を作らしめ、除摩除那に於て八戒を受け、心散動せずして先事の法を作し、手に金剛杵を持して誦すること十洛叉、黒月十四日中夜の時に於て、一切の香・華・燒香・飲食・燈明を儀軌と作し佛を供養し、左手に金剛杵を持して結跏趺坐し念誦せば、晨朝の時に於て其杵千光あつて晃耀す、此の杵を持するに由て即ち成就するを得、纔かに心を發せば眷屬を并せて慮を

一、三、二、四 亂脱

凌ぎ能く一切持明を持罰して威光能く與等<sup>ひせし</sup>ものなく、帝釋半座を與へ大持明王と爲り、住すること一大劫にして、金剛杵を持するに意に隨ひて遊行せん。

又の法。瘡四日に一び發する等并に蠱毒等、加持すれば即ち除遣するを得ん。

又の法。除摩除那に於て奢視嚙の形を作り、左脚を以て心を踏み、右手の頭指を以て擬し、卍字を并せて一字頂輪一千徧を誦すれば、即ち彼れ刹那の頃に滅壞せん、亦た此の眞言を以てせば、却て能く止息せしめん。

又の法。除摩除那の灰を取て奢視嚙形を作り、佉陀羅概を以て眞言を誦し、頂に當て之を釘て、時に應じて滅壞せん。

又の法。白芥子を取り、除摩除那に於て加持すること十萬徧すれば、能く一切の關鍵<sup>二</sup>店鎖<sup>一</sup>を摧き倒さん。

又の法。除摩除那に於て八日壞損せざる<sup>三</sup>沒噪多<sup>三</sup>補嚙沙<sup>三</sup>を取り、法に依て洗浴し莊嚴し、四方の一切鬼神に食を施し、心上に坐し<sup>二</sup>彼の口中に於て<sup>三</sup>白芥子を以て一誦し一擲し、乃至舌出づるを待ち、利刀を以て截れ、即ち劍と爲ん、此の劍を持するに由て一切持明中に王となつて、無比超勝の力あて、意に隨ひて此の世界に於て遊行せん。

(一)言 徒點の切戸牡戸を削る所以なり。  
(二)沒噪多 大天なり。  
(三)補嚙沙 丈夫なり。  
一、三、二、四 亂脫

(一)不思議王 不思議自在の義なり

又の法。舍利ある窠堵波に於て、香等及び飲食を供養し、満月に於て像前に對して沈水香を燒き、晝夜に念誦し、即ち晨朝に於て僧次に請して供養すべし、彼の大衆に於て悉地を乞へ、則ち此の儀軌を以て結跏趺坐し念誦せば、即ち(一)不思議王を成就することを得、長壽開持みな成就するを得ん。

又の法。先事の法を作し、舍利ある窠堵波に於て、清淨處に於て、満月に於て晝夜食はず愍重の心を發し、地に墮ちざる瞿摩夷を取て壇に塗り、八の餅を取て水と及び諸の種子と諸の藥等とを滿て盛り、種種の華鬘を頸に繫け、種種の燒香・薰陸・沈水・檀香等を以て盛る所の水に和し、自身を捨て、一切の佛菩薩に奉獻し、結跏趺坐して念誦し乃し頂より光明を出して右に持誦者を旋遠し、即ち行者の身に隱入するに至らば即ち身成就を得、即ち其の身に光明あり、刹那の頃に即ち(一)環髮を得、二(二)十年、狀五神通あり威光あつて融金の照耀するが如し、眷屬を并せて處を凌ぎ、一切の天・龍・藥叉・乾闥婆・迦樓羅・緊那羅<sup>一</sup>、成就<sup>二</sup>摩睺羅伽皆な禮敬し、刹那臘縛須臾の頃に、無量の佛世界に遊び、三梵行の爲めに<sup>五</sup>欲心傾動せず、所去の處、彼彼帝釋に於て<sup>七</sup>半座を與へ威徳無比なり、思議を超えたる佛世界に於て無量の佛を見たてまつり、彼より聽

(一)環髮 螺髮<sup>二</sup>高本に八<sup>三</sup>に作る。

一、四、二 亂脫

三、六、五、七 亂脫

(二)彼の云云已下未だ群ならず

開する所の法みな勝解することを得。是の如く次第に菩薩の行を修する時に、菩薩の行に於て調伏善巧方便の行に入ることを得、(三)彼の三摩地力に従らず損減意に隨ひて住し、乃至生を受けん。

又の法。水に入て念誦すること一洛又し、是の功を作し已んば瘡に持せ被れんものを解脱せしめんと欲はば、酥・蜜相和して護摩せよ、即ち除愈することを得ん、若し息災を作さんには薩嚩二合訶の字を加へよ。

又の法。靜處に於て本尊の像を安し、一千の俱那衛華を以て像の上に擲げ、彼の名を稱し一たび誦し一たび擲つに、彼並に種族のためみな敬愛を得ん。

又の法。若し障難を息めんとならば、濕衣をきて忿怒して念誦し、油麻・白芥子を酥に和して焼き一百八遍し、三日に日に三時すれば、一切の魔障みな除滅するを得ん。

又の法。山頂に上りて乳を飲み、一切の香を以て十二指或は六指の金剛杵を作り、左手に持して念誦して乃し暖烟光あるに至れ、烟あらば安但馱那成就の中、王と爲る、若し暖あらば金剛杵を持するに見る所彼れみな敬愛せん、若し光あらば即ち持明仙を得ん。

(一)素路多云云安善那なり(二)太陽蝕日蝕なり

又の法。(一)素路多惹那を取り、先づ千三波多護摩を以てし(二)太陽蝕の時に至り、加持すること一百八遍し、口中に安し念誦して、乃し太陽復するに至れ、婆羅門女をして祈かして加持すること一千八遍し用て眼に點せよ、即ち安但馱那を得、一切の安但馱那成就の者能く自ら隠るゝことなけん。

(三)僧の下、恐くは齊若は食或は供等た脱するか

又の法。語成就を求めば先事の法を作し、清淨の處に於て本尊の像を安し、一切の天・龍・藥叉等に於て次第に食を施し、像の前に於て護摩爐を作り、青蓮華に三甜を和して護摩すること十萬遍せば即ち成就す、右に本尊の像を遶り、像前に對ひて念誦し、餘日に於て力に隨ひて(三)僧を設け成就を乞はんに、此れより已後求めんと欲する所の一切、語を以てみな順從することを得ん。

又の法。安息香を丸に作り三時に護摩すること各の一百八遍せば、意に樂ふ所みな圓滿することを得、鬼魅の所を加持し線繫を呪せよ。

又の法。油麻白芥子を酥に和し、一日像前に對ひて護摩せば、所求みな得ん。

又の法。女男敬愛せしめんとならば、蠟を以て彼の人形を作り、作る時に一字頂輪を誦し、(四)苦油を以て其の肚に満し、七摩那の刺を以て七關節の處に刺し、佉陀羅火の

(四)苦油藥種油。

上に炙り、加持すること一百八遍して七夜せば、即ち所求を得ん。

又の法。他をして驅擯せしめんとならば、赤芥子を擣いて末と作し彼の人形を作り、右脚より截り、法陀羅炭の火中に於き、眞言を誦し護摩すること七日すれば、即ち願の如くなることを得ん。

又の法。自身をして災を息めしめんとならば、舍利ある塔に於て本尊の像を安し、香華等を供養し、新餅を取て香水并に一切の薬及び諸寶等を盛り滿て、加持すること一百八遍して、截らざる縹を以て瓶の頸に繫け、自身を灌沐すれば、一切の罪一切の障難を離れん。

又の法。青木香を加持すること一百八遍し、口中に含んで人と共に語らば、みな敬愛するを得、官府に於て理を論ずるに、皆な語勝つことを得ん。

又の法。黄華を取り法陀羅火に於て護摩し一千華なれば金千兩を得ん。又の法。鹽を以て他形を作り、法陀羅火に於て加持し一千遍護摩すれば、彼の人に求むる所みな敬愛を得ん。秘密主、是の如く等一切世間にも出世間にも輪王佛頂みな能作す。

天・龍・藥叉王 餓鬼・惡羅刹 及び餘の諸の部多 持誦するを見ては消融し

みな諸天の法を息めん 蠱毒部多那 常に行人の手に在らば 彼れ罪すること

得べからず

一切成就を求めば 相應者當さに得べし 教彼の人の手に至らば 速疾に諸の

利を作さん。

爾の時に金剛手秘密主、佛に白して言さく、彼の有情大福を以て攝受するに、此の教當さに彼の人の手に至ることを得べし、世尊我れも亦た彼の有情を攝受し、此の教をして彼の人の手に入らしめんに、一切の有情界に於て此の明王一切事業を作し、能く一切の怖畏を滅し、常に加護を作し、財穀増し長壽にして病なく、八萬の鬼魅の族みな除くことを得、一切の厭盡法を作す者を息め、非時にして死すると毒と火とを遮止し、一切有情を利益し、能く一切の病を除き、一切の執曜を斷ずることを得、勤勇(二)師子(一)の一切有情を矜愍するがための故に、是の如くの説を作す。時に世尊、金剛手秘密主に告げて言はく、我れ今功德を説いて一切の罪を除き一切の病を除かしめん、汝當さに諦かに聽くべし。金剛手、一切の鬼魅を患へんには、五色線を加持して手に繫け身を護り、灰を以て加持して方隅界を結し、水を加持せよ、一切の瘡には、みな線を以

て加持して繫げよ、自他の一切の罪を除かしめんとならば、白芥子を酥に和し護摩せよ、命を増さしめんが故には、俱蘇摩華を以て加持して、佛世尊に供養せよ。

又の法。蘇摩那華を以て加持すること一百八遍して空中に擲ぐれば、即ち天晴れて雲なきを得ん。

又の法。水を加持して所爲の彼の人をして其の名を稱して飲ましめん、彼をして敬愛を得しめん。

又の法。俱那衛枝を以て加持すること七遍して若し雹下らば、之に向つて打たんに其の雹即ち移らん、惡雲にも亦た此の法を用ひよ。

又の法。方隅界を結するには法陀維の楸を用ひよ、水或は白芥子を以てすれば、毗那夜迦を縛せん。

又の法。一切の病には五色線を加持して帶せしむれば即ち差ゆ、一切の鬼魅一切の病に護摩せば即ち止まん、華果を加持して彼の人に與ふれば敬愛を得ん。

又の法。食飲に加持せば與ふる所の人みな敬愛を得ん。

又の法。鐵楸を作りて加持すれば、一切の怖畏、一切の障難みな加護を得、天及び鬼

神、羅刹、楸の故に附近し遠越するを得ず、一切の怖畏に於て加護を得、一由旬結界せん。

又の法。毒を禁せんと欲はば、線を加持すること七遍して乳ある木に繫げよ、一切の毒みな消す、所有る毒には土或は白芥子或は水を以て加持して之を用ふれば、みな除差することを得ん。一切の病には五色線を加持すること一百八遍して病者に繫ぐれば、即ち除差することを得ん。沉水香或は薰陸香を焼けば、能く一切の瘡を除き、一切の怖畏處に此の明王を誦すればみな無畏を得ん。

又の法。茅を加持すれば一切の毒を拂除し、囚繫處に於て誦すれば、縛より解脱するを得、瘡を患ふる者は線を加持して腰に繫ぐれば即ち差えん。

又の法。自己の身を護るに心を以て誦せよ、牛畜等の疫には黒線を加持して結んで頸に繫ぐれば即ち差えん。

又の法。惡法を以て印せらるゝには、白線を加持すること七遍して、結んで身上に繫げよ、即ち除かん。

又の法。方隅界を結するには白芥子を以てせよ。

又の法。風魅を患へんには、油を加持して與飲せしめば即ち差えん。

又の法。眼を患へんには、水を加持して與洗せば即ち差えん。

又の法。藥叉に持せられんには、水を加持して散灑せよ、即ち解脱するを得ん。

又の法。餓鬼に持せられ及び癩痢には、線を加持して與繫せば愈ゆることを得ん。

又の法。龍を遮止せんには俱那衛枝を用てし、諸印を破するには灰を以てし、賊を遮するには土塊を加持し、七徧して四方に擲げよ。

又の法。求んと欲する所あらば、清淨に澡浴して新淨衣を著し、像前に對ひて一日一夜食はず、薰陸香を焼き、眞言を誦すること一百八徧して、便ち像前に寢息せば、夢中に善惡を説き、所求みな示さん。

又の法。霖雨を止めんと欲はば、水に入れて念誦するに一切みな止まん、雨を求むるにも亦た水に入れて念誦せば、意に隨ひて多少あらん。

又の法。食を求めんと欲はば、初日分に於て村邑に於て城門に對ひて住し、蘇摩那華を加持すること百八徧して、城門に向ひて擲げ、然して後に城に入れ、求めざるに食みな豊足することを得ん。

(二) 疰 恐くは痘  
の字。  
(三) 泥 一切の土を  
物には古壁の土を  
糞粉にし付くれば、  
瘰癧。

又の法。嬰孩魅のために持せらるれば、樺皮を以て上に一字頂輪眞言を書して、項の下に繋げよ即ち愈えん。

又の法。常に念誦すれば一切の人みな敬愛を得ん。

又の法。王宮に入らんには、水を加持すること一百八徧して用て面に塗れ、囉惹並に輔佐みな敬愛せん。

又の法。衣・華・香・瓔珞等を加持して、或は彼に與へ或は自ら著くれば皆な敬愛を得ん。

又の法。諸の飲食を加持すること一百八徧して、彼の人名を稱し思念して食せば即ち敬愛を得ん。

又の法。癰・疰等ならば(三)泥を加持すること七徧して之を塗れ即ち愈えん、我略して説く所作みな成就するを得ん。

世尊、彼の時に於て金剛手祕密主に告げて言はく、善男子、是の如く一字輪王能く一切の事業を作す、一切佛の所説の無礙の教令なり、無量那由他百千俱胝佛の所説を我今亦た説く、我れ今福利を説かん、祕密主汝諦かに聽き諦かに聽け、一切佛の所説は



一切菩薩隨喜す、祕密主、若し此の大明王輪王佛頂を、若し能く受持し讀誦し、若しは演説を聞き乃至經卷を書寫し供養し念誦するものあらば、彼れ必ず惡趣に墮せず、餓鬼・藥叉と爲らず、貧賤ならず、一切の罪を爲らず、一切の有情みな敬愛することを得、一切みな隨順することを得、所生の處みな宿命を得、一切の鬼魅身に著かず、所謂る天魅或は龍魅或は嬰孩魅、羅刹魅、或は緊那羅魅、或は摩睺羅伽魅、或は補怛那魅、或は羯吒補怛那魅、或は毗舍遮魅、或は迦樓羅魅、或は阿修羅魅、或は諸母天魅、或は鳩槃荼魅なり、刀杖身に著かず、毒火水中に中られず、一切の他敵・飢儉・曠野、是の如くの處に必ず生ぜず、一切の毒瘡腫毒起屍の作法不祥みな解脱するを得、一切の天・龍・藥叉・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽みな禮敬せん、善男子我れ略して説かん、所有る一切の災難彼の一切みな害を爲す能はず、何を以ての故に、佛の境界、無量佛の所行の境、無量佛世尊の無量三摩地に遊戯したまふ。祕密主、此れ一切賢劫中の如來説きたまひ、過去・未來・現在の佛説きたまひ、我れ今亦た説き、恒河沙數の同名の如來説きみな隨喜したまふ、若し善男子・善女人有て、後世の後時に於て比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、淨く澡浴して佛前に對し供養を作し、此の明王の眞言を誦持し、若くは

(一)成就 恐くは  
剩字か。

(二)成就し是の如くの福利を聞いて淨信を生ずれば、當さに天趣に生じて天の大威徳を得べし、若し人中に生るれば王と爲て宿命智を得、此の生中に於て念誦せば、一切の疾病を離れん、若し成就者此の人身已て末後の身、菩薩の境界に入て無量佛の世界に遊ぶこと、一切如來の如く遊戯せん。

說法品第六

(三)寂靜慧云云  
未だ詳かならず。

二、三、四 亂脫

爾の時に(三)寂靜慧菩薩摩訶薩は金剛手菩薩の弟なり、彼の大衆の集會より起て合掌して佛を禮したてまつり、世尊を供養したてまつらんが爲めの故に、自の頸より無價の大眞珠鬘を脱して、右の手を以て持して世尊に獻じたてまつる。説たまふが報答して妙に故に此の伽他を説て而して佛を讚したてまつる。

三界に頂聲たり 諸の有情を悦意せしむ 佛の此の聲最勝なり 語を現すれば  
榮盛を得せしめたまふ 所有る佛住の法 彼を調御せんとして法を説きたまふ 所生の等覺者 世尊菩提を得て

妙法輪を轉じたまふ者 過往の圓修者の 諸佛みな此に坐したまふ 世間に比

凡人なし

彼彼の地所に於て　みな金剛の如くなることを成す　現に世尊に對して　見んことを得るものを吉祥と爲す

過去の吉祥とするもの　誰か復た妙法を聞く　先づ是れ又た吉祥　彼の吉祥も亦た然なり

彼れ教を聞いて壞せず　智慧者正しく住す　彼に於て常に天の想をなし　亦た

父母を觀る想をなし　親教姉妹の想をなし　みな無畏者を見て　先作して教令に順す　尸羅に於て最

勝なり　彼れ法王に於て　依附して供養することを得るに由る　末利華鬘の　風吹いて

香意を悦ばしめ　油麻に雜へて油を成すれば　其の香亦た芬馥たるが如く　汝ち尊は色無比なり

群品算量し難し　甚深にして及び威徳あり　名色と及び神通とあり　今此の地に於てする所　我

れ高廣の想を觀す　云何ぞ女男に於て　少の功徳を讃揚する　若し所聞の者をして　法を聞いて復

た信を生せしむ　若し能く捨施する者は　世尊の教の中に於て　若しは非家に趣かん　釋王の教

の中に於て　我れ彼の一切に於て　憐愍して親族の想をなす　空中の蚊蚋の如く　大海の牛

注の如し　是の如く佛の功徳　讃する所(二) 諛言(三)の如し　我が如きは天王に於て　功徳を讃

揚する者なり　或は佛聲の功徳を　力に隨ひて我れ讃歎したてまつる　恭敬して供養したてまつ

る　珠鬘無價の寶を持して　此の勝善根を以て　有情みな佛の如くならん。

時に寂靜慧菩薩摩訶薩、伽他を以て世尊を讃揚し已て、佛に白して言さく、菩薩幾くの法を以てか此の佛頂輪王の一切如來の三摩地を修して、熾盛なることを成就する。爾

(二) 諛 寐中に言  
あるなり。

の時に世尊、伽他を以て寂靜慧菩薩摩訶薩に答へたまふ。  
 若し慈心清淨心あて 龜ならず柔軟に念を具する者  
 禁を護り正直にして梵行を修することあらん 彼の人は此の明王を成就す  
 所有る罪を離れて惡をなさす 常寂を増長して瞋恚を離れん  
 是の如くの人は明王を成す 他を嫌恨し及び調戲すること  
 是の如きは他に於て常に作さざれ 他の長短を窺はざれ  
 是の如くの人は明王を成す 若し佛法に於て功德を具し  
 常に恭敬して供養し 他に於て打たず及び毀らざらん  
 彼れはみな此の明王を成就す 恪嫉妬なく及び慢なく  
 他に於て不饒益を作さず 他に於て實の過患を作さざらん  
 是の如きは(一)眞言王を成就す。  
 善男子、我れ六十俱胝の佛に承事し供養して、彼の俱胝の佛に於て(二)不梵行を修し、  
 法を求めて修行し、彼に従ひて大明王を受けて廣く流布しき、彼の善根に由て則ち廣  
 大の功德を得て威徳是の如し、善男子、一切如來の不思議の三摩地は殊勝なり、是の

(一)眞言王 法受  
 茶羅なり  
 (二)不 或はいふ  
 本の字か

故に菩薩は身口意を護りて、此の一字轉輪王を修持すべし、是の如く善男子、如來は  
 一切の有情に於て眞言形を以て善友と爲りたまふ、寂靜慧是の言を作さく、世尊善男  
 子善女人恭敬すること善友の想オモヒの如くして大明王を習ひ、承事供養すべし、何を以  
 ての故に、寂靜慧若し善知識に於て、親近し修習すれば、善法を成ずることを得、善  
 妙法を聞き、善の意樂を以て則ち善の加行を得、善業を以て善に趣き、善の助伴を得  
 て罪業をなさず、善の加行を作し善に趣き已て、善の助伴に承事して惡業を爲さず、  
 既に惡を爲さざれば他に於て他の意を護り、菩提の道を圓滿し道に住して堪任し大力  
 あり、惡道に住する有情に於て義利を作す、是の故に寂靜慧、善友に親近すれば一切  
 の功德みな圓滿することを得、みな稱讚せらる。時に寂靜慧菩薩摩訶薩、佛に白して  
 言さく、世尊、菩薩摩訶薩は幾くの法を成就してか疾く無上正等菩提を證し甚深の法  
 忍を得る。佛、寂靜慧菩薩摩訶薩に告げたまはく、四法あり成就すれば疾く無上正等  
 菩提を證して甚深の法忍を得。何者か四法、緣生法智に入り、無衆生無人無壽者に入り、  
 空法性に於て決定し、境界を勝解し斷常二見を遠離す、是の如きは四法なり、前際も  
 清淨なり後際も來らず、三世平等なり、現在を以て(三)智、是の如きは四法なり、又た

(三)智 或はいふ  
 知か

四法あり、佛性觀すべし、佛色性説、厭僧如來、慧眼を以ては則ち慧眼清淨なり、是の如きは四法なり、又た四法あり波羅蜜を圓滿し四攝法を捨てず、善巧方便を以て人なしと決定するが故に大悲を發生す、清淨慧なり、是の如く菩薩摩訶薩、成就して速かに無上正等菩提を證し、甚深の法に於て忍を得、世尊、此の四法を説きたまふ時に於て無量の菩薩無生法忍を得、無量の天・龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽、無上正等菩提心を發す。爾の時に世尊、此の伽他を説きたまふ。  
是の如く法の理趣は 正等覺の所説なり 此の眞言を修するに由て 一切に如來と爲る

若しは生死を度せんと樂ひ 若しは諸結を斷せんことを欲ひ 一切の依止と爲らんとならば 久しく此の行を修して 殊勝の想を起さしめよ 我れ端嚴に趣いて 思惟して此の言を轉するに 常に平等の行を修して 不等の行を作さずば 則ち菩薩の位を成せん。

音釋

裸 郎果の切、赤體なり  
垢 耻格の切、垢裂くなり  
瓠 胡故の切、瓠實なり  
礦 古猛の切、紫礦甄  
窟 果五の切、窟毒なり  
窟 徒點の切、窟戸牡なり  
蝸 儒預の切、窟蝸なり  
窟 窟切、窟

國譯一字奇特佛頂經卷中終

# 國譯一字奇特佛頂經卷下

唐特進試鴻臚卿三藏沙門大廣智不空 詔を奉じて譯す

調伏一切毗那夜迦天王品第七

爾の時に、曼殊室利童真菩薩摩訶薩、世尊の説法に於て究竟すと知り已て、合掌して世尊に親近し、頭面をもて足を禮し、右に遶ること三匝して退いて一面に坐す、曼殊室利童真菩薩、佛に白して言さく、世尊是の如くの有情四生に生じ長養し、無始より六道に生死す、世尊此の有情聚有情海の有情の増減は、盡すこと得べからず、云何ぞ世尊如来三摩地、色相好特を見るべき、世尊の説の如きは、此の眞言王を持する菩薩摩訶薩は不退轉を得、乃至次第に無上正等菩提を證すと。世尊云何が法門理趣に入らん、云何が法を安立する、功德云何が三摩地法界大威徳、廣博に攝し示現することをなす。爾の時に世尊微笑して、是の言を作したまはく、善いかな善いかな曼殊室利と。復た言はく、善いかな曼殊室利、汝如来に是の如くの義を問ひて多くの人を利益し安樂し、

(一)曼殊室利 前には寂靜慧と云ひ今此文は曼殊師利と云ふ一人の異名なり。

(二)好特 高和の二本加持に作る。

(三)若 高本には時に作る。

世間の天人を矜愍する、法として爾かなりと。(一)若し佛世尊微笑を作したまふに、口より種種の色光を出したまふ、所謂る青・黄・赤・白・紫・玻瓈・銀色なり、無量の世界乃至梵世を照し、日月の光を映蔽して、復た佛の口中に入入す。爾の時に曼殊室利童真菩薩摩訶薩、相を知れる者相を知り已て、此の義を以て伽他を以て世尊を讃揚したてまつる。

妙に見能く色相を現じたまへる者 八十隨形端嚴の者

尋光と妙光と圓滿の光をます 是の如く我がために笑の因を説きたまへ

忍辱と十力とゐます持進者 精進して高く踊て傾動することなし

眼目愛樂して四諦を見たまふ 我がために此の微笑の因を説きたまへ

梵王天衆及び一切 頭面に如来を頂禮して

瞻仰し恭敬して而も觀察したてまつる 我がために此の微笑の因を説きたまへ

山の如く善く行いて妙行を行じ 定慧、智の光明を踊起し

解脱堅力眞實の見あるひと 我がために此の微笑の因を説きたまへ

金剛の身性堅にして壊しがたし 那羅延の志人中の勝なり

(四) 踊 湧の字か。

(五) 踊 湧か。

梵音と妙音と文殊音とのみす 我がために此の微笑の因を説きたまへ

光明を獲得して幽暗を離れ 普見の眼目あて平等に住し

功德殊勝にして堅勇を得たまふ 我がために此の微笑の因を説きたまへ

世尊已に勝法輪を轉じて 佛頂の聲を以て人天

並に龍・藥叉及び一切に於てしたまふ我がために此の微笑の因を説きたまへ。

(一)爾の時云云  
以下は廣く頂行者等  
の毗那夜迦行者を  
守護せん云ふの  
誓言を作すことな  
説き玉ふ。

(二)爾の時に頂行、童子形を持して髻を垂れたり、上首として百千の障者圍繞せり、佛の威神威怒の加持を以て座より而も起ちて、偏へに右の肩を袒ぬぎ、世尊に於て合掌し作禮し已て佛に白して言さく、世尊、我は一切の障者毗那夜迦の中に主たり、世尊、一切の障者我に遵奉し、一切の障者我に屬す。彼の一切の障者毗那夜迦を觀じて告げて言はく、汝等障毗那夜迦諦かに聽け、一切世界に障を、作す者に於て、成就の人に於て饒益せざる者、罪ある忿怒惡鬼魅等、世尊今より已後頂輪を成就せん者、此の大忿怒の眞言を晨朝とに若し七遍を誦せば、世尊我等彼の一切の作障の毗那夜迦に於て遠離せしめん、若し成就を作んには魔障を起さしめず、身心をして散動せしめじ、世尊若し此の大忿怒の眞言を以て常に加護を作さば、彼の明を持し明王を成就する者に

(一)阿吒迦縛底  
毗沙門の宮殿なり  
(二)損壞か。

我等加護を作して刑罰を遮し、ために息災を作し吉祥を作し、一切の利益を作さん、世尊今より已後、頂輪の教王に於て勤行せん者、眞言を修せん者に障心を起すべからず、若しは此の如來變化の大忿怒王必ず汝等を壞せん、若し憶念せん者ば汝等此を以て加護すべし、汝等今より已後、彼の修真言行者、眞言行の儀軌に於て説く所の食の蜜・油麻・葱・蒜・薤・蘿蔔・鉢波吒等の、眞言行の中に遮する所を輪王佛頂の眞言を修して成就せんとする者、若し食すとも汝過を執すべからず、惱害すべからず、悉地を奪ふべからず、心をして散動せしむべからず、我が教令を以て佛頂眞言を修せん者には、惡心を起すべからず、汝等彼の修行者を見て慈心を起すべし、汝等本處を移動せしむること勿れ、若し我が語に違して彼に於て異心を起さば、(一)阿吒迦縛底王宮金剛手祕密主宮に住するを得ず、我が教令に違越せば、我當さに(二)損罰すべし、及び餘の所有る天・龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・一切の餓鬼・毗舍遮起・屍作障毗那夜迦・羯吒布單那・拏吉尼等、輪王佛頂眞言を修する者に於て惡心を起し心をして散動せしむべからず、及び彼等營從若し障難を作さば、我金剛杵を以て彼の頂を碎かん、我が語誠實なりと。時に彼一切の障の將主、所謂る金剛莊嚴・金剛索・金剛塵・金剛鉞

(二)已 和本は心に作る。

一、三、二、四 亂脱

(三)子 恐くは力の字か。

一、三、二、四 亂脱

斧・金剛極笑・金剛成莊嚴・金剛頂・金剛毗那夜迦能斷、是の如きもの及び餘の大障毗那夜迦將主、座より起て頂行が所に至り、到り已て一音聲を以て、是の言を作さく、教令する所の如く我等一切悉くみな作さん、今より已後汝が尊の教令に違越せし、若し違越せば頭百分に破れん。時に頂行彼の大障毗那夜迦等作障將主に告ぐ、我今佛頂を成就する眞言王に説かん、成就者の所ミヤトにおいて不饒益心あらん者百段ならしめ、速疾に馳散し、所有る天世毗那夜迦能く障を作すことなし、是の如く語を作し已て、彼の一切大作障將主上首等、一切世界に於て障を作す者、悉地を奪ふ者、成就を攪擾せん者に於て、我自(二)已が眞言を説かん。

娜謨囉但那二合 但囉二合 夜耶、一 娜謨室戰二合 拏、辯日囉二合 波拏上聲 曳、二 摩訶樂乞叉、二合 細那、波多曳、三 唵、引四 吽發、五 吽吽、發發、娑囉二合 訶引六

復た次に頂行、自の眞言を説くの時、三一切二彼の三金剛莊嚴等大障毗那夜迦みな戰掉し驚怖し悶絶す、祕密主加持(三)子の故に、時に頂行、大障毗那夜迦に於て、指端を以て彼等に擬し、繼かに此の眞言を説くに、一切みな起つ、是の如くの言を作さく、我及び大障主如來、此の眞言形を以て輪王眞言殊勝三摩地に住し、今より已後、三惡心(三)を起し

ニ輪王眞言道を修して升進する者の、我が眞言を日々に憶念せん者には、汝等彼の成就者に於て、障難心を起すべからず、我等彼に於て擁護を作し、我が加護に由て障難親近することあらし、大障將主我れ略説するに障難を作すべからず、若し作すあらば我れ自の杵を以て汝等が頂を摧かん。爾の時に釋迦牟尼如來是の如くの加持を作す、加持に由るが故に金剛手祕密主、座より起ちて佛に白して言さく、世尊我れ説く、佛頂の眞言者及び餘の眞言を修せん者、大明王の如來の族と蓮華族と及び我が族とにおいて先事の法を作さば、此の大忿怒甘露軍荼利、三昧耶を成するが故に、佛頂輪王を成就せば、灌頂の故に狂心の有情狂せざらしめんため故に此の曼荼羅を畫き、河岸の邊或は餘の淨處に於て、其の地に先に所説の輪王曼荼羅儀則の如く四肘曼荼羅に緋つべし、四門あらしめよ、五色を以て曼荼羅を畫き、中央に佛世尊を畫き、蓮華に坐して頂より光を出し、左右に八毗那夜迦衆を畫け、みな蓮華に坐す、彼等の名は所謂る金剛莊嚴・金剛慶・金剛索・金剛鉞斧・金剛極笑・金剛成莊嚴・金剛頂・金剛毗那夜迦能斷なり、みな本形の如くせよ、佛を請するには本眞言を以てし、餘はみな此の眞言を以てす。

心呪。二、娜謨 軍荼利

二、娜謨、囉怛那、二合 怛囉二合 夜耶、一、娜謨、室戰二合 拏、嚩日囉二合 波拏上拏曳、二、摩訶樂乞叉二合 細那、波多曳、三、娜謨室戰二合 拏、縛日羅二合 句略駄耶、四、唵、引五、虎嚕虎嚕、六、底瑟姪二合 底瑟姪、七、滿駄滿駄、八、呵那呵那、九、阿蜜哩二合 帝、吽發、娑嚩引 訶引

此の大忿怒王眞言を以て迦維奢を加持し、種種の飲食を供養し、蓋幘旛を懸け酥燈を然し、此の眞言を以て一切加護を作すべし、師灌頂を與ふべし、聖に於て殊勝物を捨施し、先に説く所の壇の儀軌の如く入らしめ、灌頂を作し已るに、一切の天・龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・毗舍遮・等障難を爲さず、地下の阿修羅女と持明天と及び餘のものもみな隨順す、一切毗那夜迦の族、持明者を見てはみな馳散せん、此より已後諸毒・癩痢・蠱毒みな便を得ず、一切の明眞言聖衆みな隨順せん、此の中纒かに灌頂すれば持明者發起する所を成就し、一切皆な獲得す、彼の有情果報所得の聖甘露軍荼利法の灌頂は、如し淨信せざる者、矯誑せん者、師長に於て恭敬せざる者は、灌頂に入らしむべからず、淨信せしむる者、囉惹愛敬せんことを求むる者、上上成就を求めんもの、三七番灌頂に由て、其の人所有る殊勝の寶物を聖衆及び師に施さば、彼の人の福

一、三、二、四 亂脫

一、三、二、四 亂脫  
二、一心に禁に住  
り、三、味耶禁戒な

七輪王に勝れ、此の曼荼羅に遇ふに、此に入て灌頂を得るに由てなり、一心に禁に住し精進を具し耽著せず、戒を具して師をして歡喜せしめん、彼れ一切悉くみな獲得すること疑なし。爾の時に觀自在菩薩摩訶薩、佛の威神力を以て座より起ち、偏へに右肩を袒ぬぎ、右膝を地に著け、蓮華臺に於て、世尊の前に於て掌を合せ、禮し已て佛に白して言さく、世尊、佛頂眞言王を修せん者を我れ護持せんことを説き、一切をして福報を作さしむるが故に、一切の惡毗那夜迦等に慈心を作さしむ、我が族中堅實にして我が蓮華より生ずる大眞言王を我今説かん。佛言はく汝今之を説いて、有情を利益し、大悲を以て一切を増益せんが爲めに成就を作すが故に、汝自己の蓮華より生ずる所の大忿怒王を、應當に之を説くべし、佛頂眞言を修する者を利益し、天人を安樂ならしめんが故に。時に觀自在菩薩摩訶薩並に得大勢菩薩、右に釋迦牟尼を遶ると七帀して、蓮華大警覺に入る、大菩薩三摩地と名く、此の大眞言を説く。

那謨、囉怛那二合 怛囉二合 夜耶、一、娜謨、阿哩野、二合 嚩盧吉帝、濕嚩二合 囉耶、二、冒地薩怛嚩二合 野、摩訶薩怛嚩二合 耶、三、摩訶冒地薩怛嚩、二合 奴枳娘二合 多引耶、四、度那度那、五、駄囉駄囉、六、冒地薩怛嚩、二合 鉢囉二合 底半寧、七、娜呵娜呵、八、跛遮



跋遮、九阿羯哩灑二合耶、阿羯哩灑二合耶、十吽發、十一 大菩薩纔かに忿怒王眞言を説きたまふに、摩醯首羅・帝釋・焰摩・水天・俱尾羅・那羅延等、及び迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽、一切の集會及び餘の天の類・母天・部多・障毗那夜迦等・みな座より起ち、佛世尊に於て歸依し、惟だ願くは世尊、我を救済したまへ、惟だ願くは善逝我を救済したまへ、世尊、大菩薩の光明を以てしたまふに、我等を逼惱せんものみな自の神通を失はん。爾の時に釋迦牟尼佛、彈指を以て觀自在菩薩摩訶薩を起たしめたまふに、則ち刹那の頃に觀自在菩薩摩訶薩、彼の菩薩の三摩地より、目を瞬がせず佛を觀じ、觀じ已て彼の一切の摩醯首羅帝釋梵王天等に告げて言はく、若し善男子・善女人あつて此の輪王佛頂を修し、若くは此の經を持して早起し、華を散じ、曼荼羅を作り、塗香・華等を以てし、淨信を以て讀み、菩薩の眞言行に於て行せば、汝等人者、成就する者に於て一切の天王・一切の阿修羅王・一切の龍王・一切の迦樓羅王・一切の乾闥婆王・一切の摩睺羅伽王・一切の毗舍遮鬼神王・等みな輪王佛頂を成就せん者に於て擁護を作し、當さに之を修せん時に當て汝供養等の物を當て、彼の人に於て障難を起す<sup>(二)</sup>、若し輪王佛頂眞言を修せん者、我が蓮華より生せ所ん忿怒王を、若し常に誦せば、我れ自ら當

(二) 起すの下、恐くは莫の字、又は勿の字等あるか。

さに彼に於て加護を作さん、何を以ての故に、如來則ち此の輪王の形に住したまふ、是の故に善男子、是の如く輪王佛頂眞言を修せん者をば、十地に住する菩薩すら尙ほ加護を作す、是の如く汝等天王も亦た彼の菩薩行を勤修するもの、並に營從の眷屬に於て觀すること佛想の如くせよと。彼天等咸な是の言を作す、大菩薩今より已後、此の輪王佛頂眞言を修せん者、若し汝が尊の眞言を稱し、此の法教を若くは讀み若くは淨信せば、彼に於てみな擁護を作し、彼れ威力・念力・精進慧力・三摩地方あらば果報を得せしむ、汝が尊の眞言をもて警覺を作すに由て、我等みな作し、佛の加持を以て乃し一切利益を作さしむるに至らば、みな教を奉せん。

最勝成就品第八

爾の時に釋迦牟尼如來、復た金剛手祕密主に告げて言く、復た次に祕密主、我れ今、輪王佛頂成就の業を説かん、汝諦かに眷屬眞言心と及び隨心との、一切の成就の事業を聽け、根本眞言儀軌に依て、已に先事の法を作し、<sup>(一)</sup>牛欄に於て成就せば、手を以て所成就物を按せよ。

牛黃或は雌黃 或は復た一切の寶と 鬼神敬愛するが故に 智者百八を誦し

(一) 牛欄 竺土の牛欄處なり。

一、三、二、四 亂脱

(二) 礙 和本に疑に作る。

一、三、二、四 亂脱

(二) 凡 和本に梵に作る。

四四〇

勝義清淨の者 諸の有情を矜愍す 一心<sup>一</sup>者<sup>二</sup>決定せん 其の物光明を得  
 若し暖なれば空に行くことを得 煙成すれば最勝と爲り 光あれば空に乗じて吉祥にして 彼れ時に輪王たるを得  
 煙に由ては身を隠すを得 暖相は敬愛を成じ 所成就等の物 成就するにみな礙なし  
 大制底を禮敬し 及び窰塔波を作れば 少福の者も成就す 決定して惑ふべからず  
<sup>三</sup>曼荼羅<sup>二</sup>灌頂 慇懃に應當に入るべし 彼れ曼荼羅を見て 慇懃に灌頂を受くれば  
 過現の二の罪滅す 憂怖と及び諸の魅とまでに 若し諸天等と 諸の<sup>二</sup>凡類とを鈎召することを作さば  
 廣く佛像を供養し 後に應さに蓮華 乳糜及び酥蜜を以て 千數應さに護摩すべし  
 誦終らば天召に赴かん 帝釋及び舍支をさへに 何に況んや王類等をや 鈎召

事を作すべし

所有る天の妙事 及び諸の人間の事 能く一切事を作さんには 頂輪王を誦するに由て

諸毒暴惡形ある 諸魅の峻威力ある 諸の疾、療し難き者には 善く諸の事業を作し

意を定めて千八を誦せよ 若し諸の小事を作し 諸の降伏事に於ては 諸の事業に相應し

赤白芥油麻 毒苦棟<sup>(一)</sup>大指 一切にまさに護摩すべし 彼の生を<sup>(二)</sup>摧かしめんがために

<sup>(三)</sup>大菩提妙樹と 吉祥下天の處と 及び轉法輪處と 神通を示現する處と 靈鷲吠舍離と 並に藍毗尼林と 拘尸城等の處とに 速疾に成就を現じ

乃し佛の眞言に至らば 一切成すること疑なし 彼に於ては障難なく 魔の惱害あることなし

是の故に彼の處に於てすれば 速疾に成就すと説く 及び餘の寂靜の處 山峰

(一) 大指 犬指が降伏所用のものなり。  
(二) 摧 高本に説に作る。  
(三) 大菩提妙樹 八相なり、具に八相を説き玉ふことは心地觀經の如し

大河

悅意池恒河に於て 彼の殊勝處に於て 是の如くの所説の處に 像を安し亂意

せず

師に従て灌頂を得て 然る後に成就を作せ 先づ行ずること儀軌の如し 是の

如くの事を作すべし

七月に大勤勇し 心と及び隨心の明と 甲を以て慇懃に護り 當さに神通分に

於て

慇懃に念誦を作し 満月に成就を起すべし 佛像を供養し 三白食を供すべし

一切佛 菩薩及び聲聞 三力に隨ひ及び縁覺金剛手に 飲食等を獻じ 供

養す應し

則ち茅廬に坐し或は結跏趺坐して、一心に自身を佛菩薩に獻じ、沉水香を燒いて佛に

供養し一切の 鬼神ニ食を 及び餓鬼毗舍遮等に施與し、則ち大忿怒無能勝印を結び、

諸の障難者に於て眞言と相應して擲げよ一切の障者みな壞散すること此の印と相

應するに由る二羽を以て互交し二蓋の面相合せ各の上節を屈し、右左を壓し十二輪

一、三、二、五、四、六、六 亂脫

七、三、二、四、六、五、  
二羽云云 内  
縛なり、此は不  
動獨股の印の如く  
して二風の上節を  
屈するなり、  
九、八、十 亂脫

二 鉢喇多哩茶立  
丁字立なり。

七、三、二、四、六、五、  
亂脫

を以て各の餘の三指の甲を壓せ。夫れ此の印を結んで先づ自身を觀じて無能勝忿怒王  
と爲し、加持して恐怖形に作せ、狗牙上さまに出でて種種の頭眼光熾盛の種種の龍を  
以て瓔珞と爲す、身の高さ八萬四千由旬なり、無量の臂に種種の器仗を持し、光明は劫  
盡の時照曜するが如く、兩唇頰戰掉すと觀じ已て、本印を以て自身の五處を加持すべ  
し、印を結んで心に當て、想へ、印金剛縞索となると、右足或は鉢喇多哩茶立にし  
て、魔の所在の方に隨ひて打て、即ち一切の障みな退散せん。

忿怒王の印と名く 能く一切の障を壞す 帝釋の如し成就して 大天那羅

延 及び餘の大威徳 速疾に壞す 諸天 是の如くの印の大力と 相應すれば久しか

らずして壞す 所得の衆生界 此の印を以て速疾に 調伏を得ること

諸の有情あることなく 疑ひなけん

能く一切の毒を降し 總かに念すれば諸の魔を除く 暴惡の諸の有情 及び

諸の惡龍等

二 降和、高の二  
本除に作る。

二〇王和・高二本  
主に作る。

四四四

諸魔大障<sup>二〇</sup>王 速疾にみな滅除し 諸事を作すこと疑ふことなかれ。  
是の如く此の大印無能勝大忿怒王を、佛頂の教に於て修行する者、一切の大障の處に  
用ふべし、一切の事業を成辨す、則ち持明者像前に對ひ酥燈を然すこと、一千八蓋せ  
よ、助伴あらば有情利益のために大悲を起し、輪王根本の印を結び念誦して乃し中夜に  
至れ、即ち相現せば則ち持眞言者、應さに知るべし我れ決定して成就すと。像動き或  
は地動きなば、則ち先に致す所の香・華等を取りて佛菩薩及び像に供養し、及び一切金  
剛部に香を獻じ已らば、金剛手に於て沈水香を焼いて、獻するに頂輪王の根本眞言を  
以てし、復た印を結んで結跏趺坐し、一に意を專注して乃し明相時に至るに、中間に於  
て則ち佛世尊を見たてまつれば、即ち五神通を得、<sup>二</sup>地<sup>一</sup>大菩薩<sup>三</sup>を得<sup>四</sup>一切有情の語言  
威儀を知り、神境通を得乃至上より水を出し、身下より火を出す等、帝釋に往詣せ  
ば成就者に見られ、彼れ成就者を見ん、彼と共に虛を凌ぎ、無量の持明圍遶して、去ん  
と樂ふ所の處にみな隨ひ、則ち至ること無量にして復り來る、菩薩行を獲得し威徳無  
比にして、一身多身となり多身一身と作る、百千無量の變化と作り、石壁及び水來去  
するに礙なく、意の樂ふ所に隨ひて世に住するに、<sup>三</sup>是の如き等<sup>二</sup>由て<sup>四</sup>如來を見たてま

二、一、三、四 亂脫

一、三、二、四 亂脫

つり百千の功徳を得、開持陀羅尼を得、劫壞する時餘の世界に移らん。爾の時に釋迦  
牟尼如來、金剛手祕密主を觀じて大成就を説きたまふ、先の所説の處において、先事  
の法を作し、清淨の處に於て本尊の像を安し、神通分の満月に於て助伴ありとも或は  
助伴なくとも、堅固に勤勇にして一日一夜像前に對し、廣大供養し、三白食を獻して  
外に諸の鬼神に施せよ、轉輪王の曼荼羅あり、阿闍梨曼荼羅を畫け、或は師に従て印  
可を得たる者は自ら畫く應し、過なし、曼荼羅の中に於て像を張て護を作し、方隅界を  
結し、先の所説の眞言一切の印契の如きをみな用ひて結跏趺坐し、本尊をば本眞言を  
以て迎請し、一切の白華及び香ある華を以て一切の佛・菩薩・聲聞・緣覺を供養すべし、  
飲食等あるに隨ひて供養すれば、則ち意を定めて觀じ金剛手<sup>一</sup>、<sup>二</sup>而も大供養を作し、<sup>三</sup>金  
剛鈎金剛拳菩薩を、<sup>四</sup>慇懃に金剛部の智者を供養し、華を以て供養して、即ち結跏趺坐  
し佛前に對し、無烟火を以て沈水香の末を燒き、一千八徧誦して而も護摩すれば、則  
ち障難の種種の惡形を現するに、忿怒王の印を以て打てば、即ち四方に馳散すべし<sup>五</sup>  
◎眞言と印と相應して 當さに四方に擲つべし 設令ひ是<sup>一</sup>、<sup>二</sup>王<sup>三</sup>、<sup>四</sup>天<sup>五</sup>及び現に是  
れ帝釋

一、三、二、四

〇〇〇 亂脫

一、三、二、五、六、四、七、  
亂脫

世間の欲自在 魔天大波旬 或は自の頂行の尊 五忿怒王も當さに壞すべし

印の眞言威力に

爾の時に釋迦牟尼如來此の伽他を説く 七大自在天王 或は梵那羅延 口天或

は火天 水月天・焰魔

曠野に住する者 又王俱尾羅をも 印眞言をもて教の如くすれば 刹那に即ち

滅壞せん。

二、三、二、四 亂脫  
なり。又王 夜叉王

即ち成就者一切みな大忿怒王無能勝を以て、方に隨ひて來る所の障難を息めしめむに、先づ白芥子等を加持して助伴をして擲たしめ或は自ら擲ちて先づ別に華香を置き、一に加持して頂輪王を擲ち散じ、心に念を作して金剛手祕密主を觀じ、警覺し加持せしむるが故に即ち魔障みな息み、佛頂王より光明を出して三千大千世界を照曜し、一切の天宮を映蔽す、金剛手を警覺せんがための故に、光明、三警覺滋澤、照曜し、身自宮より無量百千の持明明王尊、上首金剛將蘇摩呼頂行、持明無量の勝慧女使者、上首明王妃と與俱に、無量の大菩薩前後に圍遶し、無量の使者・女使者制吒・制知・奉教及び女奉教、無數俱胝千の印契俱胝輪王、成就者の願を授與せんがための故に來らん、先の本願に

一、三、二、四 亂脫

一、三、二、四 亂脫

由るが故に、佛世尊、三空しからず、故に祕密主の來りたまふ、時に其の中間に於て一切三千大千世界六種に震動し、一切の天・龍・藥叉・乾闥婆・迦樓羅・緊那羅等、種種の色類、金剛手に於て供養を作す、一切の地獄の有情も刹那須臾の頃に安樂を得、彼の時に當て一有情として互相に害する者あることなし、一切世間・出世間において、眞言明を修せば、菩薩加持を以てみな成就することを得、則ち行者先に置く所の香水闍伽を以てせよ、金剛手行者の頂を摩し讚して言はく、善いかな善いかな大薩埵、善いかな大丈夫、是の如く菩薩みな讚歎したまふ。金剛手纔かに摩頂したまふに由るが故に、一切の天・龍・藥叉等、及び淨居天華を雨らし。上の虚空に於てみな音樂を奏するに、一切の草樹及び山等みな剛手菩薩に向ひて低く靡き、一有情として能く損壞する者あることなし、則ち金剛手祕密主能く無量の難調の有情を調ふるに、三菩薩の慈を以てし、行者を加持して金剛杵を授與したまふ、大薩埵此の金剛杵は、難調伏の有情を調伏し、菩薩地を獲得せしめんための故に、慈を以て加持したまへば、三摩地金剛の如し、善男子、此を以て汝有情の利益を作せ、佛世尊に於て金拂を持し、佛世尊に於て教令を護持し、菩薩の行に於て慇懃に作せ。祕密主是の如く語り已り須臾に

一、三、二、四 亂脫

一、三、二、四 亂脫

一、三、二、四 亂脫  
佛世尊云云  
佛に侍せよとなり  
が故に、

隠れて現せざるに、刹那に其の行者と、三金剛手の如く睹がたし、三眷屬と、乃至人を見及び人彼を見るに、みな空に騰り、光明徧滿して諸天讚揚し、華を雨らし樂ふ所の有情共に空に騰りて、菩薩たることを得、神通を得て難調を調伏し、能く對敵するなし、大持明轉輪王と爲りて意に隨ひて世に住し、百千の眷屬と與に空に騰り、無量世界に往くに、彼の佛を見たてまつり法を聞くものみな勝解を得、一切遊戲神通を知り、大菩薩と與に住し乃至極樂世界に往いて無量壽如來を見、及び曼殊室利菩薩を見、及び餘の菩薩と共に大人の相を以て莊嚴し、頭に頂髻を爲り、種種の眞言教を以て衆生利益を作す、我れ略して説く乃至次第に菩提場に生じて無上正等菩提を證す、是の如く一切最勝成就せば、三灌頂を受けざる者、三惡人、及び菩提心を發さざる者、彌戾車、資糧を積集せざる者、和尚阿闍梨に於て毀謗する者と與すべからんず、説の如く修行する者は、一切みな成就することを得。

菩薩藏品第九

爾の時に釋迦牟尼如來、攝一切佛頂能摧一切魔三摩地に入りたまふ、佛纒かに此の三摩地に入りたまふに、彼の時に於て、此の三千大千世界六種に震動して、無邊の光明

一、三、二、四 亂脫  
二、彌戾車 此に  
賤種といふ。

一、三、二、四 亂脫  
本に此の四字なし

を出す、彼の光明を以て照曜し乃し十方無量の世界に至るまで、みな一切周徧なく大光明を以て照曜したまふ、東方に於ては金剛幢如來を上首として、恒河沙數等の如來是の如し、三西方には無量壽如來を上首として是の如し、六一切佛頂王に攝入す、能摧一切魔三摩地に入るに由るが故に是の如し、北方には光明王如來を上首として是の如し、三南方には帝釋幢如來を上首として是の如し、五上方には勝鬪戰如來を上首として是の如し、下方には寶蓮華山王如來を上首として是の如し、十方の一切如來、一切如來みな頂輪王の眞言に入りたまひ、彼等みな能摧一切魔三摩地に入りたまふ、彼の一切世界の所有る魔宮みな一の火聚の如し、所有る魔界の衆く天子號叫し驚怖して徧身に汗流れ、みな自の神通を失す、一切の菩薩は釋迦牟尼佛を供養せんが故に、上み虚空より華を雨らし、或は劫樹を雨らして覆ひ、三蓮華・牛頭梅檀・衣・紺雲等を雨すに所有る地獄・傍生・餓鬼等の趣に生ずる所の有情、彼れ一切みな刹那の頃に最勝の安樂得、一切の苦逼を離る。爾の時に釋迦牟尼如來、彼の三摩地より起て金剛手祕密主に告げて言はく、金剛手汝今、此の大忿怒王の一切如來の所説たるを受けて、頂輪王の眞言を成就する者のために、加護を作さしめよと、是の如く一切世界の中の一切如來、

雷の誤り  
迦羅頻伽  
迦羅頻伽の轉聲なり

皆な彼の三摩地より起て、各各の世界の中に於て、彼の菩薩のために説きたまふ。爾の時に金剛手祕密主、釋迦牟尼如來應供正徧知を遶ること百千而して、寶蓮華座に坐して目を瞬がず、觀察して住し、觀じ已て世尊に白して言さく、世尊惟だ願くは大忿怒王を説きたまへ、我が成就のための故に、頂輪王の眞言を、修する菩薩摩訶薩の故に。時に釋迦牟尼如來自の意樂を以て鼓音の如く顯暢し、海聲の如く、大雲の震ふが如く、甚深にして善妙に、種種の廣美なること。迦羅頻伽の聲の如く、健妙にして無邊の世界に警告し、如來吼を以て一切の意願を滿し、一切の菩薩をして歡悅せしめたまふ、世尊、釋迦牟尼如來平等に三千大千世界に住して、無能勝大忿怒王を説きたまふ。

娜莫、三漫多沒駄南、一阿鉢囉二合底呵多、舍娑娜南、二唵、三吽、四爾拏哩致吒、五吽、吽發、娑囉引、訶引

金剛手此を無能勝大忿怒と名く、能く一切の障毗那夜迦を摧き、能く一切の魔道を超え、能く一切の惡障毗那夜迦・天・龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等を調す、無量百千俱胝の佛の所説なり、能く一切の世間・出世間の忿怒の眞言を斷じ、

一、三、五、四、二、六  
亂脫

能く一切の佛頂の眞言を修するものを利益することを作し、能く無量百千俱胝の魔を摧き、能く頂輪王の眞言を修する者を護り、一切の時に一切の魔障を調伏して、頂輪王の三摩地に攝入すと。時に、世尊、是の大忿怒王を、時に刹那の頃に、字句言説したまふ、三聞く佛の威神力を以て、此の集會の曼荼羅に於て、大恐怖の師子吼を出して暴怒の形を現じたまふ、世尊釋迦牟尼佛、難調の有情を哀愍し調伏せんがための故に、如來の事を作したまふが故に、大忿怒を變化したまふ、頂輪の眞言行を勤修する、菩薩摩訶薩を利益したまふが故に、薩婆若を示現したまふが故に吼し、大師子吼したまふ、如來是の如くの形像を加持したまふ、恐怖の形にして狗牙上さまに出で、種種の頭あり、眼光熾盛にして種種の龍を以て瓔珞となし、身の高さ八萬四千由旬にして、無量の臂に種種の器仗を持し、光明劫盡の時の照曜の如く、兩の唇頰戰掉し、一切晃曜し、天・龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅等みな摧伏す、一切の三千大千世界に於て、威光を以て映蔽す、佛の光明と及び不思議解脱三摩地に住する菩薩とを除いての餘の光は悉く照曜せず、何を以ての故に、加持の故なり。時に大忿怒王、右に釋迦牟尼佛を遶りて世尊に白して言さく、大精進、教令を示したまへ、我れ何をかなさん、如來の教に依て住せん。

佛大忿怒に告げたまはく、汝一切の佛菩薩の加行を行する者のもとに往いて、利益安樂を作すべし、菩薩地を退轉せざることを獲得せしめんが故に、一切如來の教に入れ如來の教を安立せしめんが故に、一切の佛菩薩の行を修し、大乘に入れしめんがために、惡有情の暴惡にして調しがたき罪心の者の、佛法を壞し調しがたき、障毗那夜迦を調伏し、是の如くの身形を以て三歸依を受けしめんが故に、一切の難調のものをして、無上正等菩提に於て發心せしめんが故に、一切世界に於て佛事を作し、當さに衆生の利益安樂を成じ、無上の解脱道を得しむべきが故に、時に大怒王、衆生を利益せんがための故に、大忿怒王を變化して、此の三千大千世界に、吽の聲を以て一切如來の所説の成就の眞言を徧滿し、一切の佛・菩薩の行を作さんとして、一切如來の加持を以て復た此の眞言を説きたまふ。

娜莫三漫多勃駄南、一阿鉢囉二合底呵多、舍娑娜南、二唵、三吽、爾拏哩致呬、四吽、發、娑囉二合訶、引

彼の時に如來、得勝三摩地を以て忿怒して、眞言の句を成就したまふ時に、一切の大地を見るに劫燒の時の如し、一切の三千大千世界震し、極震し、徧震し、動し極動し

徧動す、是の如く世界六種に震動し、一切の天・龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅、<sup>一、三</sup>等の<sup>二</sup>魔宮みな震動し、熾然にして光明一切の天に徧し自の神通を失してみな戰掉し、一切の難調の毗那夜迦等悲惱す、光明の逼るを以てみな佛法僧に歸依して、みな是の如くの言を作さく、世尊今より已後我等咸く一切有情を利益することを作さんと。一切の障毗那夜迦及び餘の大威徳の難調の鬼魅等、世尊のみもとに往詣して、頭面に足を禮し一音聲を以て是の言を作さく、世尊所有る後末の時に於て此の頂輪王の眞言を成就せんと欲はん者、若し誦すれば我等成就を與へん。爾の時に世尊、彼の障毗那夜迦のために讚歎したまはく、善いかな善いかな大障毗那夜迦、善く此の語を説く、如來みな隨喜したまふと。時に彼の一切の障毘那夜迦、一音を以て是の言を作さく、世尊彼の善男子の、頂輪眞言を勤修する者のために加護をなし、其の念力を加へんと。爾の時に天帝釋、頭面に足を禮して佛に白して言さく、世尊我れ多の如來に従ひて眞言行の所説を聞く、世尊若し復た轉輪王の三摩地變化に入ることを得、此の頂輪王の三摩地に於て疑なきを得る有情は、無量の善根を積集すべし、世尊若し佛頂の眞言行を修して入ることを得、若しは受持讀誦して廣く他のために説くことあらんに、



世尊我等<sup>一</sup>、<sup>二</sup>彼の善男子がために承事を任さんと、<sup>三</sup>并に諸の營從、<sup>四</sup>時に四天王並に眷屬、佛に白して言さく、<sup>五</sup>邨邑聚落王城に於て此の佛頂輪王を成就し、若しは念誦し所在の處に流行する所あらん、世尊我れ並に眷屬の軍營從り五由旬において加護を作さん、世尊若し<sup>一</sup>、<sup>二</sup>成就せば<sup>三</sup>明王を念誦することを<sup>四</sup>我等四天王眷屬と共に<sup>五</sup>彼に往いて、彼の行者に供侍せん、輪王の眞言を修する所の者は、一切の障毗那夜迦の便を求むる者其の便を得じ。時に世尊、金剛手に告げて言はく、<sup>六</sup>祕密主汝自の眞言を説け、頂輪王の眞言を修する者の障を壊せんがための故に、守護し災を息め吉祥ならしめんが故にと。時に金剛手、世尊の教令を得て、佛の威神力を以て自心の四字の眞言明王を説きたまふ。

娜莫、三漫多勃馱南、一阿鉢囉<sup>アハハラ</sup>二合底呵多<sup>カチカカ</sup>、含娑娜南<sup>ササダナ</sup>、二嚩日囉<sup>ワラ</sup>二合<sup>ム</sup>吽<sup>ム</sup>囉<sup>ム</sup>切<sup>ム</sup>、<sup>三</sup>扶可<sup>ム</sup>の

(一) 吽 和本に呵に作る。

時に金剛手、大明王の眞言を説きたまふ時に、此の三千大千世界六種に震動し、十方の空中に於て毗那夜迦<sup>(一)</sup>吽呵の聲を作す、時に金剛手是の如くの言を作さく、世尊若し輪王佛頂の眞言を成就する善男子・善女人・比丘・比丘尼あつて、菩提心を發して三時に我が眞言を誦すること一徧せば、一切の障毗那夜迦附近することを得じ、我れ彼の持明の

(一) 於 和本爾に作る。

ために金剛杵を持して加護を作し、一切の時に<sup>一</sup>成就を與ふべし<sup>二</sup>彼の行者に眞言明の<sup>三</sup>爾の時に世尊、金剛手に告げて言はく、<sup>四</sup>祕密主若し此の輪王佛頂の大明王を受持すれば、一切如來の三昧において最勝なり、若しは讀み若しは他のために廣く説いて顯示し、多の有情に長夜に利益安樂を作さんがために、如來智を證せんがための故に、修行すべし、若し善男子・善女人あつて、若しは成就し若しは讀み、若しは供養し若しは常に念誦せん、其の人は久しからずして速かに無上正等菩提を證せん。<sup>(一)</sup>於時に世尊、上首の普賢菩薩等に告げたまはく、善男子此の阿僧祇俱胝劫に積集せる正等菩提を我れ隨喜す、是の如くの法要に於て佛加持し攝受したまふ、如來涅槃の後末の時に、瞻部洲に於て善根を積集せん有情、經卷を書寫し手に經ん者、若しは復た善男子・善女人の<sup>二</sup>天・龍・藥叉王・大羅刹王、<sup>三</sup>善根を積集して無上正等菩提を獲得せんとするをば<sup>四</sup>身を隱して衆生に於て加護を作すべし。時に普賢等の上首の菩薩、佛に白して言さく、世尊、奇きかなや此の法教、世尊、我等彼の頂輪を勤修する善男子・善女人のために、此の如來の無數百千那由他劫に積集したまふ所の無上菩提において我等護持す、是の如くの類に於て若しは受持し若しは讀誦し、乃至經卷を書寫せば、我等彼に念力を加せ

一、三、二、四 亂脱

一、三、二、四 亂脱

ん、此の念力に由て是の如くの類の、法教を聞き若しは聞いて圖かに證し、當さに受持し讀誦し書寫すべし。爾の時に世尊、天衆に告げて言はく、天子法教流轉の方所に於ては、汝等轉法輪の想を作すべし、是の如く善男子、<sup>三</sup>正法を<sup>二</sup>若し供養せば<sup>四</sup>當さに知るべし我を供養するが如くせよ、何を以ての故に、天子法身とは是れ如來の身なり、若し法を供養すれば即ち爲れ如來を供養するなり。爾の時に世尊而も伽他を説きたまふ、<sup>一</sup>。

<sup>三</sup>戒を持して蘭若 城邑及び聚落に住し <sup>二</sup>若し上成就を欲はば <sup>四</sup>誘せず矯誑せずして

當に利益を作すべし。

爾の時に世尊、曼殊室利菩薩童子に告げたまはく、是の如し佛頂の眞言を修する菩薩摩訶薩は、是の如く法を獲得し眞言行を修して、一切の菩薩の法を滿せん、童子我れ略して無量の菩薩の神通を得る法を説き、此に於て復た佛頂の眞言行の善巧法を説く。時に無量百千の菩薩、世尊に於て、種種の金・銀・眞珠の瓔珞を自の頸より脱して、法を供養せんがための故に捨施し供養す。爾の時に世尊、一切の衆會に告げて是の言を作

(二) 熱和・高二本に就に作る。

したまふ、若し此の明王を成就するものあつて、彼の菩薩の行に於て此より捨て終て乃し菩提場に坐するに至るまで、惡趣に墮せず下族に生せず、弊惡ならず、短壽ならず、壽命長遠にして善く有情を成<sup>三</sup>熟し、佛刹を成就し菩提心に迷惑せず、所生の處に宿命を憶し聞持して忘れざることを得、無盡の集會に常に寂靜を樂ひ大辯を成就し、自在にして大福あり、妙色缺減せず、語威肅あつて人をして聞かんことを樂はしめ、善く一切如來に承事し、善く諸波羅蜜を滿し、善友に攝受せられて惡友を遠離し、天・龍・藥叉・部多・魅・母天・毗舍遮・緊那羅・摩睺羅伽等能く沮壞するものなく、一切の疾病を離れて非時に天死せず、一切の明みな成就することを得、一切の發起する所みな善能く作し、善妙方便を以て能く一切の事業を成就す、善男子、我れ略して説かん、頂輪眞言を成就せん者は、無量の功德福利を獲得し、一切世間の書論・工巧みな能く知り、乃至菩提場に坐すべしと。世尊、是の經を説き已りたまふに、彼の大菩薩摩訶薩及び聲聞、一切の天・龍・藥叉・乾闥婆・阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽・人・非人等、彼の一切の集會、佛の所説を聞いてみな大いに歡喜して、信受し奉行しき。

國譯一字奇特佛頂經卷下終

兎三、四。縮四、五。  
唐十六卷。縮四、五。  
唐の菩提流志の譯  
又一字佛頂轉王經  
又五佛音經と名  
くる六卷の經あり  
同本の異譯なり、此  
の經は少略なり、此  
本經は釋迦金輪に  
屬す。

(一) 意和・高二本  
には慧に作る。

國譯菩提場所說一字頂輪王經卷第一

唐特進試鴻臚卿三藏沙門大廣智不空 詔を奉じて譯す

序品第一

是の如く我れ聞きき、一と時薄伽梵、菩提樹下に住したまひて、大菩薩衆と與なりき、  
所謂る金剛幢菩薩摩訶薩・觀自在菩薩摩訶薩・得大勢至菩薩摩訶薩・金剛手祕密主菩薩  
摩訶薩・寂靜慧菩薩摩訶薩・金剛慧菩薩摩訶薩・堅固慧菩薩摩訶薩・虛空無垢菩薩摩訶  
薩・無垢慧菩薩摩訶薩・普賢菩薩摩訶薩・無盡(一)意菩薩摩訶薩・虛空庫菩薩摩訶薩・超三  
界菩薩摩訶薩・持無能勝菩薩摩訶薩・持世間菩薩摩訶薩・天冠菩薩摩訶薩・文殊師利童眞  
菩薩摩訶薩・月光童眞菩薩摩訶薩・不思議慧菩薩摩訶薩・虛空藏菩薩摩訶薩・除一切蓋障  
菩薩摩訶薩・大精進菩薩摩訶薩・慈氏菩薩摩訶薩・寶髻菩薩摩訶薩・寶手菩薩摩訶薩・妙  
臂菩薩摩訶薩、是の如き等の菩薩摩訶薩を上首と爲す、得た大苾芻衆と與なりき、所謂  
具壽舍利子・具壽迦葉波・具壽那提迦葉波・具壽大迦葉波・具壽伽耶迦葉波・具壽目犍連・

(一)大目健連 別人の出處なり。

(二)制底衆 流志本に制底君惹羅といふ。  
(三)善界 流志本に曰く蘇使摩と。  
(四)三、二、五、六、六 亂脱

(四)天云云 流志本には、及び他方の無量の諸天・天子・阿素洛・阿素洛子等ありと。  
(五)噓陀羅天 流志本に云く大自在天。  
(六)毗紐天 流志本に那羅延天といふ。  
(七)俱尾羅 流志本に多聞天王といふ。

具壽(一)大目健連・具壽滿慈子・具壽難陀・具壽烏波難陀・具壽賢善・具壽阿泥樓駄・具壽迦旃延子・具壽俱郁羅・具壽驕梵波提・具壽大驕梵波提・具壽孫陀羅・具壽大孫陀羅・具壽須菩提・具壽者宿・驕陳如・具壽(二)制底衆・具壽羅睺羅・是の如き等の大阿羅漢を上首と爲す、復た無量の諸天及び諸の天子と與なり、所謂る帝釋・梵王・大梵王・夜摩天・水天・俱尾羅天・(三)善界天子・他化自在天・(三)乃至光音・淨居天衆・是の如き等の大威徳天子を上首と爲す、復た無量の阿蘇羅・無量の藥路茶・無量の緊那羅・無量の羅刹婆・無量の比舍遮・無量の母天衆・無量の部多衆・(二)那羅延天・伊舍那天・(五)無量の部多衆と與に圍繞せり、  
難提自在を上首と爲す、(六)大自在天を上首として、無量の瘡鬼衆と與に圍繞せり、  
拏你毗紐天も亦た無量の瘡鬼衆と與に圍繞せり、彼の衆會に於て、(四)天及び天子・阿蘇羅・阿蘇羅の子・是の如く一切の天・龍・藥叉・乾闥婆・阿蘇羅・緊那羅・摩睺羅伽・羅刹衆等ありき、復た持明成就者あり、所謂る輪成就者・劍成就者・金剛杵成就者・蓮華成就者・鉞斧成就者・如來部明成就者・蓮華部明成就者・金剛部明成就者・(五)噓陀羅成就者・(六)毗紐天成就者・母天衆成就者・摩睺羅伽成就者・藥路茶成就者・龍成就者・拏你成就者・藥叉成就者・摩尼跋捺羅成就者・(七)俱尾羅成就者・水天成就者・梵王成就者なり、是の如

(一)術道 術は食律の切、邑中の道なり。

(三)是に於て云云 已上は通序已下は別序なり。

(三)爾の時云云 已下正宗分。

く無量の持明成就者を上首と爲して、百千の眷屬と俱なりき。復た日月天子ありて上首と爲して、無量百千の宿曜と與に圍繞して以て眷屬となし俱なりき。復た無量の如來の族・蓮華族・金剛族・無量の明王・使者女・使者衆・金剛・毗那夜迦・盡無餘の世間・出世間の衆、一切の山河・池・園苑・(二)術道・四衢・林神・樹神・江神・城郭神・村神・屍林神・烏娑路羅迦神・惡夢神・地底神・宮殿神・是の如き等を上首として、乃至此の三千大千世界の中に於て、天・龍・藥叉・羅刹婆・乾闥婆・阿蘇羅・藥路茶・緊那羅・摩呼羅伽・及び諸の母天・瘡・大瘡・毗那夜迦・餓鬼・大餓鬼・必舍遮・藥叉・羅刹婆等の大威徳者、各の大威徳の眷屬と俱んじてみな菩提場に於て五百由旬の内に住す、大集會の衆、佛の威神加持を以て互に相逼惱せず。(三)是に於て世尊、如來莊嚴吉祥摩尼寶藏大寶樓閣に於て、慈氏等の上首の菩薩に告げ言はく、善男子、此の菩提場莊嚴樹は我が所坐の處なり、我此に於て坐し已て四魔を摧き、無上佛智を證成す、汝等咸く是の處に坐すべし、一切智佛智みな生出することを得んと。世尊是の語を説き已て默然として住したまふ。  
(三)爾の時に金剛手祕密主菩薩、佛の威神及び本願力を以て座より起ち、偏へに右肩を袒ぬぎ、右の膝を地に著け掌を合せ、佛世尊に向ひて禮を作して佛に白して言さく、世

(二) 觀自在云云  
蓮花部。一切如來 佛部。

尊我れ世尊如來應正等覺に問ひたてまつる、佛頂の眞言を修する異の方便を以て、一切如來の所説の眞言明教を加行し修習し、曼荼羅の印契を安布し、成就し易き事業・一字轉輪王佛頂の、大三摩地印曼荼羅に入り、成就處の軌則、念誦し印を安布する最勝の事業、祕密畫像の法、魔を止め災を息め、増益・調伏するの法、是の如く一切如來部の眞言、一切世間・出世間の明眞言において、最勝にして他に陵突せられず、無盡の衆生界の菩薩の眞言行成就し、此に由て一切の有情安樂に獲得することを。此の佛頂輪王の、瞻部洲の衆生一切如來の眞言を修する者に於て、大佛事を作したまふに由るが故に、此の世界の瞻部洲の衆生一切の安樂を獲、能く成就することを堪任するに由るが故に、一切の天・一切の天族・一切の藥叉・一切の藥叉族・一切の緊那羅・一切の摩呼羅伽・一切の龍・一切の龍族・一切の天・龍・藥叉・乾闥婆・阿蘇羅・藥路茶・緊那羅・摩呼羅伽・人・一切の世間・出世間の印眞言において、利益を作すが故に、成就するが故に、欺き陵さしめず、尊位に安せしむるが故に、一切有情の佛頂の眞言を修する者をして、一切の苦惱を除き、我が眞言の族をして成就せしむるが故に、(三) 觀自在等の大菩薩の眞言行を光顯するが故に、(四) 一切如來の印曼荼羅を説く法要を成就するが故に、無量の如來の

(一) 是云云 啓白  
するは是に已んぬ  
ゆとも讀む。

一五七、四三六、二八  
亂脫

(二) 一切佛頂云云  
金輪は自性智徳  
の最上なり。顯教  
の意に約すれば、自  
受用智法身なり。自  
釋迦金輪王大日金  
輪は一往は別なる  
に似たり。今總  
身は諸相より光明  
を出し給ふは是れ  
最極無上智の故なり。  
一、三、二、亂脫

所説の眞言印曼荼羅の成就し難き者をして、成じ易からしむる故なる理趣・法句・法要を、惟だ願くは如來應正等覺説きたまへと(一) 是を啓白し已んぬ。爾の時に世尊、金剛手祕密主に告げて言はく、善いかな善いかな祕密主、汝一切衆生を利益し安樂ならしめんが爲めに、輪王佛頂の(二) 眞言行成就し、(三) 精進して勤むる、(四) 住持する者を、(五) 一切如來所説の眞言を、汝能く如來に是の如くの事を問へり、是の故に金剛手、我れ汝がために説かん、先佛已に説きたまふ、未來にも當さに説きたまふべし。爾の時に釋迦牟尼如來、佛眼を以て一切世界を觀じ、觀じ已て未來の有情のために、本願福力を以て加持し、觀じ已て一切の菩薩大衆に告げて言はく、善男子、汝等一切如來所説の輪王の一字を憶念せよ、一切法三摩地に入りて不思議奇特神變を作し、一切世界に於て大佛事を作し、一切の三摩地の中の最勝の句なり、咸くみな作意せよと。時に一切の菩薩咸くみな(六) 一切佛頂輪王大眞言王及び三摩地の句を憶念す、唯し祕密主と觀自在大菩薩とをば除く、如來の加持に由るが故なり、時に世尊(七) 大菩提樹下に坐し、大福生地に於て(八) 如來佛遊戯三摩地に入りたまふ時に、一切如來悉くみな同じく是の三摩地に入りたまふ、世尊彼の時に一切の衆生界を憶念し攝受して、無量恒河沙俱胝劫

二〇 難行苦行 此  
等の文の意は三乘  
教の如く會座に聲  
聞衆ある故か。

二〇 無量百千云云  
佛自證成覺の處に  
して是れ自受用身  
なり此の光明は  
智慧の光明三昧な  
り。

に積集したまへる施・戒・忍等の波羅蜜、無量の二〇難行苦行を以てせる、大丈夫の相より光明を出したまふ、所謂る頂よりし、白毫相よりし、眉よりし、眼よりし、鼻よりし、耳よりし、唇よりし、頭よりし、袈裟よりし、膊よりし、手よりし、臍輪よりし、二の乳よりし、二の乳の間よりし、項よりし、二の脛よりし、二の膝よりし、二の脛よりし、二の踝よりし、是の如く坐處より、二足より、如來の法輪印の處、是の如くの眞多摩尼寶の處、如來鏤訖底三昧の處、錫杖印の處、是の如く一切如來心印の處よりし、無能勝忿怒轉輪王入三摩地無能勝印の處よりし、是の如く一切如來大慈の處・大悲の處・一切如來の三摩地の處、是の如く無畏の處よりし、記誦の處よりし、是の如く一切如來の明眞言の處より光を放ち、一一の光明に於て無量の光明を以て眷屬と爲し、佛の頂より二〇無量百千の光明を出して、種種の色類青黃赤白紫色にして、無量の佛刹を照し、此の三千大千世界の一切の地獄傍生を照して、悉く塵翳をば除息し、一切の苦を息めて一切の眞言行を建立し、諸の菩薩に於て一切の義利を作し、大福莊嚴を成就し、一切安樂にして成就し易からしめ、刹那の頃に於て一切の義利成就を作し已り、恒河沙數の佛世界の魔宮殿に於て、咸く萎悴せしめ、一切の魔光を映蔽したまふ、乃

二〇 示現云云  
は此の上の一菩薩  
場所説一字頂輪王  
經一切天流志  
本には一切天流志  
を類すといふより  
見れば天の字は  
大の字ならんか。

し有頂に至り下も無間大地獄に至るまで、邊際は一切の處に照曜し光耀あて、一切の有情を驚覺し、復た來て世尊を旋遶すること三市し已て、各各に本處に没入す。

二〇 示現眞言大威德品第二

爾の時に釋迦牟尼如來、彼の三摩地より起つて、佛眼を以て一切の佛刹と、彼の一切の天集會とを觀じて、師子の奮迅する如くに顧視して、金剛手祕密主に告げて言はく、金剛手汝今諦かに聽け、一字佛頂大明王及び四大佛頂及び毫相等の大利益を作したまふ成就者、明妃・如來手・如來鉢・如來唇・如來口・法輪等の大明王、所有る一切衆生界において、一切有情の、佛頂眞言行を勤修する菩薩等、及び一切有情の菩薩乘を受持する者、苾芻・苾芻尼・塢波塞迦・塢波斯迦に於て、一切の天、世間に沮壞せられざらしめ、不退轉を獲得せしめ、一切みな安樂なることを獲しめ、一切處の一切の苦惱を悉くみな除滅せしめ、一切みな悉く大慈行を起し、同一味相にして火に燒かれず、水に溺せられず、刀に傷られず、毒に中てられず、蛇に齧はれず、一切の難を被らず、一切如來の所説の大眞言を受持する菩薩、及び餘の大乘を淨信する菩薩衆の有情、此の一切如來の三摩地より出生せる大眞言を受持する者、及び餘の大明王を受持する者は

牛黄を以て樵皮の上に於て、此の陀羅尼を寫し、<sup>三</sup>髻<sup>二</sup>頭<sup>一</sup>中に安すべし、若し是れ苾芻・苾芻尼ならば、此の陀羅尼を寫して袈裟の中に繫在せよ、若しは塢波塞迦・塢波斯迦ならば手臂に繫在し或は頸の下に在け、若し國王帶せば他の敵に侵擾せられず、晝に臥して安く、覺めても安く、大威徳の賢聖の諸天、而も常に擁護せん、是の如く及餘の有情若し能く此を持すれば、眞言行を勤修する者、一切處に無礙なることを獲得す、一切の人見て悉くみな歡喜し一切の苦を遠離し、一切の安樂を得、一切の人天供養し恭敬し、一切の天・龍・乾闥婆・阿蘇羅・藥路茶・緊那羅・摩呼羅伽・餓鬼・必舍遮・一切の難調の障毗那夜迦、敢て逼近せず惡趣の怖を離る、祕密主此の大明王及び明妃の眞言句は、一切の有情の菩薩の行を勤修する者、及び佛頂の眞言を修する者、此を以て息災吉祥の事を作さば、惡星の陵逼するみな息滅することを得、一切衆生の義利を作し一切の天・龍・藥叉を鈎召す、祕密主我れ略して佛頂の眞言を修する者のために、速疾に悉地を得ることを説いて、一切の事業を作さしめん。世尊是を説き已て金剛手に告げたまはく、此れ一切如來所説の大眞言王たる大佛頂・白傘蓋佛頂・高佛頂・勝佛頂・光聚佛頂なり、是の如く大佛頂眞言王、一切如來三摩地に入て勤勇力あて等敵にして、み

(二) 等説 流志本には「是の呪を合説する」に作る。

(三) 唯 自餘の經軌にはなし、蓮華部の壽命の句に唯字を加ふるこ政祝の眞言目錄に見えたり。

な殊勝なる三摩地を成就し、一字頂輪王佛眼・毫相・大慈・大悲・佛牙並に無能勝・如來手・如來鉢・如來袈裟・如來法輪並に明妃<sup>(二)</sup>等<sup>(一)</sup>じく説きたまふ、大悲奮迅の大人の相師子吼より流出せり、一切の菩薩も摧壞すること能はず、一切の佛加持して共に隨喜し大慧を以て幽暗の者を照曜して光明を作さしむ、甚深の智を以て無塵垢を作し吉祥吉祥を作さしむ、一切世間の中に最勝尊貴なり、最勝の無塵無垢四無所畏を作し、端嚴の慧を作さしめ、廣大無量殊勝の智を作さしめ、堅固勇猛金剛鈎鎖の身に作さしめ、十力を作さしめ、大威徳を作さしめ、愚暗を拂除せしめ、一切の佛智を作さしめ、大いに一切の菩薩の功徳藏を護ることを作さしめ、能く一切智智ならしめ、能く寂靜句ならしめ、無礙勇猛の威徳を作さしめ、最勝慧を作さしめ、難調の衆生の種性をして慈心を生せしめ、能く一切如來熾盛三摩地を作すは、大眞言明王一字頂輪王なり、而も眞言を説いて曰く、曩莫三滿多沒駄喃、<sup>引</sup>唵<sup>二</sup>引<sup>一</sup>步嚕<sup>三</sup>引<sup>四</sup>唵<sup>五</sup>三合嚕<sup>六</sup>字彈舌

釋迦牟尼世尊、纔かに是の眞言を説きたまふに、譬へば瞻部洲の大風一切の樹林・叢林・藥草の葉及び華果を吹いて、悉くみな振動するが如く、是の如く纔かに是の輪王の一字の眞言を説くに、三千大千世界六種に震動して、須彌盧山も亦たみな大いに動き





世尊是れ何の奇特ぞ、世尊曾て未だ如來の此の頂輪王の形、光明の聚を持したまふをば見ざる所なり、是れ何の希奇ぞや。佛の言はく、善男子、頂輪王の色形を持する三摩地は、一切の諸佛世尊佛の遊戲神通なり、善男子、大曼荼羅に於て集會して、汝等眞言身を作し變化して不思議に住して、大威徳を顯示するが如く、是の如く是の如し、如來轉輪王の眞言色形身に住して顛示したまふ、善男子、此の佛頂轉輪王は一切如來の眞言身、最勝の三摩地に住するときは、一切の諸大菩薩及び一切の眞言、明王・明妃一切の諸天能く遠越するものなし、善男子、此の眞言轉輪王佛頂有て、若し人有りて誦持する處には五百由旬の内の一切の明、世間・出世間において流通せず、成就せず、汝等が所説の清淨の眞言、所加持の眞言成就せず亦た往せず、亦た威徳を現せず、若し纔かに此の眞言を憶念すれば、一切の世間・出世間の眞言悉くみな成就す、汝等が所説の加持眞言身の、一切成就すべからず應驗を現すまじき者も、此の眞言を以て之を成就すべし、五百由旬の内の地方の天・龍・藥叉・乾闥婆・阿蘇羅・藥路茶・迦樓羅・緊那羅・摩呼羅伽・菩薩の眞言身に住せば、處に於て住するに堪忍せず、遊行せず成就せず、現驗を與へず悉地を與へず、何を以ての故に、此の佛頂輪王の三摩地に住

の經の意は佛頂は明王、佛眼は明妃なり、瑜祇經は爾ならず、純部の故なり。五百由旬流志本にも、又五百輪轉那さいよ。一切呪王悉く住を成ぜざるなしといふより見れば、今も住の字か。若し往させば本尊が降來の義ならんが。

眞言一字眞言。修法の時、散念誦の初後に佛眼の咒を誦するの本説なり。誦す一七遍なり。爾の時云云。已下白傘蓋佛頂章。身蓋は即ち一切の傘蓋にして諸佛の身なり、徳三千の身に蓋ふ義なり、灌頂の時正覺壇に於て白傘を受者に授くるは此人成佛して大千界に傘蓋たらん表示なり。

するに由て能く欺陵することなし、佛眼の眞言三昧耶をば除く、此の眞言を用て七編之を誦するときは、則ち其の身寂靜なり、若し然らざれば其の威徳能く堪忍することなし、其の眞言を修する者は、心す須らく初後に此の佛眼の眞言を誦すべし、十地の菩薩も尙ほ此の輪王の威徳に堪忍すること能はず、何に況んや餘の天王・小類の有情をや。爾の時に世尊、佛頂の威徳を顯すが故に、佛の傘蓋の威徳を現せんと欲すが故に、一切の佛傘蓋加持の故に、是の時に白傘蓋佛頂王に住して、身傘蓋の形が如くして、此の三千大千世界を蓋ふ、一有情として質礙を作すものなし、白傘蓋の形悉くみな佛の頂に覆ふ、其の傘蓋の頂は如來の頂中に當る、觀自在菩薩金剛手祕密主菩薩、佛世尊に問ひたてまつる、世尊此は是れ何ぞや、傘蓋の色形にして三千大千世界に蓋覆して住せり、世尊の頂上に住して其の邊際を見ず、得て以て觀察瞻觀すべからず、其の邊際に往くべからず。佛の言はく仁者此を白傘蓋佛頂王と名く、無量の如來の共に宣説したまふ所、一切如來の無量の色寶、普徧の音聲一切の眞多摩尼寶間錯し、寶珠の網普徧なく不思議の莊嚴を現前して影現することを作す、是の諸佛世尊の傘蓋は一切如來の傘蓋なり、佛頂王傘蓋と成て一切有情の速疾の成就を作す、是の

(二) 眞言身形  
白傘蓋佛頂。

一切の諸佛の傘蓋を名けて白傘蓋と爲す、大威徳の菩薩も其の邊際を得ず、千俱胝劫に於て度量すとも亦た其の邊際を得ず、亦た邊際を見ること能はじ、時に世尊釋迦牟尼、佛頂王を觀じて自の神通威力加持を以て(一)眞言身形に住して、而も眞言を説いて曰く曩莫三滿多沒駄南、引一、引二但他藥觀、引三沙、引四阿娜嚩路吉多、引五母嚩駄引六、引七摩摩摩、引八呼匿引九切引十七。

(三) 爾の時云云  
已下光聚佛頂。

彼の時に當て此の三千大千世界みな動搖し震ふ、爾の時に世尊諸の菩薩に告げて言はく、諸の菩薩此の白傘蓋佛頂眞言は、能く一切の眞言を成就し能く鈎召す、是の大明王は不空無礙にして勇猛なり。(二)爾の時に世尊、佛頂王の威徳を顯揚するが故に、一切有情の利益を作すが故に、能く一切の災禍逼迫を息除し、能く世間、出世間の眞言を斷壞せんとして、此の眞言句を以て加持を作したまふ、無量の菩薩稱讃す、無量俱胝の佛此の佛頂王光聚を説いて、大威徳を現せしめたまふが故に、是れ輪王佛頂の威光金剛句なり、而も眞言を説いて曰く 曩莫三滿多沒駄南、引一、引二但他藥觀、引三沙、引四阿那嚩路吉多、引五母嚩駄、引六帝嚩囉始、引七六呼、引八七入嚩、引九入嚩、引十入嚩、引十一八駄迦駄迦、引十二九娜囉囉囉、引十三十尾娜囉尾囉囉、引十四十一瞋那瞋那、引十五十二頻那頻那、引十六十三呼呼、

泮吒泮吒、十四娑嚩二合 訶引十

一、三、二、四 亂脫

此の眞言を説き已るに、三千大千世界寶燭燈の形の如くして、無量に間錯し照曜して蓮華色と爲る、帝青寶の葉あり、焰と爲りて晃曜して一切の虚空際に現す、一切の寶聚寶帳と爲て鈴鐸間錯し、一切莊嚴せり、光聚の變化力を以て、門界道をなし、種種に普徧せしめ、佛の威徳を以て示現して、徧なく虚空界を覆ひ加持して住す、一切の菩薩をして歡喜を作さしめ、一切安樂を獲得す、佛頂より光明を出して、(三)一切の世間・出世間の眞言明を感二感三みな其の加持を斷壞して破し奪はしめ、成就せざらしむ、何を以ての故に、大威光藏の故なり、爾の時に世尊、金剛手祕密主に告げて言はく、祕密主、此の一切如來光明照曜光聚佛頂は、此の光明に由て三千大千世界を照曜して、下も無間地獄の邊際に至り、乃し有頂に至るまで照曜して、一切の魔宮悉くみな萎悴し虚空際に於て照曜を作す、金剛手此の佛頂王は能く一切の眞言を斷ず、纔かに此の眞言を誦すれば修行者の意に隨て世間・出世間の眞言を斷せしめ破せしめ壞せしむ、唯し輪王佛頂・白傘蓋主佛頂・高佛頂・勝佛頂・佛眼・五字如來心を除く、此を除いて餘の一切世間・出世間の眞言明を斷壞して、打たしめ伏せしめ縛せしめ攝せしむ、修行者若し纔

(二) 五字如來心  
引四七三

かに名を稱し纒かに誦すれば、意に随つて難調の鬼魅を壊せしめ、打たしめ馳走せしめ、挫辱せしむ、金剛手此の光聚佛頂は非處にして誦持すべからず、舍利ある處、誦持すべし、賢聖諸尊の所攝受の處に於て、何を以ての故に、此の威徳光聚佛頂は輪王の威徳に等同なるが故に、若し爾らざれば即ち傷損せられて、即ち聖衆降臨したまはず、諸魔便りを得ん、當さに知るべし、清淨の處及び舍利ある處、聖人得道の處に於て、先づ三昧耶を以て加持し、復た(二)輪王の三昧耶(三)佛眼を以て加持せよ、若し此に異んせば即ち傷損せられ、久しく修行すと雖も成就せじ、此の光聚大眞言王は、餘の眞言を修する者に於ては輒く誦することを得ず、何を以ての故に、彼の眞言主の威徳を損するが故に。當さに知るべし閑靜密處に於て、或は河側に於て、或は池邊に於て或は海岸に於て、或は山間に於て、或は窟に於て、或は聖人の制底を作りし處に於てすれば、其の修行者大威徳を獲、力を具し大精進を具し念を具し慧を具し、餘部に於て悉地を得る者に等同なり、威光威徳猶如し輪王のごとくにして、眞言成就すべし、秘密主此の明王は能く不思議の威徳を生ず、秘密主此は是れ如來の威なり、如來の光なり、如來の加持なり、一切諸佛の光明威徳、光明の禮、光明の性なり、一切有情に

(二)輪王 一字呪  
七遍。  
(三)佛眼 佛眼呪  
七遍。

(二)爾の時云  
高佛頂。

威徳を與へ、能く威光の性を生ず、金剛手能く一切眞言を斷じ、能く難調の者を調し能く他の眞言威を壊す、此は是れ大威徳大神通あて、能く一切の事を成辦す。(二)爾の時に世尊、復た無盡の法界を觀知したまひ已て、衆生を利益せんが故に、能く如來の力三摩地より等流せる、一切菩薩の無邊の力をして勇猛ならしめんが故に、一切の佛の加持したまふ所を説きたまふ、一切の眞言を修するものに安樂を與へんが故なり、眞言を説いて曰く、曩莫三滿多沒駄南、引唵、引入嚩<sub>二</sub>合<sub>一</sub>攞、入嚩<sub>二</sub>合<sub>一</sub>攞、三你比也<sub>二</sub>合<sub>一</sub>你比也、二合<sub>一</sub>那<sub>二</sub>合<sub>一</sub>都、三瑟尼<sub>二</sub>合<sub>一</sub>沙、四度那度那、引吽<sub>五</sub>爾の時に一切世界悉くみな震動し、一切の天・龍・藥叉・乾闥婆・阿蘇羅・藥路茶・緊那羅・摩呼羅伽・迷悶し癡亂してみな神通を失し、三難調の者焼かれ<sub>二</sub>毗那夜迦、<sub>二</sub>阿呵の聲を出す、爾の時に世尊、秘密主に告げて言はく、秘密主此を高佛頂王と名く、一切如來の三摩地力、勇猛大精進の大力あり、若し善男子・善女人あつて、輪王佛頂を修習せん者、及び餘の淨信の者は往かん所の處、四鬪戰・論理・諍訟のごとき、三一切の處に若し誦せば、三所去の處に、五悉くみな勝つことを得ん、或は大國王の佛法を淨信する者あらん、牛黃を用て椽皮の上、或は素の上に於て此の眞言を書し、六旗蘇の上に繫け、或は

一、三、二、四 亂脫

一、四、三、二、五 亂脫

(二)吉祥 高本に  
なし。

一、三、二、四 亂脱

(三)爾の時云云  
已下勝佛頂。

(三)滿駄那摩流  
志本には時駄那  
摩那摩といふ、  
には呼の賀上和  
あり、都流志本  
云く、都歌龍文  
さいふ。

頸の下に於てして則ち往かんに、他の敵若し見ば則便ち破敗し、他の軍消融して互に  
相救はじ、何を以ての故に、如來の神力加持を以ての故に、或は餘の塢波塞迦・塢波斯  
迦、頭上に於て帶持せば、彼の人吉祥(二)吉祥清淨にして威徳あり、吉慶に威光威力あ  
て他に陵突せられず、吉祥辯才を獲得せん、祕密主我れ略して説かん、菩薩此を持す  
れば無量の力勇猛を獲得し、如來の加持を獲得して、一切の魔能く沮壞することなく、  
一切の諸天敢て逼近せず、此の大眞言を修する者は、(三)與に等しきものあることなくし  
て、(二)威力(四)皆な成就することを得、若し成就せば轉輪王の眞言に等同なり、何を以て  
の故に、一切如來の神力に加持せられ、三摩地力の故に、是を高頂王と爲す。(三)爾の  
時に世尊釋迦牟尼如來、神通威徳を現せんが故に、一切の罪を息滅せんが故に、一切  
の惡趣を摧壞せんが故に、一切の邪洛迦の苦を息除せんが故に、不思議の行神通を現  
せんが故に、一切如來神通威徳積集することを現せんが故に、此の佛頂眞言王は一切  
の佛の宣説したまふ所なり、眞言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、引唵、引唵、引唵、  
三惹庚、引瑟尼二合 沙、四入嚩二合 囉、入嚩二合 囉、五(三)滿駄那摩、滿駄那摩、六 嚩  
嚩二合 麼、嚩嚩二合 麼、嚩嚩二合 麼、七(三)郝、賀那吽八

(二)一切飢渴流  
志本には種種劇苦  
といふ。

纔かに是の眞言を説きたまふに、此の世界及び一切の佛刹六種に震動して、一有情と  
して飢渴の苦を受くるとあるなし、一切の佛の威徳力を以て大威徳を現するが故に、一  
切地獄の中の(二)一切の飢渴、悉くみな止息し一切有情に悉く飲食を獲得せしむ、恒河  
沙數等の如來同共に宣説したまひ、大怖畏の有情のために利益を作すが故に、大神通  
を示現したまふ、金剛手此の佛頂王の流布する所の處あらんは、一切の魔其の便りを  
得ず、何に況んや修行者をや。若し善男子・善女人ありて、若し能く常に此の眞言王を憶  
念し復た能く持誦すれば、彼れ不思議神通を成就することを獲得し、大精進を具し神通  
圓滿し、一切の諸天彼の人を禮敬し、久しからずして不思議の功徳を獲ん、若し眞言王  
を成就する者あり、或は大乗淨信の者ありて、或は輪王佛頂を修習する者は、彼不思  
議の神通相應することを獲得して、一切有情の中に於て最勝なりと爲す、疑惑すべか  
らず、佛の神通を獲、求欲する所の願獲得すること疑ふことなし、一切の神通・平等眞  
實無畏にして、一切の時に諸佛に等同ならん、金剛手若し勝佛頂眞言を修する者は、  
久しからずして神通自在に成就して、刹那の頃に於て諸の難調の有情の、見ん者悉く  
みな馳走し、所有る魔衆諸天彼を見てはみな神通を失して悉く馳走せん、若し此の眞

(一)一の字刺字か  
流志本亦た爾なり  
(二)爾の時云云  
已下總じて五頂輪  
王を説く。  
●●●●● 亂脱

一、三、二、四、 亂脱

●●●●● 亂脱

一、三、二、四、 亂脱

言を修習して成就することあらん者は、轉輪王の眞言を成就せると等しうして、異りあることなく、地獄の中に於ても亦た神通を作さん、地獄に處する有情のために利益を作すが故に、是の如く一切有情において、飢苦を息除す、我れ略して少分を説かん、佛頂王の三摩地は、神通熾盛にして無量無邊なり、(一)一劫にも其の福利功德を説くと能はず、我れ少分を説く、(二)世尊説く所の、(三)爾の時に世尊一切の菩薩衆に告げたまはく、善男子、佛頂王等の、一切如來の三摩地(四)眞言身に位する者は、千俱胝劫にも盡く其の功德を説くこと能はず、一切の有情を矜愍するが故に、而も少分を説く、(五)是の佛頂王族の、不思議の功德を稱揚せば、千俱胝劫に(六)若し如來説きたまふとも能く其の邊際を盡すことなけん、如來親たり自ら(七)佛頂(八)眞言王(九)輪王(十)大威徳は、若し(十一)千二佛(十二)俱胝劫に於て讃歎したまふとも、亦た其の邊際を盡すこと能はず、若し善男子・善女人ありて、若し飲食・衣服・湯藥・種種の資具を以て百佛に供養したてまつり、若し人ありて、此の輪王を誦して受持せんに、福聚能く與に等しきことなけん、即ち伽陀を説いて曰く

若し復た智あて 最勝眞言王を修行して 則ち菩提を成爲すに 地位を獲るこ

一、三、二、四、 亂脱

と疑はず

不生不滅なるを爲なり

此の佛頂を持する者は

等しき威徳あることなし

不

思議の色力あり

三世に與に等しきものなく

三衆生界の異生において

佛頂を成就する人は

等

同なる者あることなし

若し帝釋の自身 或は餘の威徳天

一切世界の中の

欲界の大力の者も

頂輪を修する人を見て

若し起て承迎せずんば

頭破れて七分と作らんこと

猶如し蘭香の梢のごとし

自在と及び帝釋と

水天と俱尾羅と

藥叉とのごと

き大威徳あらんものも

彼の光を奪ひて萎悴せしめ

千光あて而も熾盛にして

諸天を照曜せん。

若し大丈夫あつて、大眞言王を成就せんとして、若しは讀み若しは誦し、若しは受持し、乃至經卷を書寫せんに、或は樺皮に書して或は帶持し、或は供養し、或は壇を塗り、或は香泥を地に塗り、葉を散し、燒香糝香を以てし、經卷を以て壇中に置いて供養を作し、此の法要を受持し讀誦し、他のために演説し、其の衆生の根性の勝劣を觀

二〇宣 和本に演  
に作る。

四八〇

て而もために二〇宣説せよ、菩薩行を勤修せん者には、慇懃にして敷演すれば、畢く如  
來の熾盛三摩地を獲得せん、究竟の大乗を淨信せんこと堅固ならん者には、之を  
授與すべし、如來の言教をために敷演して、ために之を説くべし、慳悒なるべから  
ず、常に宿命智を得て惡趣に墮せず、千劫の生死の流轉を超えて無上正等覺を證し、  
一切の天・龍常に當さに擁護すべし、言音威肅あつて人をして聞くことを樂はしめ、一  
切の有情愛樂し憐愍し安樂にして壽を捨てんも、諸魔のために侵擾せられじ、若し善男  
子・善女人・大有情あつて、堅固の二〇大乘に入り願を滿せんとするに由るが故に、如來  
の族眞言を修すれば、是の人福を具し大威徳あり、賢聖に攝受せられ、餘類に歸依せ  
ず唯だ佛菩薩に歸趣して、一切魔道を超越し三意趣を以て諸根不缺の者身色光潤黃白  
にして勝族清淨の處に生じ、吉宿に生れ大勤勇に身相圓滿し太肥ならず太瘦ならず、  
亦た乾悴せず、爪は赤銅の如し、蹠の骨平滿に身形長大、肌膚潔白に太だ團欒たら  
ず、齒は疎き黒からず、眼目昧ます、亦た黃綠ならず、疥癩あらず、二〇貪染あらず、  
毗那夜迦に持せられず、身相應し頭圓に平滿し、鬚脈平正ならん、我今略して其の相  
を説く、大族に生じ大福大威徳あらん、有情において此の法要を説くべし、是の善男

一、三、二、四 亂脫

二〇貪染 色欲。

子・善女人若し此の佛頂の眞言を得ば、必ず成就すべし、彼の有情のために之を敷演せ  
よ、而も敬禮せしむべし、愼んで與へざること勿れ、必ず當さに之を與ふべし、若し  
此の佛頂の眞言を得ば、必ず當さに成就すべし、若し人此の堅固の有情を得ば、輪王  
佛頂必ず當さに成就すべし、此の甚深の法要は餘の世界の中にも甚だ聞くことを得が  
たし、此れ如來の加持に由ては、餘の多の世界の中に於ても聞くことを得、若し人あ  
りて一たびも耳根に經ば、應さに知るべし皆是れ輪王の三摩地の加持する所なり、是  
の如く知るべし、若し人ありて此の如來族の法要を得て修行せん者、手中に至ること  
を得るは、皆是れ如來の加持なり、何を以ての故に、みな是れ如來の不思議眞言三  
摩地頂輪眞言身の建立する所、此れ一切眞言の中の最大の眞言句、頂王の三摩地、不  
思議の法要なればなり、當さに知るべし、是の故に彼の有情、必ず如來の眞言の成就  
を求むべし、若し此の法要を經卷に書寫し、或は誦せんに、所在の處を無量の人天世  
間みな供養を作すべし、此の三摩地熾盛の法句を獲得せば、彼の人増上瞋恚の心な  
るべし。

音釋

藥魚列瘡魚約の切、鋏女九膊伯各の切、胷部體の切、脛胡定の切、蹠戸瓦の切、腿の兩旁、萎頓萎危の切、痲病なり、鋏の切、膊肩甲なり、胷股なり、脛脚脛なり、蹠を内外の蹠と曰ふ。萎頓萎危の切、秦醉の切、萎頓は塢安古習倪結の切、鐸達各の切、羸徒沃の切、軍疎落代の切、目童子筋骨欣の切、枯瘠せるなり。塢安古習倪結の切、鐸達各の切、羸徒沃の切、軍疎落代の切、目童子筋骨欣の切、

國譯菩提場所說一字頂輪王經卷第一 終

國譯菩提場所說一字頂輪王經卷第二

唐特進試鴻臚卿三藏沙門大廣智不空 詔を奉じて譯す

菩提場所說一字頂輪王經畫像儀軌品第三

爾の時に釋迦牟尼佛、佛眼を以て一切の衆生界を觀じて、金剛手祕密主に告げて言はく、祕密主、有情を利益せんがための故に、我今大明王の儀軌を説かん、一切の佛の所説なり、一切世間・出世間の眞言明の像の上上なり、佛頂輪王の本身の形狀は能く一切の罪を滅し、一切の有情をして大涅槃を得せしめ、殊勝の三摩地を以て佛の色身變化を而も現じたまふ、我今世尊佛頂輪王の畫像の法を説かん。修行者先づ曼荼羅に入りて師に従ひて印契儀軌を受得すべし、曾て佛頂輪王の壇に入り、或は無能勝忿怒の壇、或は勝佛頂の壇において三昧耶を見、灌頂を受くることを得、阿闍梨の印可を得、無上涅槃の道に入て修行せば、當さに儀軌に依て先行を作すべし、先づ行じ已て然る後に像を畫せよ、婆羅門の童女の大族姓に生じたらん者をして、齋戒を授與し

(一) 流志本には畫像法品第二と爲し猶ほ第一卷に屬せり。(二) 爾の時云云已下輪王佛像法を説く。

(一) 若し云云 流  
志本には或は潤さ  
三肘、長さの量五  
肘といふ。

一四三、五二六  
亂脱

縷を縫て織らしめ、教に依て氎を織れ、或は餘教或は如來部の所説に依て、長けは六肘横は四肘にせよ、(二) 若し辨せずんば五肘も亦た得ん、或は像を畫くに縁て物を要め買はば、勇士にして價を酬すべからず、其の氎織り已んば香水を以て之を洗ひ毛髪を擇び去れ、其れ像を畫せんには佛神通三長齋月の自分を用ふべし、(三) 取る諸根を具せらん畫匠に三寶を淨信する者を、先づ澡浴清淨にして新淨の衣を著せしめ八戒を授與し、然して後に畫かしめよ、(四) 端嚴にして吉祥の宿曜時に順ひ、或は山間に於て、或は巖窟に於て、或は牛欄に於て、或は佛堂精室に於て、或は聖賢得道の處にして、臭穢に蟲あらん水地の處を擇ぶべし。

(一) 大丈夫の相  
三十二相。  
(二) 菩提樹云云  
倚は寄り懸る、其  
の樹に寄り住する  
なり。

(三) 葉和・高兩本  
共になし。

轆を置いて畫くべし、先づ中に於て佛世尊を畫き師子座に坐せしめよ、其の座は種種の寶を以て莊嚴し、説法の相に作せ、普徧く燦光あて輪の如くにして圍繞し、頂より種種の光明を流出す、佛(一) 大丈夫の相を具して(二) 菩提樹に寄りたまへり、其の菩提樹は種種の葉あり、眞多摩尼樹の如し、或は枝に於て縵綵を繫け、或は吠瑠璃寶を繫け、或は果を繫け、或は鈴鐸を繫け、或は天の妙果を繫けたり、或は雲を垂れ雨を降し、或は種種の(三) 葉華果、或は菩提樹の芽、或は眞珠・吠瑠璃・磲磔・珊瑚の如き玉を皆な上

(一) 吉祥鳥 流志  
本に云く、白鶴・孔  
雀・迦陵頻伽・鸚  
鵡・舍利共命の鳥  
及び諸の好鳥と  
(二) 雷和・高二本  
は電とす  
(三) 劫樹 今は種  
々に木を數り彼を  
表するなり。

に畫け、或は樹の上に(一) 吉祥の鳥衆ありて枝の間に坐り、或は種種の葉と作り、雲雷あて雨を降し枝葉相交れり、是の如く大菩提、(二) 劫樹を作れ、世尊の兩の肩の後にして、其の樹に倚著したまへり、佛の右邊には轉輪大王をかけ、輪王の形の如くにして白蓮華に坐し、佛を觀する勢に作せ、其の身金色にして周徧せる光明ありて七寶成就せり、唯し輪寶のみ光を以て圍繞して蓮華の上に在り、釋迦牟尼佛も復た頂輪王を觀じたまふ、佛の左邊に於て遠からずして白傘蓋頂王を畫け、大王の形の如し、其の身金色にして坐して蓮華上に在り、手に蓮華を持し目に輪王を觀る、白傘蓋頂王を去ること遠からずして高頂王を畫け、形大王の如し、白蓮華の上に坐し手に俱緣果(三) を持し輪王を瞻觀す、頂輪王を去ること遠からず近からずして光聚頂王を畫け、白蓮華の上に坐して種種の光明圍繞して、熾盛の光明の中に在て坐せり、身金色にして手に眞多摩尼寶を持せり、光聚佛頂王の下に於て持誦者を畫け、踰跪して坐して頂輪王を瞻仰す、輪王は手を舒べて施願を印に作り、持誦者を顧視す、光聚頂王に近く圓光相掩はざる、勝佛頂を畫くべし、身形金色なり、左の手に寶を持し右の手に施願にして、目に輪王を觀る、是の如き等悉くみな是れ佛頂王なり、各各の形ち大王の如し、各の



(一) 白聲 離は音  
 離、郭璞曰く離牛  
 黒色に出づ又西南微  
 の切、牛尾を施交  
 爲すべし、亦た  
 離聲に作る。  
 (二) 聖觀音は右、  
 金剛手は左なり。  
 (三) 普賢云云 普  
 賢の後なり。  
 (四) 和木に以  
 てる。  
 (五) 絹綬 高本に  
 は絹綬に作る、結  
 は音は青、生絲の  
 解、廣韻に羅綬、  
 釋は紗なり。  
 (六) 遠からず云云  
 彌勒の後。

(七) 下 座の下な  
 り。

熾盛の光焰あり、悉く皆金色にして白蓮華の上に坐す。佛の右邊に普賢菩薩を畫くべし、手に(一)白聲の拂を持す。佛の左邊に慈氏菩薩を畫け、手に白拂を執る、此二菩薩は佛に比するに身量稍小にせよ、佛前に(二)聖觀自在菩薩・金剛手祕密主菩薩を畫くべし、各の寶蓮華上に坐し、皆悉く合掌して佛を禮する勢に作れ。(三)普賢菩薩に近く文殊師利童眞菩薩・無垢慧菩薩・寂靜慧菩薩、無盡意菩薩・虛空藏菩薩・虛空無垢菩薩・大慧菩薩を畫くべし、是の如き等の大菩薩、次第にして畫せよ、各各の合掌して蓮華の上に坐して、佛を禮する勢に作れ、次を(四)已て漸小の身形寂靜みな金色に作り、種種に莊嚴せり、(五)絹綬を以て裙衣と爲す、慈氏菩薩に次いで(六)遠からず近からず、佛眼明妃を畫くべし、形女天の如くして寶蓮華に坐し、種種に莊嚴し身は金色の如し、目に衆會を觀じ、輕毅の衣を著け角絡して披たまへり、右の手に如意寶を持し、左の手に施願なり、圓光周徧し熾盛の光明あて身儀寂靜なり、佛眼聖尊を去ること遠からずして佛毫相尊を畫くべし、女天形の如くせよ、何の差別かあるとならば、右に蓮華を持し左の手に施願なり、目に輪王を觀る。佛眼尊の(七)下に近く孫那喇大明妃を畫くべし、形天女の如し、種種の瓔珞をもて其の身を莊嚴す、青色手に蓮華を執り寶山に坐し、

(一) 畢 後か、流  
 志本然かなり。  
 (二) 金剛軍 又曰  
 く金剛將。  
 (三) 右邊 流志本  
 には後こいふ。  
 (四) 賀耶 唎哩  
 馬頭。

(五) 彼に近く 馬  
 頭の後なり。  
 (六) 近く 輪王の  
 左なり。  
 (七) 無能勝 流志  
 本には離勝奮怒王  
 に作る。

(八) 耽肚 腹垂下  
 するなり。  
 (九) 阿吒云云 曠  
 然なり。

佛世尊を觀す。金剛手の(一)畢に甘露軍吒利を畫くべし、彼の尊に近く(二)金剛軍・蘇摩呼・頂行を畫け、此の三聖者は各の童子形を持し、種種の瓔珞をもて其の身を莊嚴し、皆な目は輪王を瞻て驚き悚る、勢を作す。觀自在菩薩の(三)右邊に於て(四)賀耶唎哩二合嚩大明王を畫け、身は火の色の如く忿怒形に作れ、鼻は猿猴の如し、蛇を以て瓔珞・臂釧・膊釧とし莊嚴せり、蓮華鬘を繫け、輪王を瞻視する勢に作る、(五)彼に近く蓮華孫那利を畫くべし、四臂なり、右の第一手に罽索を持し、左の第一手に鉞斧を持し、右の第二手は施願、左の第二手に果を持し、蓮華に坐す。又輪王佛頂に(六)近く(七)無能勝忿怒王を畫け、身白色にして四面四臂なり、眉を顰め面は瞋怒して、虎皮を裙と爲し、蟒蛇を耳璫と爲す、得叉迦龍王を以て腰條と爲し、婆蘇枳龍王を以て神線と爲し、角絡して披(八)耽肚にして身形短にして毒蛇を以て髻冠を莊嚴し、下の唇を咬ひて徧身に火焰あり、熾盛の光明あり、圓光あらしめよ、右の第一手に金剛杵を持し、第二手は期剋の勢を作る、左の第一手に三戟叉を持し、第二手に鉞斧、正面は(九)阿吒唎賀娑の笑聲を作す勢なり、口より火焰を出す、種種色相あり、右邊の面は輪王を瞻觀し、左邊の面は持誦者を觀じ、頭上の面は一切衆會を觀じ、寶蓮華上に住す、無能勝忿怒

(一) 阿難云云、次  
での如く、九頭・五  
頭・七頭の龍なり。

(二) 第二手 左。

(三) 摩莫積 又た  
マウマウイイも  
よむ。金剛族母な  
り。

王は是の如く畫くべし。彼の尊の下に於て地天を畫け、身白色にして二手を以て寶華の籠子を捧げ、二の膝地に跪かしめよ。地天に近く尼連禪河神を畫け、艶黑色にして龍女の形の如し、七頭なり、合掌して佛を禮する勢を作す、尼連禪河神に近く互に相ひ近いて罽里迦大龍王・母止鄰陀龍王を畫け、此の二龍王は曾て無量の諸佛を見たてまつる、皆な七頭にして合掌して地に跪かしめよ。地天に近いて(一)阿難陀龍王・無熱惱龍王・娑竭羅龍王を畫け、蓮華鬘れを持し、躬を曲げて合掌す。大慧菩薩の右邊に白衣觀自在を畫け、蓮華鬘れを以て其の身を莊嚴し、寶縵を以て角絡して披たり、右の手に眞多摩尼寶を把り、(二)第二の手は施願にせよ、此の菩薩は是れ蓮華族の母なり、蓮華の上にて坐せしむべし。佛の毫相に近く(三)摩莫積菩薩を畫くべし、淡紫青色にして種種の瓔珞をもて莊嚴せり、蓮華に坐して身儀寂靜にして般若波羅蜜自性に住せり、右手に梵夾を持し、左手に眞多摩尼を持し、施願の勢に作す、是れ一切佛菩薩の母、大聖般若波羅蜜多、摩莫積の形に住す、則ち此の尊は是れ金剛族の母なり、稍々童女に似て形も太だ高からず、顔極めて悦意せしめよ、是の如くの相に作すべし、此の尊の眷屬、金剛鈎・金剛拳・金剛雹を畫け、此等はみな是れ大明妃なり、以て眷屬と爲して各の本

(一) 杖 如意寶杖  
なり。

(二) 淨居 八天子  
なり。

形に住せり。白衣觀自在の下に近く多羅尊を畫くべし、種種の嚴具をもて莊嚴し、輕毅の衣を著け、其の形太だ魚イサからず、太だ細からず中庸の形なり、右に青蓮を持し左手は施願にして蓮華上に坐し淺綠色に作る。彼の尊に近いて毗俱胝を畫け、身は白色にして三目四臂なり、右の第一手に(一)杖を持し、左の第一手に瓶を持し、右の第二手に念珠を持し、左の第二手に蓮華を持す、身儀寂靜なり、像の二角に於て鼓音樂天子を作り、佛上に於て(二)淨居天子を畫け、雲中に在て湧出し、華を散じ供養せしめよ、各の方に依て護世の四王を畫け、東方には持國天王を畫き、南方には夜摩天、西方は水天、北方は俱尾羅天、各の方に隨ひて四邊に畫せよ、是の如く四隅、東北方には伊舍那、東南方には火天、西南方には羅刹主、西北方には風天、各の本形に依て畫け。忿怒無能勝王の下に近く持誦の人を畫け、本形の如く地に跪いて香爐を持し、輪王を瞻仰す、金剛手此の輪王佛頂の大畫像の儀軌は、無量の佛宣説したまふ、纔かに見れば一切の罪悉くみな消滅す、金剛手若し圓具して法に依て畫くことを得、纔かに見る衆生は、五無間の罪を滅除して、一切の罪を遠離す、若し此の微妙の像を見れば、一切如來の説く所、其の人現世に幸あり、今世及び他世、俱胝劫に一切の罪を作るも、此の像を見

(一)爾の時云云  
已下白傘蓋像を明す。

るに由て悉くみな消滅す、此の最勝の像を見るに由て、一切の悉地みな現前することを得、一切如來の大明真言、任運に成就することを得、意に隨ひて念誦するに一切の事を成辦す、諸餘の部の中の真言の成じ難き者、此の像前に對すれば決定して成することを得。(二)爾の時に世尊、金剛手祕密主に告げて言はく、祕密主汝今復た聽け、白傘蓋頂王の畫像を説かん、能く一切の事業を成辦し、一切の生死流轉の怖畏の有情を利益するが故に、恒河沙數俱胝の佛同共に宣説したまふ、先づ當さに輪王儀則の所説の如く織るべし、方三肘可<sup>は</sup>り截り屈すべからず、皮膠を用て色に和することを得ざれ、畫人に八戒を與授し、氈の中央に於て佛形を畫くべし、黃白色にして師子座に坐し、諸の相好を具せしめよ、佛の左には金剛手菩薩を畫け、右の手に白拂を持し、左手に金剛杵を持す、金剛手の左邊に淨居天子の衆を畫け、天衣裙を著る、佛の前に於て佛頂王を畫くべし、身は金色にして金を鑄たる像の如し、諸の相好を具し、手に蓮華を持せしめよ、佛の下に持誦者を畫け手に香爐を持す、像の四邊に於て種種の華を畫くべし、金剛手此の白傘蓋佛頂王の畫像の法は先佛の所説なり。(三)爾の時に世尊、復た金剛手に告げて言はく、金剛手諦かに聽き諦かに聽き、極めて善く聽き作意せよ、吾れ

(一)爾の時云云  
已下光聚佛頂。

當さに汝がために光聚佛頂王の畫像の軌則を説くべし、一切の世間・出世間の真言明の教法に於て上上なり。頂王光聚は輪王の儀軌に依れ、香水を以て氈を洗ひ、三肘或は一肘にせよ、彩の中に皮膠を用ふべからず、八戒を受くる畫匠に畫かしめよ、佛を畫くに、白蓮華の上に坐して説法の相に作すべし、諸相具足せしめよ、像の上に於て山峰を畫くべし、像の下に蓮華池を畫くべし、佛の頂より種種の光明を出せり、佛の下の右邊に持誦者を畫け、胡跪して香爐を持す、彼の本形を畫け、祕密主、此の光聚佛頂王儀軌は、一切如來の宣説したまふ所なり、諸の有情を調伏せしめんがための故なり、此の光聚佛頂王は、一切の事業を成辦する最勝の畫像の法なり。(二)爾の時に釋迦牟尼佛、復た祕密主に告げて言はく、祕密主我れ今、高佛頂王の畫像の法を説かん、輪王儀軌に依て、三肘或は一肘なる新氈の上に於て、毛髮を擇び去て齋戒を受けたる畫匠に畫かしめよ、佛世尊を畫くべし、七寶の蓮華の上に坐し、結跏趺坐して諸相具足す、右の手は施願、左の手は齋の下に在て掌を仰け、佛頂より種種の光明を出す、像の上に於て兩角に各の淨居天子を畫け、佛の右邊に持誦者を畫いて、如來を瞻仰せしめよ、如來祕密主、此れは是れ高佛頂王の畫像の法なり、一切の佛の所説なり、一

(一)爾の時云云  
已下は高佛頂像法。

爾の時云云  
已下は勝佛頂の像

工匠工を高  
和二本に巧に作り  
匠を和本に畫匠に  
作る

切の佛の稱讚したまふ所なり、一切の有情を矜愍するが故に説きたまへり。爾の時  
に釋迦牟尼、復た金剛手祕密主に告げて言はく、祕密主我れ今、勝佛頂王の畫像儀軌  
を説かん、先佛の稱讚したまふ所なり、輪王佛頂の儀軌に依て畫を作れ、或は三肘或  
は一肘にして、毛髪を離れ、齋戒を受けたる畫匠に畫かしめよ、佛の形を畫いて金色  
の相に作るべし、師子の座に坐して説法の印を持し、大丈夫の相を具したまへり、佛  
の頂より種種の光明を流出す、像の下に持誦者を書け、本形の如くして胡跪して坐  
し、手に香爐を執り如來を瞻仰せしめよ、金剛手此の勝佛頂王の畫像の儀軌は、一切の  
如來宣説したまへり、金剛手、如來世尊及び大威徳の菩薩の無量種の色身を、意に隨ひ  
て畫け、或は氈、或は素、或は板の上に於てし、或は牆、或は壁にするに亦た過失な  
し、或は畫匠を使って、或は復た自ら畫し、或は工匠畫し、自の意の形狀に隨ひて  
之を書け、或は菩薩形に畫き、或は眞言聖天を畫き、乃至經夾の上に於て畫き、或は  
樺皮の上に畫け、或は最勝の像を畫き、或は一磔量、或は一小磔量、或は一大指量、  
或は意樂の處に隨ひて畫くべし、亦た過失なし。爾の時に世尊、伽陀を説いて曰く  
意樂に隨ひて畫け 慧者悲心を起して 諸の有情を利益せよ 我思惟を成就し

亦た僣過をせざれ 有情を攝受せんが故に 是の故に當さに慇懃にすべし 常  
に悲愍の心を懷き

恒に捨施を行じ 及び淨戒を護持し 忍辱と及び精進と 禪定と般若と

常に而も修習すべし 彼れ悉地難からず 若し畫像あることなくば 當さに

菩提心に住し

及び大印を持すべし 最上成就を獲ん。

善提場所説一字頂輪王經 行行品第四

爾の時に金剛手祕密主、佛に白して言さく、世尊惟だ願くは、世尊勤修して成就を求  
むる者のために、略して佛頂王眞言行を修習し、威徳功德熾盛の方便を説きたまひ、

衆生の世尊悉地を求むる者に於て、如來佛頂王眞言明に住するに由て、一切の眞  
言悉くみな速疾に成就することを得せしめよ。佛の言はく、善いかな善いかな祕密主  
汝能く是の如きの義を問へり、祕密主、汝今諦かに聽け、我れ汝がために一切の佛所  
説の行の方便法句、伽陀を説かん、極微妙の此の法眼は、無量の佛已に修習した  
まへり、成就するものを利益せんが爲めの故に。爾の時に釋迦牟尼佛一切大衆を觀じ

流志本には、  
分別成法品第三  
卷す。此より第  
二行々 三密の  
行と諸大乘の觀  
行及び戒法等の  
修及なり。次の經  
行方なり。行々  
是れ則ち行々なり  
三、二、亂脫

亂脫  
法眼 佛法な  
り、又は僧眼とも  
いふ。

梵音聲を以て此の法理趣<sup>二</sup>、<sup>三</sup>伽佉を以てす、<sup>二</sup>一切法眼の中の最勝の<sup>四</sup>伽佉に曰く  
 無量の菩提の行自在なり 多種の百苦に逼惱せる者あり  
 諸の有情の逼惱多きを見て 釋師子尊而も演説したまへり  
 此の法を愛樂して修行する人は 佛と成り當さに人天供を受くべし  
 一法を修するに由て大覺を成じ 眞言王と成て衆に讚せられ  
 彼の人久しからずして佛菩提をえて 廣く無量の諸の群品を度せん  
 空閑の大制底と 流泉と及び河の側と 迴樹と或は巖窟と 衆の華あると及び  
 山間とに  
 獨居して堅固の心を以て 菩提心と相應し 大衆を勝解し 清淨にして勤めて  
 修行せよ  
 及及び身口意 食飲の四儀の中に 行者常に謹んで<sup>二</sup>誦せよ 眞言者の勝趣す  
 るには  
 三摩地と明とを解し 出生して悉地を獲べし 眞言或は明を成せんとならば  
 意に隨ひて修行せよ

(二) 誦和・高の二  
本結に作る。

(一) 堅禁 持戒なり。

(三) 不思議の色、  
離思の身相なり、  
謂く意生身を現する  
等まで成就する  
なり。

(三) 袈裟云云 出家なり。  
愚夫の無益の言説  
を作し、愚狂の進  
巧律儀に於て行ふ  
ざるが故に淨信せ  
ざるが故に成就す  
るの功を擧ぐ。無  
量の罪障を積集す  
るの苦を擧ぐ。

常に二種の衣を著せよ 善伴あると<sup>二</sup>堅禁の者とは 彼れ悉地すること難からず  
 彼の人定んで獲得すべし  
 先づ諸佛を禮すべし 智者堅固なるべし 眞言者伴なくとも 勤めて有情を利  
 せんと求むれば  
 彼れ成就すること難からず (三) 不思議の色を現すること 現世に成就することを得  
 勤めて悉地を求むる者は  
 常に應さに制底を作し 勤めて護摩し念誦すべし 即ち此の現世に於て 速疾  
 に成就を得  
 謹慎して巧妙に 勇健にして勤めて堅固に 大いに益せんとして眞實の心あるは  
 此の人稱讚するに堪へたり  
 諸根みな圓備し 智慧常に質直にして 能く飢渴を忍ぶは 是の人稱讚すべし  
 勤めて成就を求むる者 若し是の法要を得ば 彼れ當さに久時ならずして 最  
 勝の悉地を獲べし。  
 金剛手我が滅度の後に、末法の時愚癡の塙波塞迦・塙波斯迦、<sup>二</sup>袈裟を披る者、<sup>三</sup>愚丈

(二) 力十力。四無所畏。

(三) 金剛云云。淨心を生じて六度の行を修し成就すべきことを勤む。

(四) 寶雲大經。彼の經に廣く菩薩修行の事を説き玉ふ。此の教より先なるが故に彼の經に説り玉ふ。

夫種種の無益の言説を作し、滋味に貪著し懈怠懶惰ならん、斯の如くの小人は深く如來の三摩地(二)力(三)無所畏を知らず、廣大の大乗の理趣に於て勇猛精進の者、菩薩の善巧の律儀に於て行するものを壞亂し、灌頂を得ざる者、諸佛菩薩の廣大の三摩地を淨めざれば、成就することを得ず、則ち謗毀を我れ及び菩薩に生じて是の如くの言を作さく、此れ佛説に非ず是れ魔の所説なりと。菩薩と若しは大乗に住する善男子・善女人の、眞言行を成就せんと勤求する者を毀辱し、調弄し損害し不饒益の事を作すに、此の因縁に由て無量の罪障を積集せん、是の故に(三)金剛手、善男子・善女人、菩薩の行を行せんと欲はば、應さに淨信を生じて堅固に菩提心を決定し、廣大の願を以て常に大乘の經典を書寫し、讀誦し受持し、他のために演説すべし、伽佗に曰く

(四) 寶雲大經に依て 修行せよ我れ稱讚す 此の加行に由るが故に 本尊速かに現前す

何を以て眞言を成せんとならば 慇懃に自身を成じ 施と戒と忍辱と 勤と定と智慧とを以て得べし

一心に專注するが故に 速疾に本尊を成すべし。

(一) 儀軌品 流志本には、分別密儀品第四といふ。

一、三、二、四 亂脫

(二) 儀軌品第五

爾の時に金剛手、復た佛に白して言さく、世尊云何んぞ佛頂眞言行を修する者、清淨の軌則に住して本尊の觀行を作さん、惟だ願くは世尊、一支を以て速疾に佛頂等悉地を成就することを説きたまへ。佛の言はく、是の故に持金剛誦かに聽け、衆生を利益せんが故に(三)小衆生緩慢にして、精進なる者に差別して説かん、一切眞言教の中には三時に清淨の軌則に住して放逸せず、常に觀佛三摩地に住して、散動の心を以て觀すべからず、貪染を以て其の心を擾亂せず、一心に佛を觀すべし、常に慈三摩地を以て徧ねく十方一切の有情を緣じて、三時に溼浴し手足を洗濯し、法に依て溼灑せよ、勇健智慧の者放逸にして生命を損害すべからず、內衣を換へ已ては、此の眞言を以て護身せよ、眞言に曰く 唵、引麼麼吽匿切、二

若し土を用ふれば、蟲を和したる土を用ふべからず、智者清淨香土の太だ黒からず、太だ黄ならず、太だ赤からざるを用ふべし、是の如くの土は一切の成就の法に通ず、若し調伏の法には黒土を用ふよ、赤土も亦た得。若し増益を作さんには黄土を用ふべし、災禍と及び諸の罪障を消滅するには白土を用ふべし、若し曬惹を求めば白からず

黒からざる土を用ふべし、若し敬愛の法を求めば、赤黄土を用ふべし、是の如くの智者、教に依りたる土を用ひ、此の眞言を以て先づ土を加持して、然して後に用ふべし  
土の眞言に曰く 唵、引ナ娜囉呼ニ引

此の土の眞言を以て 諸の成就に通じて用ひよ 此の河の眞言を以て 河水を加持せよ  
唵、引ラ入囉ニ合ラ囉呼ニ引

此の明を以て河を加持して 一切の處に通用せよ 土を分ちて三聚と爲して  
清淨の處に置け

其の地決唾 臭穢を離れたる地處にせよ 女人の叢聚する處と 小兒の戯劇の處と

諸畜の踐踏する處と 衆生の攢聚する處と 行者是の處に於ては 而も深浴すべからず

隘窄アヤスなると險阻なると 及與ひ臭穢との水は 智者遠離すべし 當さに別に勝河を求むべし

澄潔の清き流水にして 泥と滓穢とを遠離せよ 其の河岸の側ホトリに於て 種種の樹を以て莊嚴したらむ 彼に於て當さに深浴すべし 其の水深ふして潤滑ならむ 常に是の如きの處に於てせよ 水中にして諸鳥戯むれ 諸華悉く莊嚴せん 行者彼カシコに浴すべし 復た此の眞言を以て 淨き土を加持せよ  
眞言に曰く 唵、引ハ鉢囉ニ合ラ入囉ニ合ラ囉呼ニ引

即ち自ら甲を撰ぬくべし ニ大指を心に置いて 眞言七徧を誦せよ  
甲冑の眞言に曰く 唵、引ラ入囉ニ合ラ囉呼ニ引 帝惹テイジヤ、呼ニ引  
心の甲冑の明を以て 修行者用ふべし 悉くみな身に徧うして 即ち大加護を成す。

撰身甲の眞言に曰く 唵、引ハ入囉ニ合ラ囉呼ニ引 跋囉ハ羯囉ニ合ラ麼ニ呼ニ引  
此を身の甲冑と名く 智者常に作して 即ち水に入るべし 腰より或は胸に至れ

ニ大指云云右拳空を立て心に置くなり。





(一) 淨の眞言 已  
前の明なり。

當さに念誦の室に往くには 清淨の衣の 奴俱羅芻麼と 及與び野麻の衣との  
ごときを著すべし

智者念誦するには 教の儀軌に依るべし (二) 淨の眞言を誦すべし 次に辨事の明  
を用ゐて

茅薦の座を加持して 像の前に敷置し 本尊を念誦すべし 次に聖衆を迎ふべ  
し

眞言・印と相應して 數々本尊の像を觀せよ 即ち蓮華の印を結んで 座を以て  
奉獻せよ

(三) 吉祥 結跏坐  
なり。蓮座 半跏坐。

諸佛は(三) 吉祥を持したまへり 佛足標幟生す 諸の菩薩は(三) 蓮座なり 是の座  
はみな稱讃す

(四) 高牀云云 高  
牀に坐するは本尊  
を貴ばざるの相な  
るが故に之を禁ず

眞言を修行する者は (四) 高牀に坐して 本尊の像を觀すべからず 次に念珠を持  
すべし。

珠を穿く眞言に曰く 唵、引<sup>ア</sup>阿<sup>ド</sup>納<sup>ド</sup>部<sup>ボ</sup>二<sup>イ</sup>合<sup>イ</sup>誦<sup>イ</sup>、微<sup>ビ</sup>惹<sup>ビ</sup>曳<sup>イ</sup>、二<sup>シ</sup>悉<sup>シ</sup>地<sup>チ</sup>、三<sup>シ</sup>悉<sup>シ</sup>駄<sup>ダ</sup>囉<sup>ラ</sup>梯<sup>イ</sup>、二<sup>イ</sup>合<sup>イ</sup> 娑<sup>サ</sup>嚩<sup>ハ</sup>訶<sup>ハ</sup>引<sup>イ</sup>  
二<sup>イ</sup>合<sup>イ</sup> 訶<sup>ハ</sup>引<sup>イ</sup>

(二) 自本呪なり。

菩提子の念珠は 決定して 上・中・下の悉地を成就するを得 諸の眞言に通じ  
て用ひよ

金・銀等を以て珠を作るをば 増益に之を用ふべし 清淨の願<sup>ハチ</sup>胝<sup>チ</sup>迦<sup>キヤ</sup>を以てすれば  
一切の義を成就す

童子の線を以て穿つべし みな具なる儀軌に依れ 當さに(二) 自の密語を用て  
此を以て加持をなすべし。

珠を加持する眞言に曰く 曩<sup>ナシ</sup>謨<sup>モ</sup>薄<sup>ハク</sup>誑<sup>キヤウ</sup>嚩<sup>ワ</sup>底<sup>テイ</sup>、<sup>丁</sup>以<sup>イ</sup>の<sup>ノ</sup> 悉<sup>シ</sup>地<sup>チ</sup>ニ<sup>ナ</sup>娑<sup>サ</sup>駄<sup>ダ</sup>囉<sup>ラ</sup>梯<sup>イ</sup>、<sup>二</sup>合<sup>イ</sup> 娑<sup>サ</sup>嚩<sup>ハ</sup>訶<sup>ハ</sup>引<sup>イ</sup>  
娑<sup>サ</sup>嚩<sup>ハ</sup>訶<sup>ハ</sup>引<sup>イ</sup> 訶<sup>ハ</sup>引<sup>イ</sup> 二<sup>イ</sup>合<sup>イ</sup> 訶<sup>ハ</sup>引<sup>イ</sup>

當さに此の眞言を以て 念珠を加持すべし 七徧を誦すべし 二の掌の中に持  
し

茅薦の上に坐して 一切の義を成せんことを求めよ 吉祥と密<sup>ヒラ</sup>嚩<sup>ワ</sup>樹<sup>ジュ</sup>と 白檀と  
及び天木と

是の如く等の樹の類を 念珠とすれば増益に勝れたり 念誦と護摩との時には  
是の如きの珠を用ふべし

(二) 俱那衛 廣州  
の鄧國なり。

法陀羅木樹と 末度と(三)俱那衛と 此の木を用て珠としては 而も調伏の法を  
作すべし

亦た此の樹木を用ひて 牀座と作せ 若し木得ること能はずんば 葉を取て諸  
蟲を離れ

坐臥するに之を籍べし 及び灌頂の處にして坐せよ 瞿摩夷を焼いて灰として

濾せる水を以て用て洗淨せよ

密絹を以て濾羅を爲れ 審かに觀て水を濾漉し 法に依て密言を持せよ 若し

成就することを得ざれば

頂輪王を用て 加持すべし必ず成就せん 復た心と隨心とを用て 相ひ共に和

して誦すべし

若し是の如くするも成せずんば 佛眼眞言を用ひて (三)相和して之を誦せよ 世

尊佛眼の明は

一切の佛の所説なり 先佛も亦た稱讚したまふ 我今而も宣説す 佛頂を成せ

んと求めん者は

(三) 相和云云 阿  
尾・羅・許・欠・總日  
羅・駄・觀・摩・云ふ  
り如く、金輪と佛  
眼とを合して之を  
誦す。

(二) 畫像云云 法  
流重書の中に此の  
文を引證して無像  
條法の傳さいふ。

(二) 大印 根本印  
なり。

應當に誦持すべし 彼と與に相和して誦すれば 久しからずして疾かに成就す  
設ひ五無間を作るとも

久しからずして亦た成ずることを得 若し(一)畫像あることなきには 運心して觀

行を作せ 諸佛の稱讚したまふ所なり

即ち禮佛の掌を結んで 觀行して此の明を誦せよ。

眞言に曰く 曩謨囉怛曩二合 怛囉二合 夜引也一 阿左羅二尾囉婆嚩引 訶三

則ち(二)大印を結べ、想へ彼の印の上に於て無量寶を以て成ずる所の山あり、山の上に於  
て七寶所成の蓮華を想へ、其の華無量百千の葉あり、其の胎廣博にして大なる莖あり、  
彼の上に於て樓閣あり、樓閣の中に於て想へ、世尊坐したまへり、眞言身の形の如く  
畫像に説く所の如し、世尊安穩にして結跏趺坐し説法の印を作したまふ、大人の相を  
具して其の身を莊嚴し、徧周に圓光あり、應さに是の如く觀すべし、餘も亦た上に畫  
する所の像の如くして、樓閣の中に在りと觀せよ、閣の上に相輪椹あり、心中に無量  
の眞珠・寶網徧ねく覆ふと想へ、乃至意に隨ひて、一由旬の大きさに觀せよ、或は百由旬  
乃至千由旬にして觀行すべし、自の意に隨せて之を觀じ、乃し有頂に至るまでにせ

自の眞言 本呪。

六字佛頂 辨事佛頂なり。一、三、二、四、亂脱

よ、<sup>三</sup>專注一心にして、<sup>二</sup>智者<sup>一</sup>放逸なるべからず、心を本尊と諸佛との加持力に繋けて、是の思惟を作せ、成就を求めん者は是の如くの觀行を作すべし、無垢海の眞言を以て大海を加持せよ、眞言に曰く 唵、<sup>一</sup>引<sup>二</sup>尾廢慮、<sup>三</sup>捺地、<sup>四</sup>叫<sup>二</sup>引山の眞言を以て山を加持せよ、眞言に曰く 唵、<sup>一</sup>引<sup>二</sup>阿左囉、<sup>三</sup>叫<sup>二</sup>引蓮華を加持せよ、眞言に曰く 唵、<sup>一</sup>引<sup>二</sup>吽<sup>三</sup>迦<sup>四</sup>麼<sup>五</sup>嚩<sup>六</sup>、<sup>七</sup>娑<sup>八</sup>嚩<sup>九</sup>訶<sup>一〇</sup>、<sup>一一</sup>訶<sup>一二</sup>一切寶樓閣の眞言を以て樓閣を加持せよ、眞言に曰く 曩<sup>一</sup>莫<sup>二</sup>薩<sup>三</sup>嚩<sup>四</sup>但<sup>五</sup>佉<sup>六</sup>引<sup>七</sup>藥<sup>八</sup>路<sup>九</sup>南、<sup>一〇</sup>引<sup>一一</sup>薩<sup>一二</sup>嚩<sup>一三</sup>欠、<sup>一四</sup>平<sup>一五</sup>聲<sup>一六</sup> 搵<sup>一七</sup>諾<sup>一八</sup>引<sup>一九</sup>藥<sup>二〇</sup>帝、<sup>二一</sup>薩<sup>二二</sup>叵<sup>二三</sup>合<sup>二四</sup>囉、<sup>二五</sup>嚩<sup>二六</sup>給、<sup>二七</sup>三<sup>二八</sup>誦<sup>二九</sup>誦<sup>三〇</sup>曩<sup>三一</sup>劍、<sup>三二</sup>娑<sup>三三</sup>嚩<sup>三四</sup>訶<sup>三五</sup>、<sup>三六</sup>訶<sup>三七</sup>四<sup>三八</sup>次に佛世尊を請すべし、<sup>三九</sup>自の眞言を以て想ふべし、世尊切利天より閻浮に下降るが如くして道場に至ると。即ち闍伽を獻じて是の頌を作して言ふべし。

自の神通を以て住して 我が供養を作すを待ちたまへ。

然して後に<sup>一</sup>六字佛頂を以て上方界を結せよ、即ち想へ、如來と、<sup>二</sup>及び自の本尊と<sup>三</sup>部の部主と、或は自の教に依て、<sup>四</sup>及び諸尊に澡浴したてまつると、<sup>五</sup>塗香・華・衣服・嚴具・飲食・香水を獻せよ、若し如上所説の供具なくんば、心中に觀想して獻すべし、是の如く供養の儀軌已んば、即ち説罪し隨喜し勸請し廻向し發願すること悉くみな作すべし、即ち心を鼻端に安して一心に念誦して、乃し疲倦せ<sup>一</sup>ざるに至れ、<sup>二</sup>念誦する所の徧數、<sup>三</sup>而も<sup>四</sup>復た塗香・華・燒香・飲食・燈明等を獻せよ、供養し闍伽を獻じて觀想せよ、東門において世尊を奉送し、則ち一切佛・菩薩を禮し、禮<sup>一</sup>足して起つ、是の如く三時に作すべし、像なきものゝ爲めの故に、是の儀軌を説けり。

ざるに 恐くは刺字か。一、三、二、四、亂脱

足 和本に已に作る。

菩提云云 流志本に云く分別祕相品第五。一、三、二、四、亂脱

天室 天神を祠るの室にして即ち天祠なり。

善提場所説一字頂輪王經分別祕密相品第六

爾の時に釋迦牟尼佛、復た金剛手祕密主に告げて言はく、<sup>一</sup>汝聽け<sup>二</sup>金剛手<sup>三</sup>此の佛頂王の眞言成就の修行は、一切如來の所説なり、佛頂を成就せんが故に、不壞伽陀の句の行教を以てせん、金剛手略して一切如來所説の成就の次第を説かん、伽陀を説いて曰く、

屏處にして聖衆を集めて 威靈を獲せしめん處は 宅と及び<sup>一</sup>天室と 空舎と窟中と  
迦樹と或は屍林と 樹林と山谷とに於てせよ 成就せん、或は念誦せば 心を本尊に在け

清淨ならざるを淨ならしめ 不淨をば淨を以て徧ねく淨ならしめ 淨に於ては淨

二一 和・高二本  
に二に作る。即ち  
浄と不浄との二を  
以て一種の淨さを  
示義ならんか、當  
段の文消し難し。

二二 正典華嚴・仁  
王・兩寶・等の大乘  
經なり。

二三 息増の云云  
「息増の護摩に於  
てせよ」といふ  
是れ亂脱。  
有 在の字か

を成就す 二一を以て二種を成せよ

是を成就者と名く 一切悉地を修せんには 食に於て節量すべし 飽かず亦た

飢えず

食も飲も等量にすべし 甘甜味と及び酸醋と 是の如きの食を捨すべし 貪と俱

なるの有情は

味に於て貪著を生ず 貪に由て念じ護摩するに 一心を生せず 初夜には正

典を讀み

中夜は然も寢息せよ 淨き茅薦の上に於てし 護を作すこと儀軌に依れ みな

印と相應せよ

寢臥すること師子の如く 師子の驍勇なるが如し 東方及び南方に 手を枕に

して眠臥せよ

息増の、護摩に於てせよ 若し東南方に在有ては 左を右の上に安け 足も

手も亦た是の如し

足を累ねて然る後に寢ね 少分端嚴ならしめよ 頭若し西方に向はば 面、南

一、三、二、四 亂脱

方を觀よ

寢ぬる時は護身すべし 降伏と相應す 若し白檀樹と 吉祥と尼俱陀と

優曇鉢との等き樹に上り 此等の樹に上ると夢ば 是を成就の相と爲す 雁と

及び伽陵伽と

鴛鴦と白鶴と 孔雀等の吉鳥と 此等の鳥に乗ると夢みる 若し是の如くの相

を見ば

久しからずして當さに悉地すべし 若し夢に血を見ば 此れも亦た成就の相なり

若し夢中に於て

幢旛等の交雜するを見 或は高樓に登り 若しは履み及び遊行するは 是れ則

ち成就の相なり

或は夢に舟船に乗り 或は箒と篋とを執り 或は塔と苾芻とを見ん 是の如

き等の善夢は

悉くみな成就の相なり 若し夢中に於て 狗と及び旃陀羅と 水蠟と油を身に

塗ると見ば

二四 此等の鳥云云  
已上は上品悉地  
の相。

二五 或は云云 右  
は下品悉地の相。

二六 水蠟 水ひる  
なり。

此れみな不吉祥なり 駝と驢と及び車等とを 若しは見及び彼の觸るゝは 必ず成就を壞す

(二)是の如く云云 此の二句は上を總結す。

(三)是の如く等の夢の相は 善と及び不善の相なり 應さに知るべし此の二の夢を 知り已て成就を求めよ

應さに護摩法を作し 粳米と油麻とを焼くべし 諸の魔障を脱することを得 即ち本尊を見て

常に而も警覺したまふことを得ん 聖道是の言を現じて 當さに其の處に往くべ

しとならば 彼に至て酥蜜を焼け

則ち實事を現せん 食し去るといふ盡く是れ實なり 道に於ける亦た爲れ實なり

若し本尊を疑はば

當さに寢すべし夢中に 尊我れに身を示したまへと願せよ 而も丈夫の身を現じ

たまへと 若し女人を見は

能く貪染の心を生じてん 應さに不放逸と爲るべし 眠らんと欲せん時は加持せ

よ 念誦のとき

(一)過去の財寶を思ふべからず 未來も亦た應せず 慎んで思惟を起すこと勿れ

念誦儀を成せず

若し心而も散動せば 眞言の義理を觀じて 定に住して念誦せよ (三)心若し貪染

を緣せば

不淨觀を作すべし 若し心に瞋恚起らば 即ち慈と相應せよ 愚に於ては(四)緣

生を念せよ

數數に若し心起て 顛倒の中にあらば 即ち一心に專注して 本尊の觀に住せ

よ

若し(五)未だ輪壇に入らざるもの 諸の香華等を獻するに 諸の魔に食噉せらるゝ

ことは 儀軌に依らず

及び廣く善く解せず 阿闍梨を遠離するに由てなり 諸魔の行者に隨ふこと

影の如く而も形に隨ひ

念誦の功を奪はれ 魔に食香等を誑さる 念誦し及び護摩するも 本尊受得し

たまはず

(一)過去云云 是れ後念より前念を指して過去といふ三世中の過去にあらず、謂く追悔を呵するなり、凡心は必ず已失の財に於て追悔惜を生ずるが故に云云 (二)心若し云云 今日何事もなき時は、障りの相に修す、少し定心に修行すれば、則ち障知るなり、今日散亂の中には障相現せず、緣生、十二緣 (三)未だ云云 未受灌頂の人。

此の眞言主宰を以て 頂の眞言を成就し 當さに用ひて加持をなすべし 諸の  
魔頂行等の

障礙をなすこと能はじ 頂輪王を成就せんとして 是の故に加持を作すべし  
一切の成就の處には

無能勝を誦して 自身の加持を作すべし 菩薩の種の眞言 輪王の眷屬

彼を用て加持を作せ 眞言を成就する時 念誦し護摩する等には 先づ護身を  
作すべし

若し護身の法を離れぬれば 悉地必ず成せじ 遊空の大藥叉 成就の鬼羅刹

遊行して破壊するが故に 彼の心をして疑惑せしむ 尾臘轉の華と 遏迦と

度度囉とは 一切の佛頂部には 閻提華と 青蓮と俱勿頭とのごと

(一) 度度囉 流志  
本に云く、曼陀羅  
華と。  
(二) 閻提華 惹底  
華。  
(三) 青蓮 流志本  
に、類鉢羅華とい  
ふ。

蓮華と庚體華と 及び餘の種種の華と 極香の陸地の華とを稱讚す 當さに知  
るべし佛頂の明をもて

(一) 印塔の法 是  
れ印佛頂經の本據  
印塔供養の儀式、  
當段の文丁寧なり

一切の時に供養せよ 修行者成せずんば 二三度作法せよ 乃し七徧に至らば

次第に成就を作さん 當さに海に入る河に於て (一) 印塔の法を作すべし 或は一・

二・三・四

力に隨ひて之を作せ 念誦し并に塔を作れ 恭敬して讚歎し 妙典を讀誦せよ

數數疲乏せん時 塔三洛叉に滿しなば 先罪悉く消滅せん 極香の華と

燒香と及び塗香とを用以て 窠塔波に供養し 一一の塔の前に於て 眞言を用

て加持せよ

一一の窠塔波に千八徧を誦すべし 眞言若し成せざるは 罪心を覆ふに由るが故

なり

一肘量の 一千の窠塔波を作るべし 設ひ(二) 五無間を造れるも 決定して成就

を得ん

念誦に由てすら罪を滅す 何に況んや制底を作らんをや 當さに海に入る河に於

て 蓮華を獻すること十萬すべし

獻すること爾所の數を限らば 速疾に成就することを得ん 彼の海に入る河に於

(二) 五無間 五無  
間樂。

てせよ 何に況んや此の量を過ぎんをや

遅にまれ速にまれ成就することを得ることは みな自己の身に由る 眞言を成就

することは 彼の福と無福とに由る

若し福德強盛ならば 當さに不久の時に於て 速疾に悉地を得べし 福德なき

の人は

空塔波を作るべし 悉地するには念誦を本とす 是の故に精進を以てすれば

成就すること牢固なることを得

眞言經書に在れども 衆毒を除くこと能はず 是の如くの道理を見るに 功を

勤めて念誦するは勝れたり

常に父母と師と 受苦の諸の有情とのために 一分の而も念誦を以て 彼のた

めにみな廻向せよ

諸の障難を滅せんが(一)應めには 常に佛を禮することを作すべし 佛を禮し念誦

するに由て 速疾に成就することを得

佛を禮する果報は 無量の福德聚ありと説く 當さに知るべし是れ歸命して

(一)應和・高二本  
には爲に作る。

數數に勤めて敬禮すること  
常恒にすれば悉地を獲 然らざれば末法の時には 眞言成就せず 是の故に我  
が釋迦  
威徳の弟子は 末世に解脱を得と説く 是の故に疑心を離れ(一) 勤を發し(二) 大い  
に(三) 精進して

一、三、二、四 亂脱

諸の悉地を修持せよ 久しからずして成就するを得ん(一) 増勝せる(二) 福德の(三) 人は

一、三、二、四 亂脱

速疾に悉地を得

多分の無福の人は 遅晩にして乃し成ずることを得 若し悲智と相應すれば

殊勝の悉地を獲

(一) 假の瑠璃を以て 紅顔黎等に與せざるがごとく 是の佛頂の眞言は 力用不

思議なり

食を乞ひ得ては淨ならしめて 本尊に獻すべし 分て三分に作して 有情を愍

念するが故に

先づ一分を取て 當さに本尊を供養すべし 又た一分を取て 諸の外來の客に

(一) 假の瑠璃云云  
以下は金輪の法  
と餘尊の法と勝劣  
を明す、金輪は法  
勝る、故に行者も  
勝るなり。

施せ

餘の一は自ら食すべし 本尊に獻する所の食をば 贖あがなひ取て受用せよ 若し外客あることなくば

轉じて諸の禽獸に施せ 自己の分の食をば 盡つくく他に施す應べからず 身を損壞せんかと恐るゝが故に

少分を減じて施すべし 南に面て之を食すべし 是れ則ち調伏の法なり 西に面て食すべからず

當さに調伏の事を作すべし 北と東とは息と増とに許す 佛頂等を成就するには

寂を成すれども東を異と爲す

悲愍の心を作すべし 三時に思惟すべし 誰か苦惱に在る 我今盡く救濟せん

と

大悲心相應せよ 出家と及び在家と 持杖と並に梵志とに 皆悲愍の意を懷け

念誦者遊行せんには 侶なくば常に謹慎すべし 是の故に常に 諸佛の塔門を

敬禮せよ

(二) 種種の云云 是れ當部の辨事等なり。

成じがたきの眞言をば 一切の時に等持せよ 常に三摩地を修すれば 是の人自在を得

(三) 種種の調伏者 種種の色を示現す 是の故に常に 念誦及び護摩を作すべし

塗拭し並に灑淨し 作淨すること先の説の如く 後に應さに護身を作すべし

灰と芥とを以て方隅を結するには 或は摧壞頂を用て 縷いとを加持して楸くわに纏ふて 四角に釘

辦事の眞言を以てし 護し已て供養すべし 智者即ち 一切の諸の聖衆に啓請して 念誦と護摩との

つべし 處にして 成就の因を作すべし 瞿摩と土と相和して 智者用て壇

座の上に安置して 供養の儀をなすと説け 先づ如來勝のために 儀軌

を作り 此の壇輪の中に於て 依て獻せよ 次第にして供養せよ 次は及び觀自在と

(三) 安置して 本尊を安置す。

(三) 説 或はいふ 般はんの字が 釋迦如來、勝しょうは常に世尊をいふ。

次に則ち輪王頂 其の次に諸の佛頂 次第にして供養せよ 次は及び觀自在と



一、三、二、四 亂脱

自の族と並に眷屬と 及與び金剛手とに 獻する所佛頂に同じ 獻する所の香華等

亦た部類に同じ 一是の如く三部と爲す 二而も供養儀を作して 此を以て常に警覺すべし

ニ及び一切の世天に 愚癡のものは是の言を作す 一切の眞言の人は 悉くみな是れ妄作なりと

若し儀軌を説かずんば 則ち毀謗に墮しなん 油麻と白芥子とを以て 而も護摩を作せ

能く敬愛の事を成す 油麻と粳米とを焼けば 増益を獲得す 毒藥と(一)羅藥喇

とを 相和して護摩すれば 佛教を壞亂する者を 悉くみな除滅せしむ 一尾臘樹木

無憂と及び(二)白秦と 波羅奢と菩提と 及び白膠木とを以て 二増益の諸の護摩には

(一) 羅藥喇 流志本に(一)羅伽里根とす

一、三、二、四 亂脱

(二) 白秦 流志本には(二)檉榔木といふ

(一) 活兒子 菩提子なり  
(二) 患 高本には桃に作る  
(三) 迦羅迦 流志本には(三)苦練木といふ

一、三、二、四 亂脱

(四) 降怨 和・高兩本には(四)除害に作る

獻する所佛頂に同じ

獻する所の香

一是の如く三部と爲す

二而も供養儀を作して

此を以て常に警

愚癡のものは是の言を作す

一切の眞言の人は

悉くみな

則ち毀謗に墮しなん

油麻と白芥子とを以て

而も護

能く敬愛の事を成す

油麻と粳米とを焼けば

増益を獲得す

毒藥と(一)羅藥喇

相和して護摩すれば

佛教を壞亂する者を

悉くみな除滅せしむ

一尾臘樹木

無憂と及び(二)白秦と

波羅奢と菩提と

及び白膠木とを以て

二増益の諸の護

是の如き等の木を用ひよ

尼瞿陀と優曇と

阿説佉乳木と

(一)活兒子等の木を

若し息の法を作さば

用て護摩の柴とせよ

法陀羅と木(二)患と

及び(三)迦羅迦

木と

是の如く等の諸の木を以て

相憎を調伏するに用ひよ

面を南

に向へて坐すべし

意に思ひ口に稱して

調伏の法を作すべし

面を北方に對

呼字を稱して焼け

眞言の句の中に於て

娑嚩訶を加へて誦すれば

即ち息災を成す 一諸の佛頂を

二修するには

四面を東に向へて坐して

護摩して増益を作すべし

結跏をば息災となし

座は増益なり

蹲踞して調伏を作せ

(四)降怨の故に護摩するをば

名けて調伏の事と爲す

を遮止するが故に

名けて息災となす

隨意を成就するが故に

是を名けて増益と爲す

是の如く

三三二四 亂脫

の一切處に  
 善く思ふて修行せよ 佛敎を憎嫉する者を 其をして遠離せしむるが故に 是  
 を相憎の法と名く  
 清淨の持誦者は 爪髪を長くすべからず 在家の淨行の人の 髪の長きをば過  
 とせざれども一  
 三 護摩し念誦する時 皆妨礙する所あり 二 梳洗の功を貪り事として 虚しく時分  
 を過すは  
 四 聖衆を供養する時 甲の中に垢穢を停め 頭髮に蟻虱を生ずれば 能く諸の罪  
 徳を生ず  
 日出の時を觀され 日蝕の時を觀され 亦た月蝕を觀され 師尊を輕毀せざれ  
 聖衆を供養する時 安樂の事を觀され 亦た鬪諍を觀され 是の故に修行者は  
 常に定と相應せよ 飢儉の國土と 及び鬪戰の處の 國土和順せざらんに於  
 ては  
 悉地を求むべからず 聖衆の罰せらるゝ處と 藥叉鬼神の處と 龍神雜亂の處

二〇 倡女 姪女、  
女樂を倡といふ。

と  
 屍林穢汚の處と 彌猴車の居處と 蚊蚋多饒ん處と 或は亢旱の處とに於て  
 彼の諸の難處の如きは 成就を求むべからず 不調の倡女の處と 惡風多饒  
 處と  
 是の如く等の處にしては 悉地を獲ず 是の處若し吉祥ならば 念誦し護摩を  
 作せ  
 聖衆みな喜悅すること 人の好食を食して 心意適悅を得るが如し 此の中に  
 は護摩勝れたり  
 諸の事業を成辦す 若し王の相具せざれば 王位を紹ぐに堪へざるがごとく  
 力分に隨ひて  
 念誦及び護摩を作すべし 下劣の修行の者は 果報も亦た下劣なり 若し毒と  
 刀林とを乞はんには  
 而も施與すべからず 唯し敬愛の法と 命難を護らんが爲めの故なると 憂惱  
 を除かんが爲めの故なるとをば除く

是の如くの因縁を除いては 悉くみな與ふべからず 清淨修行の者 或は誤て  
不淨に觸せば

則ち而も深浴すべし 心に誦し印契を結べ 是の如くの貪染の類には 淨の眞  
言を思ふて

明を誦し印契を結ぶべし 悉くみな清淨なることを得 諸の穢の鬼神の 起屍  
と及び藥叉と

(一)殊勝の河 妙  
法をいふ。

及び羅刹との成就と 上中の作法の處 智者疑ふべからず (二)殊勝の河に沈没  
て

正法の水を深浴し 慧を以て思惟して 念誦し悉皆作せ 結跏を破すべからず  
事に於てみな相違す 若し結跏坐を破すれば 即ち起て深浴すべし 或は心を  
以て洗濯せよ

悉皆成就することを得。

音釋

蘇可の切 蘇可の切 諸孟の切、畫紺を 蘇莫交の切、長穀胡谷の切、悚息勇の切、蟒母黨の切、條他刀の切、龍疾正  
鮮深なり 開張するなり。 蘇毫の牛なり。 穀細紗なり。 悚懼るるなり 蟒大蛇なり 條絲繩なり 龍の切

淨と礫砂革の切、開隘窄隘は烏懈の切、陋なり、穿洋壯士の切、擯胡慣の切、標幟幟は車遙の切、楡烏沒叵  
同じ 伸するなり 隘窄は側格の切、狭きなり 洋灘むなり 擯貫くなり 標幟幟は胃志の切、楡烏沒叵  
普火燄計耶計元口渡の切  
の切 燄計耶計元口渡の切

國譯菩提場所說一字頂輪王經卷第二終

### 國譯菩提場所說一字頂輪王經卷第三

唐特進試鴻臚卿三藏沙門大廣智不空 詔を奉じて譯す

七 末法成就品第七  
七 和本に此の品  
七 號なし、流志本に  
七 是成法品第六と  
七 言ひ第二卷に屬す  
七 是未來世に屬す  
七 是劣慧の人の爲に  
七 悉地易成の法を説  
七 玉ふ。

六 六分云云若  
六 して護身結界せず  
六 して印を結べば則ち  
六 鬼神の爲に或は六  
六 分を奪はれ或は五  
六 分を奪はる。

七 末法成就品第七

爾の時に世尊、復た次に利益のために此の事業成就を説きたまふ、伽佉を説いて曰く  
未來世に當て 劣慧の有情あらん 彼れに利益を作さん爲めに 此の悉地を

説く

若し儀則を具すれば 必定して成就せん 時と宿曜とを擇ばず 念誦の處を擇

ばず

當さに本尊を請して 諸の悉地を求むべし 及び佉を鈎召し 或は六分を取

らん

是の如く加持すべし 及び念誦の相を説かん 念誦の時に當て 若し加護を關

するが故に

二 攝縛屍なり。  
三 葬婆肉なり。

人の精氣を奪ふ鬼 成就の物を盜竊し 並に拏枳寧等 不思議の物を盜せん

念誦の時に當ては 一切悉くみな作すべし 失ひし物を得ること疑ひなし 壞

せざる攝縛の

殊勝にして自ら終る者を取れ 其の葬婆を割割して 薑・椒・等を和し調へ

筋及び骨を除き棄て、

眞言者法に依て 即ち八方に施すべし 先づ屍林の處を定めて 彼に住する鬼

と羅刹とあらんに

眞言者彼に於て 稻華を以て護摩せよ 即ち速かに神驗を現せん 四衢と及び

樹下と

山間の大怖の處とにして 高聲にして唱へて言へ 屍林に葬婆を質んと 鬼衆

大いに歡喜して

求むる所あらばみな之を與へん 隱形の法を成就せん 嚴具と及び眼藥と 雄

黃等とを悉く

佛頂を成就する者に與へん。

爾の時に釋迦牟尼佛、未來の有情を觀じて、速疾成就の法を説きたまふ、復た伽佉を説いて曰く

二〇 迷怛羅 屍なり。

即ち彼の攝縛の 前の如く壞せざる者を取て 二〇 迷怛羅を成就せよ 迦樹と大河の側と

屍林とに於て成を求めよ 清淨にして洗ひ塗り 香華を以て嚴飾し 及び餘の眞言明と

或は輪王頂を以て 而も用て加護を作して 是の如くの事を成せんと求めよ

若し是の如くせずんば

二一 心上 屍の心上に坐す。

魔の損害すること疑はず 即ち儀軌に依て 善き伴あらん驍勇の者 行者心上に坐し

拳を結んで彼の額を打つべし 眞言王を誦すべし 間無うして多く誦せよ 彼れ踊躍して起たん

拳起屍の法と名く 當さに水中に入て 日出より乃し夜に至るまで 拳を結んで眞言を誦すべし

安但但那を成せん 人の莽娑を取て 割き截て護摩すべし 儀に依て成就を作せ

二二 三、三、四 亂脫

慧者放逸せざれ 莽娑と爲怛羅と 所求みな悉地す 此れ諸佛の所説なり

二三 女人云云 以下在家を明す。

三 女人に貪著す 貪染の有情は 戒品に堪ふる所なし 是の如くの有情は

二四 六念 化教の六念と制教の六念なり。

三寶に歸依し 六念して以て器を成じ 是の如くの思を作して 力に隨て修行すべし

修行者當さに 菩提心を勤修すべし 設し彼を離れて修習せば 任運に成就を得ん

行者 青黒の物を食す應からず 食に於て厭離を生ぜよ 高牀に坐臥せざれ

二五 搏 搏なるべし。搏 搏食なり。搏 搏食なり。

頬を鼓かして食す應からず 亦た食を搏啜せず 食する所の量の多少の 大さ孔雀の卵の如く

威儀に住して食せよ 是の如く等の威儀によて 修行者食すべし 寂黙にして念誦せよ

二六 語和 高兩本に木に作る。

當さに 語黙に住すべし 若し修行に住せば 身黙に住して 而も護摩を作す

一、四、三、二、五 亂脱

べし  
一黙に住すべし 悉地して即ち成佛せん 若し是の如く黙せずんば 眞言成就せじ

眞言に於て修行せんものは 寂黙して迎請すべし 眞言明を誦して 眞言成就と共に同じく食せざれ

乃至親族に於ても 與に食と 衣服と及び臥具とのごときを同じくすべからず

(二) 鍍銅 白銅。

(二) 鍍銅・熟銅の器をば

灰と醋との如き物を以て洗へ 洗ひ已て食し用ゐよ 水中にして念誦を作すには

みな諸の儀則を説けり

他人と 而も共に同じく寢處すべからず 雜居すれば過を生じて 貪染等に攝受せらる

調弄戲笑等をなして 此に由て過を生ず 吉日と齋戒との處は

(三) 奥 和本に更に作る。

調弄戲笑等をなして

須く(三)奥に時分を取て

諸の成就を作すべし 自身にし及び他の爲にするに 威くみな日宿と 年月の

(二) 三の神通分 正・五・九月なり。

(三) 二分 白黒なり。

九、三、二、六、五、七、

亂脱

(三) 洗 洗浴するなり。

復た香水を用て(三)洗ひ 戒に住して造作して 最勝の像を作るべし 白檀等を用以て 更に洗て清淨ならしめて

而も截屈すべからず 然して後に加持せよ 午時に 具戒を修持して其を淨ならしむべし

八、十一、十二、 亂脱 (四) 齋の本字なり。

匠者を使って畫かしめば 然る後修真言し 吉日宿に(四)齋戒して 最勝の像を成すべし 是の如く板等の上にも 畫くことを得亦た稱讚す 普ねく先に説く所の 佛

九十五、九十六、九十七、九十八、二十、九十九、二十

亂脱

頂等の勝像に通ず

四毛髮の過を離るべし

十五 毘に於ても或は板に於ても

十七 師子座に坐せしめて

而も

其の本形を畫け

十三 殊勝の色を用て

而も香膠を以て和すべし

十九 支分皆な圓かに具せよ

十四 其の香

(二) 甲 甲香なり。

は(二) 甲と麝とを離れて

水を用て淨く濾すべし

已に過失なしと知らば

に當て

佛の師子座を畫き

十八 皆な相を以て莊嚴し

法輪の大印を

佛の前に畫くべし

二十 是の如くの佛を畫くべし

に念珠を持せり

二十八 頂髻に無量壽のみす

情を愍念したまふ

(三) 法論 金輪寶。

二十二、二十一、亂脱

二十、二十五、二十、二十六、亂脱

(二) 觀自在尊 身

黄白色なり。

二十八、二十七 亂脱

二十九、亂脱

一、三、二、亂脱

二十九 左邊には金剛手を畫け

身色は青蓮の如くせよ

忿怒の形を畫くべし

持明大女使と

金剛寶藥羅と

金剛笑と師子と

甘露軍吒利とを以て

身に近づけて畫くべし

調し難きを調せしむる尊なり

ニ金剛の拂を執持せり

四馬頭尊明王と

意樂成就尊と

白衣尊と多羅と

毗俱胝と(二) 徧照と

是の如くの聖衆をば

蓮を持せしめて左邊に安せよ

一切みな畫くこと

彼の

本の形狀の如くすべし

廣大畫像の儀は

大曼荼羅の如し

略して畫像の法を示す

如來の所説なり

佛世尊の所の

兩邊に於て

無能勝と大慈と

毫相と並に佛眼とを畫くべし

此等は本形にして

金色初日の暉に畫け

みな蓮華に坐せしめよ

彼れ眞言身に住す

此れ勝微妙の像なり

諸頂成就の中に

善軌則を以て修せんとならば

是の如

くの像を畫くべし

國譯菩提場所說一字頂輪王經

善く教法を閑ふ者の 清淨の畫匠人 鬘牛の毛を以て筆を作り 吉祥樹を取り  
此の木を用て轆を爲れ 是の像は法に依つて畫せよ 茅薦に坐して 當さに此  
の佛像を畫くべし

此の普通の像を得つれば 一切みな成就す (一)乃し過去の時に於て 是の(二)妙音  
童眞

無比の威徳者 身中より光明を出して 猶ほし火聚の光の如くして 種種寂の  
意樂をえしむ

(三)有を照曜して 是の如くの種の光 妙音身中より出で、 是の時に三地  
五通を獲大威徳あて 則ち菩薩と成爲て 有情を利益することを作す 佛頂は  
不思議なり

自身是れ如來 三摩地の形相を以て 衆生に示現し 三有に變化す  
一切の佛の形相 定を以て輪王を現す 大眞言王を説いて 能く衆生の利を作  
すこと

猶如し如意寶のごとし。

(一)乃し云云  
此に於て念誦成就  
す  
(二)妙音童眞  
文  
(三)大士の異名  
(四)亂脫

(一)俱摩羅 以下  
は世尊の二百十一  
の名を説く、難欲  
童眞といふに至て  
竟る。  
(二)然 流志本同  
じ、高本に在に作  
る。

(三)羂 方中の切  
牛の名、形案駄の  
如く背上、降高に  
て封土の如し、故  
りに名く、鬘資國  
り出づ。

爾の時に世尊、曼殊室利童眞菩薩に告げて言はく、汝曼殊室利童眞、有情を利益し大  
甲冑を被、善巧方便を以て有情を調伏し、種種に色身を變化し、佛・菩薩・緣覺・聲聞・  
あて、有情を攝受して而も爲めに法を説き、其をして覺悟せしむと。時に曼殊室利  
童眞菩薩、佛に白して言さく、世尊、幾何の名號を以てか佛頂眞言三摩地の行の差別  
を、世尊は世界に於て轉じたまふ。佛の言はく、所謂る(一)俱摩羅と名け、印捺囉帝と  
名け、鏢羯囉と名け、壞宮と名け、梵王と名け、毗紐と名け、大自在と名け、自(二)然  
と名け、劫比羅と名け、部丹多と名け、牟尼と名け、底哩佗と名け、羯囉沙と名け、  
地と名け、部彌と名け、持寶と名け、彌也(三)合婆と名け、一切去と名け、一切處面と  
名け、濕嚩と名け、寂靜と名け、涅槃と名け、已化と名け、變化と名け、難摧と名け  
天と名け、阿蘇羅と名け主と名け、尊と名け、主宰と名け、最勝と名け、引導と名け  
調伏者と名け、福と名け吉祥と名け、一切義成就と名け、世尊と名け商羯囉と名け、  
作寂と名け空と名け、勝義と名け不實と名け、感と名け名稱と名け、與者と名け悲者  
と名け、慈と名け三摩提と名け、慈と名け水天と名け、師子と名け、(三)羂牛と名け、  
天と名け、龍と名け、藥叉と名け、仙と名け大仙と名け、作者と名け流出者と名け、



(一) 寶和高二本には實に作る。

(二) 醫囉鉢多此に香葉といふ帝釋所乘の象名。

世主と名け、毗摩質多羅と名け、三目と名け千眼と名け、清淨と名け威靈と名け、三摩地と名け三摩地出生と名け、三摩地生と名け、才士と名け、囉惹アラシヤと名け、丈夫師子と名け、丈夫主と名け勝義と名け、勝義(三)實と名け證と名け、證(三)實と名け、三界主と名け世尊と名け、無主と名け主と名け、眼と名け實と名け、夢蓮華と名け、光と名け、鬼主と名け離欲と名け、寂靜欲と名け、遠離欲と名け遠離過と名け、壞過と名け盡過と名け、摧過と名け健軍主と名け、大王と名け護世と名け、持地と名け(三)醫囉鉢多と名け、香象と名け白蓮華と名け、説空と名け現空と名け、現悲と名け、現道と名け、有と名け、不有と名け、分別と名け、無分別と名け、離分別と名け、壞分別と名け、護世と名け善國と名け、共許と名け夜摩と名け、施財と名け縛嚕拏ボロダと名け、俱尾羅クビと名け持國と名け、善現と名け蘇彌盧ソミロと名け、金剛と名け如金剛と名け、天妙と名け天妙趣と名け、勇猛と名け大勇猛と名け、能生と名け大能生と名け、常と名け無常と名け、常無常と名け、轉輪王の眞言と名け、大眞言と名け大藥と名け、論師と名け大論師と名け、勝と名け無上と名け、白と名け説白と名け、丈夫と名け説丈夫と名け、娑羯羅シヤカラと名け大娑羯羅と名け、海と名け大海と名け、烏娜地ウナヂと名け、月と名け日と名

(一) 不異 或は非不異か。  
(二) 童子の下、流志本には「二類の人あり」の句あり。

(三) 法界 法性なり。  
(四) 實 實智。

一、三、二、四 亂脫

一、三、二、四 亂脫

け、囉摩と名け洛乞叉摩拏と名け、想莊嚴と名け、雲と名け大雲と名け、聚と名け大聚と名け、不相似と名け羅喉と名け、軍と名け大軍と名け、群と名け大群と名け、人主と名け大人主と名け、水藏と名け大水藏と名け、龍象と名け師子驍勇と名け、奇特と名け熙怡と名け、大熙怡と名け、財と名け大財と名け、具財と名け大財寶と名け、阿羅漢害煩惱と名け、幻化者と名け、持幻化と名け、變化と名け作變化と名け、具義と名け能鬪戰と名け、非異と名け(三)不異と名け、命と名け非命と名け、山と名け大山と名け、難壞と名け安樂慈住と名け、神通と名け具力と名け、不相似光と名く。又た曼殊師利童子(三)我に於て是の如くの知を作すものあり、不滅不生と名け、眞如と名け、眞性と名け實際と名け、實性と名け衆法と名け、(三)法界と名け涅槃と名け、(四)實と名け、無二と名け、有相と名け、純と名け、意成と名く。又た曼殊室利童子、此の娑訶世界に於て我を如來と名け佛と名け、大師人天作と名くることを知り、(三)是の如く、(二)我を離欲童眞と名くと知る、(四)此の世界に於て有情を調伏する行意趣の中に、五阿僧祇百千、(三)愚夫と聲聞とのために(二)名を、(四)示現す、是の如くの言説を作す、我が爾(三)の名號を知れりや、衆生を調伏し成熟するが故に、諸の契經の中に於て説けり、是の如く

童真、恒河沙數の佛世界の中に於て、種種の名號を以て有情我を知れり、童子<sup>一</sup>、有情を調伏し成熟するに、<sup>二</sup>如來は法を説きたまへども、分別する所もなく、功德の用なけれども、無量種の眞言色身の事相を以て轉じたまふ。爾の時に世尊、復た曼殊室利菩薩に告げて言はく、而も伽佉を説いて曰く

自分の善時日に 端嚴の宿曜に於て 澡洗して淨衣を著 齋戒して儀軌に住せよ

八日と十三日と 十日と十五日と 或は五日を用て 儀軌に依て

護摩と及び供養を作して 八方に施すべし 是の如く等の日に於て 慇懃にして供養せよ

諸佛と及び緣覺と 大威徳の聲聞と 觀自在菩薩と 金剛手大力と<sup>一</sup> 常に憶念したまふ<sup>二</sup>此等 修行者慇懃に 是の如く等の 菩薩威徳者を供養すれば

聖天悉く歡喜し 明天威徳者 此の修行の人に於て 悉く皆而も歡喜す

行者世天に於ては 供養して禮すべからず 一切の諸の眞言の 威力不思議な

ればなり

新産と及び死家との 殘食と及び祭の食と 月經ある女の作れる食と 及び

彼の家の食と

一旃陀羅の家の食と 三臭穢と陳宿との食 再び蒸煮<sup>ジャウシヨウ</sup>を経たる 如上所説の食を

ば 行者食すべからず 及び聖衆に獻する食をば 亦た食噉すべからず 是の如く

等の家に 悉く往いて飲食せざれ 及び往いて止宿せざれ 悉地を破壊するが故なり 修

行者當さに 三時に三寶に歸すべし 菩提心を發して 三種の淨を作すべし 身淨と及び語

淨と 意淨は第三種なり 常に六念を觀せよ 是の如くして常に修行し 日に八戒

を受けよ 當さに律儀に住して 是の如くの言を作すべし 阿闍黎存念したまへ 名を稱

（二）一切云云以下八齋戒、在家の行者に示す。

七、四、三、二、六、五 亂脱

一、三、二、四 亂脱

せよ我某甲

今日より始めて 明の日出の時に至るまで 而も其の中間に於て 一切の命を断せし

他の財物を盗せし 梵行にして姪慾せし 欺誑を作さし 歌舞作樂せし

三香・鬘・塗・彩せし 三飲酒し放逸せし 六非時に食すべからず 五高大の牀に臥さじ

七羅漢の已に持せるが如く 我も今亦た是の如くすべしと。

爾の時に釋迦牟尼世尊、金剛手菩薩を觀察して、輪王佛頂の世間・出世間上上の眞言明教を説きたまふ、二三肘或は兩肘にすべし、意に隨ひて大小に作るべし、細氈の毛髪を去れる者を取り、香湯を以て淨く洗はしめ、東面に安し吉日宿直に於て、先の所説の二畫像の法の如く、畫人に八支戒を授與すべし、其の畫人は諸根圓具し、十善業道を成就する者をもてせよ、彩色の中に於て皮膠を用ふべからず、佛の形像を畫するには、身金色の如くして説法印を作し、白蓮華の上に於て結跏趺坐せしめ、如來の徧身に光明熾盛ならしめよ、光の中より衆多の輪を出し、頂より光明を出すべし、背後の上に山峰を畫くべし、下の右邊に於て持誦者を畫くべし、本形の如くして香爐を持して、世

（二）しめん 恐くは刺字か。

一、三、五、四、二、六 亂脱

尊を瞻仰したてまつる勢にせよ、祕密主此は是れ輪王佛の最勝の畫像の法なり、一切如來の略説したまふ所なり、有情を愍念せしめん爲めの故に説く。爾の時に世尊、伽佉を説いて曰く 若し此の佛像を見ば 一切の佛の所説なり 略して微妙像を説く 能く諸の罪業を滅す

五一切の諸の功德 悉く皆な彼岸に到る 諸天龍供養

六是れ人天の供養するなり 現世に成就を得ることは 此の眞言の力に由り 此

の像を見るに由るが故なり 此れ則ち多佛説いて 悉くみな而も稱讚したまふは 彼を成就せしめんが爲めの

故なり 決定して悉地を獲 功徳みな増長す 此の像を見るに由るが故に 諸の罪悉く皆な滅す 此の像を

最勝と爲す 四如意足を獲 功徳大海の如くにして 勝智慧を獲得す 輪王の明を修するに

由て

由て

由て

由て

(二)主 高本には  
王に作る。

清淨無垢なることを得 智慧みな殊勝にして 佛兩足尊と成り 人天咸な供養す

此の眞言を持するに由て 轉輪殊勝の(二)主となる 是の人清淨者 眞言行を修する者は

此れは是れ諸佛の體なり 威徳與に等しきものなし 必含遮と起屍と 是等の

威徳者

頂輪王を修し 持明を成就せる者を見ては 悉くみな消融す 帝釋大威徳も

若し成就者を見ては 座を分ちて同じく坐す 及餘の威徳の天も 三界に比るに

悉地者と等しきものあることなし 若し彼を見て起たずんば 頭破れて七分と作

らん 設ひ俱胝劫に於て

一、三、二、四 亂脱

一世尊若し自ら説きたまふことも 三功德は盡ることあることなし 二頂王の不思議

若し人此を修すれば 彼最勝を成就して 切利の王となることを得 彼の人終

に死せず

無量俱胝の衆 圍繞して餘の刹に往いて 身を變じて佛形の如くして 諸の有

情の類を化し

身を金剛手に變じて 諸の有情を利樂し 化して天帝釋と作り 或は梵王を現

じて

諸の有情を調伏し 變化して帝釋と爲る 大威神通有りて 諸の惡趣を拔濟し

地獄と夜摩界と 餓鬼と及び傍生と 城と邑と聚落と 曠野と及び山林に於て

諸の資具と 飲食と妙なる臥具とを變化して 諸の有情を愍念して 悉くみな

而も給施せん

我れ略して頂輪において 持明を修行する者を説く 五神通を獲得して 則ち

大菩薩

人中の最勝尊と成らん。

(三)密印品第八

爾の時に釋迦牟尼佛、一切菩薩衆に告げたまはく、善男子、汝等一切如來より出生する大三摩地、無比方あて一切如來に超勝し、眞言身に住する一切如來族の眞實の大印眞言を受くべし、無比の威光神通あて、無邊の奇特を流出し、威神を現じ能く一切の苦

(二)密印品 流志  
本には、印成就品  
第七云ひ、和本  
には、菩提場所説一  
字頂輪王經を加ふ

一三二四 亂脫

(一)世尊云云以下諸尊の印相は胎藏の如く、即ち如来の如く、即ち如来の支分出生の印相なり。  
一三二四 亂脫

(二)二手云云。一切如来心印言。

薩を生じ、能く一切の俱胝の魔を摧いて、一切の菩薩を攝伏し、難調の人をして慈心を起さしむ、善男子、能く一切の事業を成辨する、我れ今説かん、大印を。爾の時に金剛手、佛に白して言さく、世尊、惟だ願くは一切如来の支分より出生せる大印眞言を説きたまへ、衆生を利益せんが爲めの故に、易き方便成就を作したまへ、佛の言はく、汝當さに諦かに聽くべし、我れ汝がために説かん、我れ今分別し解説せん。(二)二手内に相叉へ拳に作り、二大指を立てよ、此れは是れ一切如来の心印なり、即ち此の印、左の大指を屈して掌に入れよ、是れを持蓮華者の印と爲す、即ち前の印右の大指を屈して掌に入れ、左の大指を直く立てよ、是れ持金剛者の印なり、眞言に曰く 曩莫、薩嚩、沒馱胃地薩怛嚩引、南、引、阿引尾囉吽欠二

(三)一切如来云云此の三部心の印相は常の如く、各部別なり、眞言は即ち胎藏乃至阿尾囉吽欠の一眞言にして、即ち是れ三部心のなり、釋迦金輪は即ち胎の大日三部の總體なり。  
(四)前の如く云云根本大印。

此れは是れ一切如来心の印眞言なり、秘密主此を大勤勇の心眞言と名く、一切如来の眞實の法なり、能く地獄・傍生・夜摩の惡趣を解脱し、能く一切の有情をして如来の事を作し、一切菩薩を攝召せしむ、金剛手我れ略して説かん、能く梵王・帝釋・夜摩・水天・俱尾羅等を召す、十地に住せる菩薩大自在者をも尙ほ能く請召す、何に況んや餘類をや。(四)前の如く二手拳に作り、二中指を舒べ立て相合せ、上の第三節を屈し二頭指

(一)此の明云云眞言即ち三形にして即ち尊形の意なり。

一三二四 亂脫

を屈して、互二大指の甲上に安け、此を輪王根本大印と名く。恒河沙の數量の 如来の所説なり 未來の佛も當さに説きたまふべし 此れ大輪王の印なり 此の印を大印と名く 説いて輪王頂と爲す (一)此の明は即ち是れ佛なり 有情を利益するが故に 智者成就の人 若し此の印を結ぶ處には 諸の惡魔障等 是の處に敢て住せず。秘密主、此の輪王の根本の印は、一切如来の宣説したまふ所なり、百俱胝劫に於ても盡く其の福利を説くこと能はず、設ひ千恒河沙數劫に於ても、亦た其の功能福利を説き威徳を讃揚すること能はず。爾の時に如来、伽佉を説いて曰く 智者若し受持すれば 大威徳の菩薩 俱胝の魔羅衆にも 常に沮壞せられず 乃至百劫の中にも 惡趣に墮せず 若し輪王の印を持し 並に是の眞言を誦すれば 受持するに由るの福をば (二)如来大師の説きたまふとも (三)百俱胝劫に於て (四)讚歎すること能はず

若し此の明を持することあつて 持戒精進の者 此の眞言を修すべし 輪王大  
力の者となる

彼の人は慧を失せず 及び正念を失せず 千俱胝劫に於て 未だ嘗て忘失する  
こと能はず。

(一) 前の根本印云  
(二) 高頂王印  
(三) 二手云云 傘  
蓋印。

(一) 前印云云 光  
聚頂印。前印は  
高頂印。前印は  
頂印。前印は傘  
蓋王印。前印は傘  
蓋王印。此處脱文ある  
ハ、即ち云云 煩  
惱印言。

金剛手、此の大印は無比量の方威徳あり、(一) 前の根本の印に准す、二中指直く立て合  
せよ、是れ則ち高頂王の印なり、此を以て佛頂族の中に於て灌頂の印と爲す。(二) 二手  
を以て虚心合掌して、二無名指を屈して掌中に入れ、二大指の面を以て二無名指の甲  
の上を押し、二頭指を屈して相拄へ圓ならしめ、傘蓋形の如くせよ、此を白傘蓋頂王  
印と名く。(三) 前印に准じて、二頭指を舒べよ、則ち是れ光聚頂王印なり。(四) 前印に准  
じて、二頭指を以て各の中指の第三節に安せよ、是れ勝頂王印なり、(五) 是れ則ち吉祥  
法輪の大印なり、十二行相法輪の印と名く、一切の佛の所説なり、能く一切の煩惱を  
壊す、若し此の印を見れば、親り如來を見たてまつるが如し、(六) 即ち此の印は二頭指を  
以て二中指の背に秘すを即ち煩惱電の印と名け、亦た如來結跏の印と名く、金剛手、  
此等の五大印は如來族の中に轉輪王の大印と名く、祕密主、此の輪王の大印等の煩惱

(一) 二手云云 如  
來心印言。(二) 此の印云云  
此の印は虚空合し  
て二大を屈して掌  
中に入る。

(三) 二手云云 辨  
事佛頂印明。

(四) 右の手 如來  
錫杖の印相。

電と法輪と光聚頂と勝頂と高頂と、並に白傘蓋頂と、是の如く等の印は悉くみな是れ  
輪王の印なり。(一) 二手を以て虚心合掌して、二大指を雙べ屈して掌中に入れよ、(二) 此  
の印を如來心の印と名け、亦た如來大勇猛の印と名く。  
此の印眞言を以て 七徧心加持すれば 先世の流轉の中に 作れる所の一切  
の罪

悉くみな除滅することを得 即ち頂上に解散せよ 一切に通じて成就す。

此を以て自身を加持すれば、即ち一切如來に加持せらるゝ身と成る、眞言に曰く 曩  
莫三滿多沒馱南、引唵、嚩那嚩、二尾嚩婆囉、引 訶三

此の大眞言は五字の眞言に同じ、修行者此を以て護身せよ、常に心を加持すべし、兼  
ねて五字を用ふれば、大威徳力を獲。(三) 二手を以て虚心合掌して、十指互ひに相ひ交  
へて其の掌を虚ならしめよ、此を一切辦事佛頂の印と名く。眞言に曰く 曩莫三滿多  
沒馱南、引唵、嚩那嚩、二尾嚩婆囉、引 訶四

金剛手、此の一切辦事の眞言は、佛頂の教の中に於て、此は是れ一切の佛頂の心なり、  
一切の事業の處に於て當さに用ふべし、修行者此を以て護身すべし。(四) 右の手を以て

② 握 高本にな

大拇指を握り拳に作り、左の手を以て袈裟の角を執り握れ、此を錫杖の印と名く、眞言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、引 唵 二度 那 三 爾 多 囉 拏、 吽 四 引 此れ是の錫杖の明は 能く難調の者を制す 身を護するが故に用ふべし 常に成就の處に於て

錫杖の印を用て 印と眞言と相應すべし。

③ 先づ左の手を以て掌を仰けて齋の下に安し、右の手を以て左の手の上に覆せて、右の手の小指と左の手の大指と④ 互相に加して、其の掌虚ならしむるを、⑤ 如來鉢の印と名く。

恐怖の處と 飢渴と障難との時に當て 是の眞言を誦すべし 諸の苦悉くあることなげん。

眞言に曰く 唵、引 虛迦播羅引 地瑟恥 二合 多、 二 駄囉 也 駄引囉也、 三 摩訶引 努婆 引 囉、 沒 駄、 跋 囉 囉 二合 娑 囉 引 四 引 鉢の眞言は大力あり 諸佛の加持したまふ所なり 一切の諸の衆生 念するに由て飢渴を除く

⑤ 也 別本にあり。

③ 先づ 如來鉢印言。  
④ 互相云云 右の大指と左の小指と合するをいふ。  
⑤ 如來鉢の印 常の鉢の印と異り即ち梵夾の印に似て掌を虚にし圓満になす。

⑤ 也 別本にあり。

② 二手云云 如來毫相印言。

險道と曠野との中にして 修行者憶念して 當さに自身を加して 眞言と印と相應すべし。

② 二手を以て内に相ひ交へ、掌を仰け二頭指の側相ひ挂へ、二大指各の頭指の下の節を捻して、倒まに肩間に安せよ、如來毫相の印と名く、眞言に曰く 曩莫薩囉怛佗去 聲 引 曩帝 囉 囉 易 二合 毗 藥、 二合 三藐 三沒 第 毗 藥、 三合 係 係、 四 滿 駄 滿 駄、 五 底 瑟 姪 二合 底 瑟 姪、 六合 駄 引 囉 也 駄 引 囉 也、 七 你 論 駄 你 論 度 引 囉 拏 八合 麼 尼 娑 囉 引 九 引 此れ是の毫相の印は 能く大人の相を具し 能く諸の悉地を與ふ 是の印は大威徳あり

若し人此の印を持すれば 毫相威徳者 彼れみな成就を得るは 結んで此の明を誦するに由れり。

前の印を用て頸を加持すれば則ち頸の印と成る、鼻を加持すれば則ち鼻の印と成る。  
③ 如來鼻の眞言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、引 唵 二 哩 尼 三 吽 引 泮 娑 囉 引 二合 訶 引 行者自の鼻を加すれば 彼れ終に鼻の疾なし 百俱胝劫に於ても 彼れ終に鼻を患へず。

③ 如來云云 如來頂鼻の明。流志本には一頂鼻の印に曰く一といふ。爾れば今本は頭印字を脱するならん

二手云云 佛  
眼印明。一切佛頂云云  
佛眼一切の印明は能  
く一切の事業を成  
するなり。次下の  
長行の文に明かな  
り。

二手密に合掌して、二頭指を屈して各の中指の背の上に安し、大指屈して掌に入れよ、名けて佛眼の印と爲す。

一切佛頂の中に 此の大印を用ふべし 最勝にして諸の罪を滅し 決定して成就を得

輪王佛頂を修するもの 若し常に此の印を結び 清淨にして受持すれば 久しからずして彼れ

一切の佛頂の法を成就せん 設ひ百劫の福を積めるものあらんに 若し此の印契を得て 佛眼の眞言を誦すれば

其の福彼れと等し 此の佛眼の印明は 能く一切の業を成す。

即ち眞言を説いて曰く 曩莫、薩嚩但佉、薩帝、一囉曷二合 毗藥、二合 三藐三沒第、毗藥、三合 唵、四囉嚩、塞普二合 嚩、五入嚩二合 囉、底瑟姪、二合 悉駄、魯左儻、七薩嚩囉佉、二合 娑但你、娑嚩引 訶八

爾の時に世尊、金剛手菩薩に告げて言はく、金剛手此の佛眼大明妃は、我れ十俱胝の如來の所より此の陀羅尼を受得せり、金剛手此の明を憶念するに由て、一切の眞言盡

亂脫

二相和云云 佛  
眼の眞言を和誦す  
るに和誦あり第  
四遍に至り成就す  
然して後に加へ和  
して誦するなり  
一、二、三、四、は加  
ふべからず、若し  
持明者を損ぜん  
云云。則ち云云 如  
來眉印言。

天、其の修行者の前に現じて、一切の眞言教法に於て悉くみな成就せん、此の眞言を誦持するに由て、一切の金剛族悉くみな成就す、是の故に金剛手佛頂の眞言を修せん者は、先づ常に此の明妃を誦すること三遍或は七遍或は二十一遍せよ、金剛手、此の佛眼大明妃を、我れ今釋迦牟尼の説くことは、諸の有情を利益せんがための故なり、金剛手此の陀羅尼は暴惡瞋怒の有情の前にして誦すべし、みな歡喜することを得、難調暴惡の鬼魅も降伏して皆な歡喜す、一切の鬪諍言訟鬪戰に於てみな寂靜なることを得。秘密主、若し佛頂の眞言を修行せん者成就を得ずんば、彼れ此の大明妃の眞言を以て相和して之を誦すべし、決定して大應驗ありて速疾に成就せん、若し未だ一二三の期限を経ずんば和し誦することを得ざれ、乃し第四遍に至りて悉地を求むるに成就することを得ずんば、然して後に此の大明妃の眞言を加して和し誦せよ、當さに速疾に驗を現じて成就を得べし、初め一二三四には加ふべからざる所なり、若し之を加ふれば則ち持明者を損せん、則ち前の印を用て二頭指を以て各の中指の背に拈せよ、是れ如來眉の印なり、一切如來説きたまふ、我も今演説す。

設ひ訶哩二合 底迦と 及び嚩薩蘇天と 秘密との大威徳 及び欲の天子等と



並びに及び持犁天との 是の如くの諸天の類あるも 若し是の印契を見ば 怖畏して馳走せん

何に況んや地居の者をや。

眞言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、<sup>一、引</sup>唵、<sup>二、引</sup>訖哩、<sup>三、合</sup>吽、<sup>四、引</sup>

<sup>二</sup>即ち云云 如樂口印言。

<sup>二</sup>即ち前の眉の印を以て二大指を開き立て、口の形の如くして中指を相去ること兩の鬘麥にせよ、常に此の口の印を結んで自の口の上に置き、眞言に曰く 曩莫三滿多

沒駄南、<sup>一、引</sup>唵、<sup>二、引</sup>訖哩

<sup>一、三、二、四、五</sup> 亂脫

此の明は大威徳あて 速疾に諸の業を作す<sup>一</sup> 若し常に口を加持すれば <sup>二</sup>成就を

修行する人

<sup>一、三、二、四</sup> 亂脫

<sup>四</sup>彼の<sup>一</sup>人語無礙ならん <sup>三</sup>三界の中を盡して 彼の<sup>二</sup>人常の言音に 美妙の音を顯現

し<sup>一</sup>

<sup>三</sup>口の疾病を患へじ <sup>二</sup>無量俱胝劫にも <sup>一</sup>自在と毗紐との天の 人の教令に伏せざるも

當に是の人の所に於ては 言を出さば皆な順伏せん <sup>六</sup>天と龍と健達との王 及

び餘の大威徳のもの

悉くみな調伏することを得ん 何に況んや諸の凡愚をや。

<sup>二</sup>右の膝云云 無能勝印言。

<sup>二</sup>右の膝を以て地に著け、左の膝を立て、左の手は引べて後に向へて搭つ勢を作し、右の手を以て心に當て、拳に爲りて、頭指を立て、期尅の勢を作し、身を陵て前に向へよ、名けて無能勝の大印と爲す。

能く一切の魔を摧き 能く諸の魔障を除く 大力の欲自在は 世間の魔軍の主なり

波旬は第二の名なり 亦た欲自在と名く 世天において大威徳あり 若し障難

を作さんと欲する時は

<sup>一、二、三、十</sup> 亂脫

無量俱胝の魔 彼に於て共に住す <sup>一</sup>尼連河に於て <sup>三</sup>無量俱胝の魔

種種の形狀を現せしときに當て <sup>二</sup>魔軍恐怖の形にして <sup>四</sup>我れ無上の智を證しき

世間の中に最勝なり

<sup>九、五、四</sup> 亂脫

梵も魔も及び沙門も 世の中には得る所なし <sup>五</sup>晨朝の時に當て 無上の句を得

證し

五彼の魔を壊せんが爲めの故に 種種の形を持つる者 當時我れ 此の明の大威力あるを宣説せしに

大師 佛の自稱なり。六八、七、十一 亂脱

六天女の形を變現して 大師の前に於て住して 暴惡の魔を摧壞しき 無量の種の形を持して

七此の中に眞言を説く。

曩莫三滿多沒駄南、引唵、引戸魯戸魯、三戰拏里、摩鉢倪、供以娑嚩二合 訶引復た次に秘密主 無能勝の大明は 等正覺の佛説きたまへり 行者身を護するが故に

一切の時に護すべし 大障礙の處に 鬼魅惡形の怖れあらんに於て 佛頂を成就せん者は

大力を以て能く加護せよ 常に己身を加持すれば 常に大きに加護することを得。

先づ云云 如來鑠訖底印言。

先づ身を端くし、結跏して勇健座に作れ、左の手を以て掌を仰けて齋の下の結跏の上に安し、右の手を舒べて掌を豎て、外に向へ、大指を以て無名指の甲の上を捻し、頭指屈して中指の背に在て相ひ著けざらしめよ、如來鑠訖底二合の印と名く。

一、三、二、四 亂脱

若し此の印を結ぶ者は 其の威力を奪はれず 今世及び佗世に 智者此の印を結べば

如來の力を獲得す 若し此の眞言を誦すれば 諸佛みな加持したまふ。

眞言に曰く 曩莫、三滿多、沒駄南、引唵、二尾惹曳、麼訶鑠訖底三合 訶引

四尾惹以你泮吒五莽譚黎泮娑嚩二合 訶引

三時に若し憶持すれば 輪王頂を修持するもの 速疾に悉地を得て 三界の中に無礙なり

前の印云云 如來齋印言。

前の印に准如して、右の手を覆せて左の手の上に在て、相ひ去ること一瓣麥の間にせよ、如來齋の印と名く。

此の諸佛の大力は 若し能く常に憶念して 明と共に而も相應すれば 腹の中の食消せずして

禪定に懶惰に 若しは寒熱と 小腹と及び兩の脇と 頭との痛及び諸の疾を患へんにも

多種の逼惱を除いて 常に身に疾なきことを獲ん。

即ち成就の眞言を説いて曰く 曩莫三滿多沒馱南一引唵二引質三引置四引置五引娑六引囉七引訶八引三  
是れ諸の如來の齋の 是れ則ち眞言印なり 種種の色と 照怡奇特の事を現じ  
諸の神通を示現せしむること 種種にして盡くることあることなけん。  
音釋

う作う答う羣う方う容うのう切う、秘蒲秘結秘の秘切秘、纏古纏猛纏の纏切纏、  
唵の唵切唵羣唵牛唵の名唵、唵振唵る唵なり。纏夢纏なり。

### 國譯菩提場所說一字頂輪王經卷第三終

### 國譯菩提場所說一字頂輪王經卷第四

唐特進試鴻臚卿三藏沙門大廣智不空 詔を奉じて譯す

#### 密印品第八之餘

(一)右手云云 如  
(二)來甲印言。如  
(三)如來甲の印  
(四)上の二卷の甲印  
(五)の印の處にて此印  
(六)に大功徳ありて結  
(七)ばざれば叶はずさ  
(八)いふは此印の事な  
(九)りし。功能は本文の  
(十)如し。

(一)酥二恐三く四は五是  
六れ七醋八の九字十か。

(一)右の手を以て大指を握て、拳に作て五處を加持せよ、(二)如來甲の印と名く。  
 一切の佛頂の中には 是の印大威徳あり 若し甲の印を離れぬれば 得る者堅  
 固ならず  
 人にして裸體なるが如く 亦た舍に人なきが如く 國に帝王なきが如く 林に  
 青草なきが如く  
 食に(三)酥鹽なきが如く 池に水あることなきが如く 梵志に韋陀なく 火祭に  
 酥なきが如く  
 車に御者なきが如く 是の如く修行者 若し甲冑の印を闕しぬれば 諸魔に使  
 を得爲れて

悉く皆な成就せず 謹慎して甲冑を結べば 諸魔陵逼せずして 速疾に悉地を得。

真言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、引唵、二部引入嚩<sub>二</sub>合<sub>三</sub>囉、呼引  
修行者此を以て 常に自身を加持すれば 譬へば王の陣に在て 甲を被て而も  
饒勇なるが如く

是の如く修行者 甲を被むること猶如し 王のごとし 三時に護身すべし  
能く一切の事を成す。

①前の甲云云  
如來頂髻印言。

①前の甲の印の如くして中指を舒べよ、則ち如來頂髻の大印と名く、能く一切の事を  
作す。真言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、引阿俱嚩<sub>二</sub>合<sub>三</sub>吒<sub>二</sub>牛音上、下<sub>三</sub>、二

②前頂云云 如  
來耳印言。

②前頂髻印に准じて、中指却て合せ直く頭指を豎て、左右の耳に置き、是れ如來耳印  
なり。

③於 和本に持  
に作る。

若し常に耳を加<sub>三</sub>於<sub>二</sub>於<sub>一</sub>し 印真言相應すれば 彼の人耳の病なきこと 乃至一百  
劫ならん。

真言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、引斛<sub>二</sub>引<sub>三</sub>迦<sub>二</sub>牛音

若し修行者ありて 儀を具して輪王を修すれば 彼の人天耳を獲て 言音最勝  
なることを得。

①左手云云 如  
來牙印言。

①左手を以て前の甲印の如くして、臂を豎て身に向へよ、是れ如來牙の大印なり、自  
の口の傍の牙の處に安せよ。

佛牙は大威徳あり 印と真言と相應すれば 修行者成就す。

真言に曰く 唵、引但佉<sub>二</sub>莫多、能瑟吒<sub>二</sub>嚩<sub>三</sub>、三合吽、呼泮、二合娑嚩<sub>二</sub>引<sub>三</sub> 訶<sub>三</sub>引

②前の甲冑の印に准じて、中指を虚にし臂を屈し、拳を垂れて下に向へよ、名けて授  
記の印と爲す。

一切の事を成辦することは 此の印を結ぶに由るが故なり 所有る過去の佛

未來の諸の如來

皆な悉く授記を與へたまふ 是の故に修行者 常に是の如くの印を結べば 大

威力を獲得す

彼の佛菩提に於て 常に授記を獲 彼の常に修行する者 當さに放逸ならずし

て

①前云云 授記  
印言。

此の授記の印を結ぶべし。

真言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、一引、二引、三引、特鑊トク二合ニ

大威徳成就して 惡人沮壞せず 一切の吉祥を具し 戒軌則あり精進あり

念を具し大勤勇にして 一切所生の處に 禁を堅し尸羅を具す。

前の甲冑の印に准じて、微し頭指を縮めて掌に在き、臂を豎て、上に向へよ、是れ

如來膊ウデの印なり、大威力あり、真言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、一引、二引、三引、阿囉訶アハ二合ニ 泮吒ハツ

娑嚩サハ二合ニ 訶カ三引三

即ち前の印、二の乳の間に安せよ、如來妹イモの印と名く、真言に曰く 曩莫三滿多沒

駄南、一引、二引、三引、誑クサ二合ニ 誑クサ二合ニ 誑クサ二合ニ

右手大指を以て中・無名・小指の甲の上を押して、頭指を直く豎て臂を引て高く豎て

よ、是れ如來幢の印なり、真言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、一引、二引、三引、羯吒カチ二合ニ

即ち前の幢の印を以て臂を垂れて下に向へよ、是れ如來臥の印なり、真言に曰く

曩莫三滿多沒駄南、一引、二引、三引、阿俱嚩アキハ二合ニ 吒チ二合ニ

前印に准じて臂を以て胸に横へよ、是れ如來行の印なり、真言に曰く 曩莫三滿多

(一) 前の甲云云  
如來膊印言。  
(二) 流志本には泮  
の字あり。

(三) 即ち云云 如  
來妹印言。

(四) 右の手云云  
如來幢印言。

(五) 即ち云云 如  
來臥印言。

(六) 前印云云 如  
來行印言。

(一) 此の印云云  
如來頭鈎印言。

(二) 右手云云 如  
來印言。  
(三) 如來脇 右の  
手不動の印ニ同  
なり。

(四) 右手云云 如  
來眼印言。  
(五) 如來眼 悲生  
眼の印なり。

(六) 即ち云云 如  
來光網印言。

(七) 右の手云云  
如來光網印言。

(八) 前の光網云云  
如來唇印言。

沒駄南、一引、二引、誑クサ上上 誑クサ三引三

此の印を以て頭の中に安せよ、是れ如來頭鈎の印なり、真言に曰く 唵オン一引、母囉ボラ駄ダ二合ニ 曩ナ你ニ娑嚩サハ二合ニ 訶カ三引三

右手の大指を以て無名・小指の甲の上を捻し、直く中指・頭指を豎てよ、是れ(三) 如來  
脇の印なり、真言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、一引、二引、三引、却ケツ三引三

右手の大指を以て頭指・小指の甲の上を押し、中指・無名指直く豎てよ、是れ(五) 如來  
眼の印なり、真言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、一引、二引、三引、鉢囉ハツラ二合ニ 悉シツ地ヂ羯カチ嚩ハ二合ニ 娑サ嚩ハ二合ニ 訶カ三引三

即ち前の眼の印を、微しく中指・無名指を屈せよ、是れ如來光網の印なり、真言に曰く  
曩莫三滿多沒駄南、一引、二引、三引、入嚩ニハ二合ニ 里リ尼ニ、娑サ嚩ハ二合ニ 訶カ三引三

右の手の大指を以て頭指の甲を押し、餘の三指豎て、微しき屈せよ、是れ如來光網  
の印なり、真言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、一引、二引、三引、四引、泮ハツ吒チ、三引、麼マ麼マ泮ハツ吒チ、娑サ嚩ハ二合ニ 訶カ四引四

前の光網の印に准じて、中指を申べて微しき屈せしめ、小指・無名は前に准せよ、是

(一) 右手云云 如來舌相印言。

(二) 左右云云 如來三摩地印言。

(三) 前云云 金剛熾心印言。

(四) 左手云云 馬陰藏印言。  
(五) 一 和水になし。

れ如來唇の印なり、眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引阿阿、二嚩嚩、三攝四

(一) 右手の大拇指を以て屈して掌中に入れ、餘の四指は並べ展べ、掌を仰けて前に向へよ、名けて如來舌相の印と爲す、眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引唵、二曩囉尼吽惹、三吽引泮吒、娑嚩二合 訶引

(二) 左右の二手を以て掌を仰け、右手を以て左手の上を押し齎下に安せよ、是れ如來三摩地の印なり、眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引唵、二阿底舍也、尾羯囉二合 彌娑嚩二合 訶引

(三) 前の定印に准して安して心に當てよ、是れ一切如來の過去・未來・現在の金剛熾心の印なり、眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引唵、二入嚩二合 囉、嚩日囉、二合 緊吒鄰三合 祖四

金剛手、此を金剛熾一切如來三摩地明王と名く、能く遠越するものなし、一切の天・龍・藥叉・乾闥婆・地位を得る菩薩も、亦た能く遠越することなし、何に況んや餘の有情の大威徳の者をや。

(四) 左手を以て齎の下に展べ覆せ、(五) 一 右の手を展べ仰けて左手の背を押せ、如來馬陰

(一) 右手云云 如來坐處印言、右の手の甲を以て四指の甲を一處に聚めて見えざる様にす、中指の甲許り指を屈して願す、以下母となす。  
(二) 此の云云 如來三摩地印言、同なり。  
(三) 此の云云 佛慈三摩地印言、佛慈三摩地の印言と

藏の密印と名く、眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引唵努吒努吒、二娑普二合 吒、娑普二合 吒、三尾捺囉二合 跋囉、四鉢囉二合 末娜囉五親娜囉、六頻娜囉、七吽引泮吒娑嚩二合 訶引

(一) 右手を以て拳に作て甲をして現せざらしむ、唯し中指の甲を出して現せしむるを如來坐處の印と名く、眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引唵、二都佉左娑嚩二合 訶引

(二) 此の前の印に准じて、頭指の甲を露はし出して中指の甲を藏せよ、是を如來三摩地の印と名く、眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引唵、二都佉左娑嚩二合 訶引

(三) 此の前の印に准じて、頭指の甲を藏して、無名指の甲を露はし出す、是を佛慈三摩地の印と名く。  
能く大慈の心を生ず 慈定に住する行者は 彼の人を護持するが故に 是の故に如來說きたまふ

此の大眞言王は 諸の有情を愍念す 師子と賊との怖の等 鬪諍逼迫の中  
鬪戰するの大なる怖あらんに 佛慈の明を誦すべし。

眞言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、摩訶每底哩耶、三合 尾賀哩南、引 沒駄每底囉、二合 曩摩寫銘、二三母但波二合 寧、婆耶婆雞、三迦囉奚、尾嚩囉二合 奚、制嚩、四捨咄囉 二合 難者、波囉惹曳也、五耶摩囉末藍二合 婆摩喃、六婆賽爾也二合 麼囉囉賀喃、七多 娜合根囉帶多二合 以使也二合 銘八尾滄囉囉囉二合 婆地劍九也娜麼二合 末藍、二合 薩 囉沒駄喃、十囉曷二合 單引者比也、娜麼末藍、二合 薩達麼寫者、誦逝曩、十二薩嚩那 勢銘、播引波劍、十三但你也二合 佗、引十 俱蒸偃爾、十五俱蒸偃爾、十六盡俱哩、十七 莽俱哩、十八摩喇制、波囉曩十九 捨囉里二十 囉乞灑二合 囉乞灑二合 鎗、二十 俱摩哩廿 室哩二合 摩哩寧、三十 娑嚩引 訶引二 此れ是の佛慈の印は 是れ諸佛の自體なり 若し能く常に憶念して 行者善業 を作せば 一切の難調の者の 害し障難を作さんと欲するもの 疾く慈心を起すは 此の 明の威力に由ればなり

二〇流志本には野の字あり。

二〇即ち云云 來無垢印言。 如

二〇即ち前印を用て頭・中・無名の三指の甲を隠して、小指の甲を露はし出す、是れ如來無垢の印なり、眞言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、引 咩、二母引囉囉寧、三戸魯、四呼

泮吒、娑嚩引 訶引 行者食を喫する時 此の明を以て加持して 先づ誦して然して後に食せよ 身 淨にして火の力盛なり 諸の罪悉くみな淨まること 獲得すること疑なし 食時に於て所有る 起る所の諸の障難 悉くみな而も遺除するは 佛の無垢の印を以てなり。

二〇此の云云 來甘露印言。 如

二〇此の前の印に准じて、其の小指の甲を隠して、大指の甲を露はし出すを、名けて如來甘露の印と爲す、此の印を結ぶに由るが故に、能く明解脫を獲。如來甘露眞言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、引 唵、二印偃寧部多寧、娑嚩引 訶引 二手を以て各の大拇指を以て掌に入れ、緊く握りて拳に作り、二拳を以て相合せよ、如來師子吼の印と名く。

二〇二手如來 師子吼印言。

種種の奇特の事 意に皆な作さんと求むること 頂輪王を持するに由て 能く 一切を成辦す。

眞言に曰く 曩莫三滿多沒駄南、引 唵、二劫比羅惹置羅、三呼四泮吒、娑嚩引 訶引

(一) 二手云云 如來吉祥印言。

(二) 即ち云云 如來吉慶印言、又た蓮花と名く。

(一) 二手を以て虚心合掌にして、十指右、左を押し、互相に交へよ、名けて吉祥印と爲す、娑嚩二合 娑底二合 迦如來吉祥の印と名く、能く大人の相を成す、眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引 慈 重呼、二

(二) 即ち此の前の印を以て 悉く十指を開いて 小指大指合して 餘の指は皆な微しき屈す

是の印蓮華の如くなれば 名けて蓮華印と爲す 如來吉慶の印なり 福德義利を獲

王の福と及び餘の 地居の有情の福とを獲 大吉祥を成得す 行者疑ふべからず。

眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引 唵、引 蘇末略 合 撼彌 三 擲乞瑟銘、三合 娑嚩二合 訶引

福を成就し虚しからず 大王の福德を獲。

(三) 前印云云 般若波羅蜜印言。

(一) 前印に准じて未敷蓮華の如くし、結んで心に當つべし、般若波羅蜜の印と名く。此の明は大威徳あり 是れ一切の佛の母なり 常に諸佛の道を説きたまふ 過

現及び未來の

一切諸佛の母なり 是の印は大威力あり。

眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引 唵、引 輪嚕底、三 娑蜜哩二合 底、四 尾惹曳、五 娑嚩二合 訶引

金剛手、此の般若波羅蜜の明は、過去・未來・現在の一切の佛・菩薩・辟支・聲聞一切悉くみな般若波羅蜜を修して、佛世尊と成ることを得、みな般若波羅蜜より生ず、みな般若波羅蜜を修して悉くみな大菩提身を證得す。

(一) 此の前の印に准じて、大指を雙べ屈して掌に入れよ、是を如來大悲の印と名く。眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引 唵、引 怛嚩二合 儼寧娑嚩引 訶三

(二) 即ち前の印を以て各の大指を屈して掌に入れ、各の小指の根の下に挂へ著けしめよ、是を如來膝の印と名く、眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引 唵、引 娜部二合 儼寧鉢囉二合 捺跛跢二合 娑嚩二合 訶三

(三) 前の云云 如來膝印言。

(一) 前の膝印に准じて、二大指を以て各の無名指の根を挂へよ、是を如來踝の印と名く。眞言に曰く 曩莫三滿多沒馱南、引 阿、二 怛嚩二合 怛嚩二合 盪怛嚩、二合 嚩日羅二合



前云云 如來  
足印言。

母乞史二合 尼、娑嚩引 訶引

前二の蹠の印に准じて、二大指を以て中指の根の下に拄へよ、如來足の印と名く、眞言に曰く、曇莫三滿多沒駄南、引唵、引嚩日囉二合 商俱囉、部史帝、三娜囉、入嚩合 囉、呼、引娑嚩引 訶引

爾の時に世尊、金剛手祕密主に告げて言はく、金剛手此等の大印は一切如來の、身分より流出せる大丈夫相の莊嚴なり、善男子、是の印等は一切如來の所説なり、一一の印に百千俱胝の印を以て眷屬とす、みな如來の支分より生ず、後の末法劣慧の小有情に於ては、盡く其の福利を知ること能はず、伽佉を説いて曰く

若し此の明王を成せんとするものあらん 彼を利益せんがための故に 我今而も略して説く 汝當さに受持して

廣く流布することを得せしむべし 是の印を大印と名く 大威神力あり 末法の有情をして

善品を修持せしめんが故に 若し善男女等 常に能く此の印を結んで 自身を加持すれば

三、三、三、三 亂脫

大眞言 輪王佛頂等を成就す 彼れ無量の福を獲 而も百千種を獲

一切の罪みな滅す 一切の佛菩薩 憐愍してみな愛念したまふ 常に宿命智を得

諸根みな圓具す 心も亦た誤失せず 一切の諸佛等 悉くみな攝受したまふ 壽命長遠なることを得 諸の疾病を遠離し 衆生の明と作らしめ 諸の惡趣より拔濟し

聰慧にして精進を具し 威徳わて常に勤勇に 當さに勝族に生じて 諸の巧伎藝を具し

能く諸の疾病を療すべし 我今而も略して説く 一切の佛加持して 即ち大丈夫と成る

若し常に大印を持せば 常に當さに自身に於て 名を稱して而も受持すべし 諸の障難を遠離し

諸の罪みな消滅す 諸の佛頂みな成じて 如來の身を證得す。

金剛手、此は一切如來族の眞實大印の、印相を結ぶ法なり、佛頂部の有情を利益せん

此の問に流志本此の問に大法壇品あり、第八品に當る、而五卷の中より凡そ二十七葉、又た此品を供香成就品と名く。

として、我今釋迦牟尼宣説す。(二) 諸成就法品第九

爾の時に釋迦牟尼佛、大衆を觀察して未來世の有情のために、金剛手秘密主に告げて言はく、秘密主當來後世の懶惰懈怠にして善法に精進せず、餘暇なき有情貪愛染著して、廣大の願に於て成就を求むること能はざる、彼の有情を愍念し利益するが故に、或は婆羅門にして勝族に生じ、或は刹利族姓の者清信あり、及び菩提心を發さん者、愛樂して眞言行を修せん者、是の如き等の有情を利益せんとして、我れ爲めに略して眞言明王の佛頂轉輪王の功德を説かん、能く一切の天・龍・藥叉・阿蘇羅を摧き、有情を調伏して亦た能く死せしめ枯さしめ驅擯せしめ、憎惡せしめ、禁止せしめ壞せしめ、摧かしめん、一切の佛・菩薩の稱讚したまふ所、大威徳神力あて、無比等の三摩地の修行を作さしめ、一切の魔道を超越して、天中天の佛の色形像を示現せしむ、無量劫に於ても此の大教王を説くこと能はず、無量百俱胝劫にも其の功德の邊際を盡すこと能はず、我今少分を説く、金剛手聽け、善く聽け、極めて善く聽け、極めて善く作意せよ。爾の時に如來、伽佉を説いて曰く

(一) 誦せよ。印を結び之を誦す。  
(二) 帳。傘蓋なり。流志の本には慈底延華を取て像の頂上に當て繫て傘華と爲す。  
(三) 毗舍佉云云。四月十五日なり。

我れ異の方便を説かん 一切の佛の所説なり 諸の有情を利益す 百多無量の是の諸の如來の所に於ても 亦た是の如くの説を作したまひき。  
若し人ありて纒かに此の眞言王を誦すれば、一切の怖畏を離る、若し能く常に持誦すれば一切の諸魔悉くみな遠離す、一切の罪、一切の惡作みな消滅することを得、上の所説の畫像の如き、隨て一の像の前に於て、三時に深浴し三時に衣を換へ、三時に儀軌を以て相應して二十五洛又徧を誦せよ、徧終後、白月の一日より起首して、日々に一千八徧を誦し乃し月の圓滿するに至れ、蘇摩那華を取て結んで以て(二)帳とし、檀香を以て三肘の曼荼羅を塗れ、種種の塗香・華・燒香・飲食を以てし、酥を用て以て燈と爲して一千八盞を然せ、(三)毗舍佉の自分の月圓滿する日に當て金剛跏を結び念誦せよ、乃し四種の相を現す、所謂る雲雷の聲あると、道場の中の旛華動くと、佛像より光明を出すと、佛像動搖するとなり、是の如くの相を見ば、中に於て所成就の物則ち成就することを得ん、若し俱胝徧を誦すれば則ち先行を成す、二俱胝徧を誦すれば大先行を成す、三俱胝徧を誦すれば能く一切の事を成辦す、四俱胝徧を誦すれば一切の龍・藥叉・乾闥婆・阿蘇羅・藥路茶・緊那羅・摩呼羅伽等、みな攝伏することを得て大悉

(二) 一磔量 二尺  
なり、周尺の故に  
改む、唐尺の一尺  
六寸なり。

地を成す、恒河の側に於て、或は海岸に於て如來の(一)一磔量の窳堵波を作り、一一の窳堵波の前に於て香華を以て供養して、七俱胝徧を誦せよ、則ち末後に塔より光を放ち、光を放ち已て其の光行者の身に入て隠没す、即ち刹那の頃に於て、一切世界に於て一有情として、藥叉等も彼れと等しき者あることなけん。

帝釋も尙は速かに來らん 梵天と眷屬と 及び樂變化天と 及び餘の化自在と  
淨居と究竟天と 並に大威徳者と 刹那に而も集來して 彼の成就の人に於て  
すべし

所有る諸の天龍を 彼化して調伏せしめ 彼の天において刹那の頃に 悉く種  
種の華を雨らし

乃至無間獄までに 悉くみな清涼なることを得ん。

爾の時に、(二)修行者刹那の頃に、(三)如來の制底、光を放ち後に、(四)自身大威徳を成じ大神  
通を成じて、天中に於て威徳光明あて融金の色の如し、顔貌二八の童子の相となて一  
切如來に攝受せられ、大智慧を得、(五)隨意の身通意の如く、迅疾にして風の如く、身  
光諸餘の天衆を映奪せん、若し彼の成就者を見るものあらん、或は成就者彼の人を見

一、三、二、四 亂脱

(二) 隨意云云 迅  
速神通を身如意  
通とも名くるは此  
の意なり。

んに、悉くみな彼と共に空に騰りて大持明仙王と作り、無量百千の持明を以て眷屬と  
し、無量の世界に遊歴し、身光を以て一切成就者を照曜す、纔かに思惟するに一切悉く  
みな成辨し、帝釋の處に所至(六)ば帝釋半座を分ち與へ、彼と等しきものあることなく、  
顔貌勇健に智慧威徳あて、等同なる者あることなけん、此の因縁を以て菩薩の善巧方  
便を獲得して有情を調伏し、善巧を獲得して無量大劫に住して、無量の佛の、世に出  
現したまふを見たてまつらん。

中に於て佛是の言をなしたまふ 彼れ大いに不思議なり 人天みな供養すべし

身の精進を獲得す

智慧も亦た復た然なり 神通をもて有情を救ひ 佛輪王に等同にして 勝眞言

を修持すれば

諸の貪悉く除滅して 人中の尊を獲得す。

秘密主、此の修行方便は(七)如來有しき(八)寶火と名けたてまつる、曾し人身たりし時及  
び寶幢如來、光明自在王如來、是の如き等の無量の如來みな成就を得たまへり、觀自  
在菩薩・曼殊室利菩薩・是の如く等の無量の菩薩、人身たりしとき獲得し成就す、(九)大

(一) 流志本に昔の  
一字あり。  
(二) 寶火 流志本  
に寶輪佛といふ。  
八十九、二六、五七、四三、  
八十九、二六、五七、四三、  
亂脱

菩提を求むる者、<sup>三</sup>祕密主、汝が人身たりし時、<sup>六</sup>曾て此の佛眼の大明を修して、<sup>五</sup>難行苦行を以てし、大精進を以て<sup>七</sup>成就を獲得せしが如く、<sup>四</sup>世間を感念するが故に、<sup>三</sup>金剛幢如來世に出興して、正法末の時、大怖畏の時に、<sup>八</sup>是の如く此の眞言王は、<sup>十</sup>無上菩提に於て堅固に決定する者成就することを得べし、我今また餘の成就の事業を説かん、隨て一の像を取て前<sup>一</sup>にして十洛叉徧を誦せよ、念誦終らん時、滿月に於て一日・一夜食はず、白芥子を以て水中に置いて、一千八徧を誦して十方に散灑せよ、則ち曼荼羅界を結するに成る、像の前に於て種種の食飲を以て廣大に供養し、荷葉の上に於て牛黄或は雄黄を置きて結跏趺坐し、身を護り藥を加持して念誦し、乃し三相成就に至れ、若し暖相現すれば一切衆生みな調伏歸敬することを得、烟相現すれば安但但那成就す、若し光相現すれば取て身上に塗れ、身初日暉の如く、年二八の相にして髮卷旋して<sup>九</sup>蠶の如く紺青色にして、無量の持明仙圍遶し即ち大持明仙と成て、住壽一大劫ならん。<sup>二</sup>神通月の白分に三時に澡洗し三時に衣を換へ、儀軌に依て三時に發露懺悔し、隨喜し勸請し發願して廻向せよ、特別に一千八徧を誦せよ、乃し月の圓滿の夜に至て一日一夜食はず、<sup>三</sup>別ち苾芻毗奈耶の所説の應量を取りて、鉢・袈裟・錫杖を修造して、隨て一事

<sup>二</sup>神通云云 已下別法なり。

<sup>三</sup>別 高本に則に作る。

<sup>二</sup>和 和本に塵に作る。

<sup>一</sup>三三三 亂脫

<sup>三</sup>鼓明「あくるころをひ一の意にして、明相現する時、時の鼓を打つ時なり。

を取れ、一千三波多護摩し、像の前に於て廣大に種種に供養して所成就の物を取り、壇の中に置いて其の物を護して念誦し、乃し光を出すに至れ、若し是れ袈裟及び僧伽梨衣ならば即ち被、鉢及び錫杖をば即ち手に持せよ、便即ち虚空に飛騰して持明仙を成す、餘の佛刹土に遊往して能く大變化を作し、住壽一大劫ならん、又た如來の碟の量を以て窻堵波十萬を造れ、一の劔の<sup>二</sup>瑕翳なき者を取て、隨て一像を取て前にして、神通月の白分に於て、八日或は十四日に於て三波多護摩を作し、劔を加持して像の前に於て廣大に供養せよ、茅薦に坐して、<sup>三</sup>其の劔を、<sup>二</sup>右手を以て持して<sup>一</sup>念誦し、乃し空中に聲を出して是の言を作して成就すといふに至れ、然して後に其の像光を放ちて、其の光行者を照曜せん、然して後<sup>三</sup>鼓明に即ち阿蘇羅女來て修行者を圍繞して以て眷屬とならん、即ち虚空に飛騰して大持明王仙と成て、能く種種の形狀を現じ、往來自在にして能く餘の世界を觀るに礙りなく、住壽一大劫ならん。又た高山の頂上に於て佛像を安し、根莖果を喫して二十一萬徧を誦し、然して後に補沙鐵を以て輪或は鉢置<sup>一</sup>を爲れ、諸根圓具の匠をして造らしむ、使り已んば則ち阿蘇羅の宮に往き、宮門に於て佛像を安置し、助伴と<sup>二</sup>并に像の前に對して三時に法陀羅木を燒いて以て火を

然し、茅薦の上に坐して右手を以て輪を持して芥子の油を木槌の葉に和して護摩すること十萬遍せよ、一切の阿蘇羅の關鍵破壊せん。又た十萬遍を誦して護摩せよ、即ち阿蘇羅宮の中に火然て熾盛ならん、第三に十萬遍を誦せば、一切の阿蘇羅女窟の外に出で、修行者に祈求めん、勤勇丈夫我等をして何をかなさしむる、此の宮中に入て微妙の欲樂を受用したまへと、諸の助伴と并に同じく入れ、餘の三昧耶の壇に入らざる者をば入らしむること莫れ、忽然として輒ち入らば、彼此損害して死なん、是の故に彼の人三昧耶を知らず、宮中に入りなば劔を成就し輪を成就し、或は餘の成就物を求めよ、彼是の物を得て大阿蘇羅持明仙王と爲て、所有る阿蘇羅宮の中の成就物において主となり、其の持明仙は無量の阿蘇羅女を以て眷屬と爲して、此の世界に遊歴して、大阿蘇羅の身を成じ、一切の阿蘇羅を管屬し、大阿蘇羅王の禮敬を得、彼能く大阿蘇羅の種種の身を化し、住壽一大劫にして、隨ひ入る所の者も皆な壽一劫ならん、其の成就の人纒かに憶念して、輪王の眞言を誦すれば、其那羅延の輪も破壊すべし、其の輪故の如くなることを得んと欲はば、意に隨て成ずることを得ん、迦葉波佛等覺の教法の時に於て、持輪明王と名くるものありと、輪成就することを得て輪を持

して而も出づ、此の因縁を以て持輪明王と名く、今現に世間に在て深く淨信を生じて佛の優婆塞迦と爲る。爾の時に世尊伽佉を説いて曰く

又た餘の成就を説かん 一先佛の所説なり 二我れ往昔の時に於て 曾て商估と作り

五勤苦大精進して 微妙の成就を作せり 二我今而も宣説す 三我が名を路摩となす  
六成就の中に王と爲りき 我れ昔本生の時 七諸の苾芻の爲めに説きき 七有情を感念するが故に。

又た前の軌儀の如く、大河の岸の側に於て、或は大海の邊に於て、一千八の窠塔波を作り、如來の一礫量の大きにして、此の塔前に對し、一一の塔の前に於て香華を以て供養して、眞言を誦すること十萬三千遍せよ。

塔を作るの時に當て 吉相而も現ずることを得ん 補沙鐵を以て輪を作れ 端  
殿の匠をして造らしめよ

縁にして瑕穢なく 六幅にして短礫の量にせよ 五淨の中に置いて 三波多護摩せよ

（二）足和高本には通に作る。

神通月の自分において 戒行の者を善伴として 修すべし劔の法の如くして  
 乃し光燭を出すに至れ  
 吉祥持明者 即ち諸の嚴具を成じ 大身にして遊ぶこと自在に 威徳神（二）足を具し  
 善伴の大丈夫と 諸の世界に遊歴し 大力にして住すること一劫 衆生の導師と作らん  
 又た大成就の法を説かん、先行の法を作すべし、大河の側或は海岸に於て、佛像を置いて前に對して俱胝徧を誦し、然して後に十萬六千窠塔波を作れ、則ち成就に入るべし、復た伽佉を説いて曰く  
 日及び宿を擇ばず 亦た齋戒を限らず 壞せざる攝縛を取り 迷怛囉を成就し淨洗して 華冠及び衣服を嚴飾し 儀に依て悉地を求めよ 彼の攝囉即ち起たらん  
 怖ることなくして儀軌に依れ 善伴極めて作意せよ 善と不善とを問ふべし  
 長年と水銀を伏すと

一、三、二、四 亂脱

貴位と隱形の法との 一切の諸の方便を 問ふ所みな指示せん 念誦して功夫を  
 輪王大力の明に極めよ 則ち奉教使と爲て 能く諸の悉地を與へん 奉教既に成じ已り  
 三諸の悉地を獲得せん 二常に左右に在て 大力にして遊行し 或は彼の口中に於て  
 當さに細鐵末を置くべし 則便ち其の舌を吐かん 漸く長うして青蓮の如くならんとき 利刀を以て割れ  
 修行者慇懃にせよ 則ち劔持明を成せん 身色初日の暉の如くにして 則ち須彌峰に往き  
 伴と并に大力の者とならん 天衆悉くみな怖れて、驚懼して心忙然として  
 圍遶して眷屬と作らん  
 帝釋半座を與へ 大威徳の（二）耳の如し 六十千俱胝をもて 而も爲めに眷屬と作り

（二）耳身の字か。

彼の衆に於て主とならん 彼れは皆な大驍勇に 大威あり大熾盛なり 大眷屬あつて奇特なり

是の如く等の類の 威徳の諸の天子 行く處に常に圍繞して 威力大王の如く 則ち千の刹せきに往き 大神通力を以て 則ち千の彌盧を動し 及び俱胝の山 並に千の瞻部洲をも動し 及び百の天宮を動し 一切動搖せしめ 光を以て悉く

諸の地獄の中を照曜し 大神通力を以て 諸の飲食を施與し 微妙の智を獲得せしめん

威徳は天王の如く 身を嚴り吉祥を具し 天女みな圍遶し 微妙の身にして大威あり

身色青蓮の如く 刹那に悉く 無量の諸の世界に遊歴し 當さに住すること一千劫にして

常に諸佛を供養したてまつるべし 劫火も焼くこと能はず 並に諸の大眷屬も 則ち餘の世界に往かん

是の如く等種類の 功徳を以て莊嚴して 彼則ち菩薩と成て 諸の有情を救濟せん

又た持誦の人 倍々加して念誦して 窰塔波を作るべし 十萬有六千にして 如來の肘量に准せよ 攝嚙の口中に於て 細寶糝を置いて 無間に而も念誦すべし

當さに即ち舌の上に於て 眞多摩尼の 熾盛にして大威徳あるを現すべし 慇懃に加護を作して

則ち奇特の寶を取れ 此の寶を得るに由るが故に 則ち寶持明を成じて 自在に大王と爲り

執劍持明仙 常に彼の人を衛護せん 又た口中に於て 乳糜を置け酥を和すべし

起たんと欲ひて而も吐き出さん 行者雜亂せず 受け取て瓦器と 或は銀と熟銅との器に置き

伴と共に加護して 伴に與へて之を食せしめよ 則ち大威徳を成じて 住壽一

二〇象氣か。

大劫にして  
則ち持明仙と成らん 或は手を口に安して 行者而も念誦せよ 口より香二〇象  
を出す

行者拳に作りて 前の如く成就を求むべし 若し暖相現することを得ば 拳を  
以て諸の人に擬せよ

有情及び無情 悉くみな愛敬することを得ん 拳を以てすること疑ふべからず  
或は是れ口中に

若し火を見ることを得べし 是れ彼の修行者を 名けて拳持明とす 次到大成  
就を説かん

則ち蓮華の池に往いて 先行の法を作すべし 佛像を壁に懸はつて 行者心を亂さ  
す

大福の爲めの故に修せよ 心に三懐き二常に四捨施し 蓮華を酪と蜜とに搗まし  
及及び酥等に搗して

護摩すること五洛又せば 是の像の眼手動かん 當さに知るべし成就を得と

一、三、二、四 亂脱

即ち邑主と作爲て  
一切の事を遠離せん 護摩二〇十萬徧せば 則ち三大福人とならん 護すること

二〇十萬徧 流志  
三本に一千萬に作る  
三大福人 流志  
三本に大難鉢底三志  
三いふ、持明仙の主  
三か、  
三志本に二十一萬、流  
三志本に二十萬といふ

三二十一萬せば 諸地の囉惹アラシヤと爲て 正法を説いて人を度し 常に樂わがつて捨施せん 倍加ま而も持  
誦せよ

輪王大威徳となて 一切の業を成辨せんこと 決定して疑を生ずること勿れ  
我今而も略して

輪王成就法を説く 古往ミシ已に成就せるは 一切の諸の佛子 聖曼殊室利  
得大勢菩薩 虚空庫菩薩なり 我も亦た此の明を持し 生死の怖を離るゝ事を得

善友に遇ふことを得て 諸の成就を獲得す 此の中には是の説を作す 佛頂の勝  
眞言を

當來に成就せん者は 所有る三界の中に 彼れと等しく 過ぎたるものあるこ  
となく色相威力あり

佛の如く、三世間に於て 二頂眞言を成就するものは 四過ぐることを得る者あること

一、三、二、四 亂脱



如來 釋迦如來

なし 先きに成就の法を説くが如し  
 (一) 如來勝經の中の 所有の諸の印契を 授與したまふことは世に於て尊として  
 眞言王を成せしめんが爲なり  
 是の印は與に等しきものなし 大力大威徳あり 所説の成就の法 希有にして  
 大奇特なり  
 所有る十自在 十力子の所説なり 若し此と相應すれば 能く帝釋をも壞す  
 何に況んや餘の有情をや 彼の難調伏のために 而も種種の法を作す 是の如  
 く等の種類において  
 如來成就を説く 此の教王の儀を以て 修習して悉地を求めば 成せざる者を  
 も成せしめん  
 何に況んや成就を求めんをや 以此の教王の中に 一切の法を攝入す 諸佛の  
 法眼の中に  
 説いて最も殊勝と爲す。

爾の時に世尊釋迦牟尼如來、復た一切の大衆を觀じたまひ、伽佉の句を以て金剛手に

諸仙 諸佛を指す

亂説

亂説

因門の字か。

告げて言はく

先佛(一)諸仙と寶髻との説を 是の契經に於て盡く警覺す

娜囉彌拏と攝囉羅と 凍譏と摩證伽との明とを

少分を以て彼の境界の教を盡す 此れ正しく三昧耶を以て教ふるには非ず

我れ染衣の爲めに而も 彼の愚昧及び多聞

慳恪と曠志との種種の類と 諸の眞言の諸の教法に於ては

邪見不平の諸の有情とに 世間・出世の人に宜説するが故に

多分此の世間の者に於て 聰哲にして財に置しきの人類は

末法において覺道を求むるに障りを作す 是の故に三昧耶に相應して

加行し修習して成就を求むべし 尙ほ夢中に於ても塵染なかるべし

先づ眞言三曼耶 曼荼羅の法等の差別を知らば

然して後に眞言律儀の中に 身口意の(二)因而も相應せよ

祕密眞言の教を設け説くことは 瑜伽觀行を假て成するに仍てなり

是の佛頂を常に修習すべし 眞言教法の成就の中の

眞言と諸の鑛と地中の財と 所有る諸地の方所と  
 諸餘の所有る占と算との論と 王法理論と及び書と畫と  
 醫方と工巧と是の如く等は 一切みな是れ世尊の説なり  
 有情を調伏せんとして而も示現したまふ 諸佛此の中に是の説を作して  
 悉地の三種を而も分別したまふ 本來清淨なり眞言の法  
 儀軌と印契とを獲得せよ 誰か一切に於て憎嫉を起し  
 眞言の句義も悉くみななしといふて 憎嫉すれば諸の障難を感招す  
 文字に著すれば心猶豫す 彼れ眞言に多の分別を作す  
 眞言に著し枝葉に縁るものには 彼に<sup>(二)</sup>惡律儀を與ふべからず  
 旃陀羅に於て説くべからず 彼等の成就せず  
 惡人に惡律儀を授與すれば 法則ち成せずして己身を壞す  
 是の故に彼に於ては慎んで説くこと莫れ 貪慾に纏染するは必ず成せず  
 彼常に忽遽なるは成ずるを得ず 事に於て忽遽にして審慮なければ  
 云何んが成就して有情を救はん 阿蘭若及び山藪に住すとも

<sup>(一)</sup>惡律儀 調伏  
 の法なり此の法  
 をば執著強き放逸  
 懈怠等の人には與  
 ふべからず

一、三、二、四 亂脱

二、一、一、三 亂脱

五塵交雜せば必ず成せず 當さに淨念に住すべし心流散すれば  
 彼等の行者必ず成せず 是の故に<sup>(一)</sup>心をまさ<sup>(二)</sup>に而も<sup>(三)</sup>制伏すべし  
 三種の謗毀は如來說いて 法を求めん<sup>(一)</sup>佗世<sup>(三)</sup>の有情のためにしたまふ  
 法に住するの人は理と相應せよ 心に三種の謗毀を作す者は  
 世間は悉く無なりと云ふて是の説を作す 自性は而も去亦た不去なり  
 自性若し眞言王を成せば 一切悉くみな何んぞ成せずらん  
 是の故に世間に二論あり 精進すれば共に同じく福の因に由る  
 是の故に誹謗すべからず 世間は有なり無なりと是の思を作せ  
 聖天種種軌則を設けたまふことは 世に住して有情を愍念するが故なり  
 無知にして性劣なるものは過に染せらる 我れ下悉地を獲得すと説く  
 一切の諸天をば供養すべし 禮を致すべからざることは我先きに説きつ  
 是の故に毀謗すべからず 亦た譏嫌を起すべからず  
 無量劫の中にも 眞言最勝無比の行をば説くこと能はず  
 我れ三部の儀の次第を説く 所説の教の中に種類多し

次第を作して而も 眞言教心輪王の法を修行すべし。

世成就品第十

(一) 世成就品 和  
本は已下を第五卷  
と爲す。但し他の  
和卷には今と同じ  
く卷を分つ。  
(二) 爾の時云云  
至極大衆の意なり  
如來華嚴を説き給  
ふ時、十方恒沙の  
世界の佛菩薩諸華  
嚴を説き給ふ如  
意なり。佛道同此の

一、三、二、四 亂脫  
(三) 並印の字が。

爾の時に釋迦牟尼如來、一切眞言教照曜入不可思議佛境界力遊戯三摩地に入りたまふ、是の三摩地に入りたまふに由て、恒河沙數の佛世界の諸佛菩薩も亦た是の三摩地に入る。爾の時に金剛手、釋迦牟尼如來應等正覺の、是の三摩地に入りたまふを見て、佛を遶ること七帀して、佛の前に於て金剛杵を持して、目を瞬かす佛世尊を觀たてまつる、爾の時に世尊、三摩地より起ちたまひ、及び彼の一切の佛も亦た定より出でたまふ、爾の時に釋迦牟尼佛、定より起ち已て金剛手祕密主に告げて言はく、汝祕密主汝聽け、此の大教は一切如來の宣説したまふ所なり、五佛頂王、三普通にして説く、能く大奇特を作すこと微妙なり、略説して廣せず、(三) 並に眞言、若し修行を成就する者あらんに、彼の人次第に教の如くにして成就を得ん、世尊是の説を作したまふ、金剛手先づまさにな一切佛頂王普通眞言句殊勝三摩地の眞言身を説く。我れ奉請の眞言を説いて曰はん。曩謨薄誑嚩觀、瑟尼二合 沙也、一翳醯咽、薄誑挽、二達磨囉惹、三鉢囉二合 底掣、度麼遏囉伽、二合 嚩駄、五補澀波、二合 度波、七末隣左、給者毗、八囉乞灑、二合 鉢囉

(二) 印も亦下に説  
けり、三遍す。

(三) 口に云く、翳  
也、四の句を除いて  
ふ、三七遍。

二合 底賀多、十麼囉波羅二合 訖囉二合 麼也、十一 娑嚩二合 訶引十

此は是れ普通迎請の眞言なり、闕伽の中に於て白華を置いて迎請すべし。次に香等(二) 眞言に曰く 曩謨薄誑嚩觀、瑟尼二合 沙也、一伊給、二嚩淡、三蒲澀甘、補甘の切、度甘、上、五 末臨、六 你半者、七鉢囉二合 底車、八賀囉賀囉、九薩嚩沒駄、十地瑟恥合誦、十一 達磨囉引惹、引 鉢囉二合 底賀多也、十三 娑嚩二合 訶引十

○迎請火天の眞言に曰く 曩謨婆誑嚩觀、瑟尼二合 沙也、一 翳醯咽、帝儒摩里寧、引銀曩二合 曳、娑嚩二合 訶引 若し火天を發遣するには也咽也咽の句を加ふ。

○辦事の眞言に曰く 曩謨薄誑嚩觀、瑟尼二合 沙也、一 唵吒嚩二合 滿駄、二 娑嚩二合 訶引

此の眞言は一切の事業を作す時、用て護身すべし、是の大眞言は大義利を作す、亦た一切佛頂の心眞言と名く。

○摧壞の眞言に曰く 曩謨薄誑嚩觀、瑟尼二合 沙也、一 唵、引 微枳囉拏、二合 度曩度曩度引三 此を摧壞大明王佛頂の眞言と名く、一切の毗那也迦を除かんがためなり、若し侵惱せられん時は、此の眞言を以て水を灌頂して頂に灌げ、亦た用て身を護し方隅

界を結する一切事業の處に用ふべし。

○摧毀佛頂の眞言に曰く 曩謨薄誨嚩視、瑟尼二合 沙也、一薩嚩尾近曩、二合 尾特網  
二合 娑曩迦囉也、二吒嚩二合 吒也、三娑嚩引 訶引

此の眞言を以て難調の惡人において治罰を作し兼ねて助伴を護れ、方隅を守る者なり  
、三是の如く等の大眞言を以て、三輪王の曼荼羅に於て眞言行を修する大威徳者、一切  
の事業を作せ、修行者先づ是の思惟を作すべし、我今此の念誦の室を淨めんと、白芥子  
を以て護摩の灰に和して、摧碎佛頂を以て加持すること一百八徧し、或は辦事佛頂を  
以て加持すべし、念誦の室に灰及び芥子を散せよ、即ち淨室と成らん、即ち此の眞言  
を以て淨餅の中に於て水を盛て加持すること一百八徧して四方に散灑せよ、或は自の  
眞言心を以てし、或は隨心を以て加持せよ、即ち處所を(一)攝受するに成る、摧壞佛頂  
の眞言を以て四枚の佉陀羅木の概を加持せよ、一百八徧、淨室の中に於て四方に之を釘  
てば、即ち曼荼羅界を結することを成す。

○無能勝佛頂の眞言 曩謨薄誨嚩視、瑟尼二合 沙也、一薩嚩相囉、二合 波嚩引爾多也、  
二唵、三奢麼也奢麼也、四扇引誦、五難引誦、六達麼囉惹、婆史誦、七摩訶尼你也、二合

一、三、二、四 亂脫

(一)攝受 猶ほ受  
用と言ふことし。

(二)持誦者云云  
四種灌頂の中の除  
雜灌頂なり。

薩嚩囉佉二合 娑駄寧、娑嚩引 訶引  
賢餅を以て香水を盛て加持すること一百八徧せよ、(二)持誦者用て自ら灌頂すれば、一  
切毗那也迦の障を離る。

此は是れ無能勝 佛頂の大眞言なり 能く諸の障礙を息む 常に息災を作し  
能く諸の惡夢を除く。

我今一切頂王の普通功能修行の法を説くに、少分を而も説かん、若し纒かに憶念すれ  
ば自身を護持することを成す、誦すること三徧して頂髻を結び、(三)灰或は白芥子を以  
て加持すること七徧して頭上に置けば大加護を成す、(三)縷を加持すること二十一徧  
し、結ぶこと二十一結して、臂の上に繫ぐれば、一切の災禍寒熱病等悉くみな消滅す、  
若し(四)奢麼奢那に住して誦すること一百八徧すれば、一切の怖畏の處に於て加護する  
ことを得、意に隨て(五)摩訶莽娑を貿易することを作すべし。又た酥を以て護摩するこ  
と一百八徧せよ、一切の障難を離れ、能く助伴を護る、或は白芥子を取て護摩するこ  
と一百八徧せよ、一切の諸障悉くみな息除す、定んで伏藏ある處を知ては乳を以て護  
摩すること一百八徧せよ、意を恣にして取り用ふるに、障難あることなし。又た阿蘇

(三)灰 護摩の灰。  
(三)縷 白線なり。

(四)奢麼奢那 屍  
陀林なり。  
(五)摩訶莽娑 大  
肉なり。